

博士論文

コツの言語表現の構造に関する発生運動学的研究

平成24年度

佐野 淳

筑波大学

目 次

緒論	1
第1章 研究の目的	1
1. コツの研究とことばの問題	1
2. 本研究の問題意識と研究目的	5
第2章 本研究の背景と立脚点	9
1. スポーツ科学におけるモルフォロジー思想の台頭 -マイネルの運動学 -	9
2. モルフォロジー運動学の今日的発展 -マイネルの運動学から金子の発生運動学へ -	12
3. 発生運動学の方法論的基盤	15
4. 方法論的特徴	17
(1) 動感観察一对象的思惟	17
(2) 動感交信一借問法	20
5. 本研究の独自性	21
第3章 本論の構成と主な資料	25
第I部 スポーツにおける“できる”とコツ	28
第1章 創発概念としての“できる”	28
1. “できる”の場面	28
(1) 運動発達による“できる”	28
(2) 練習による“できる”	29
a) “できる”の質	30
b) “できる”の障害	30
2. 能力表現としての“できる”	31
(1) “できる”の語源	31
(2) “できる”現象の評価と判断	32
3. “できる”という現象の本質的特性	34
(1) 努力性	35
(2) 洗練化志向性	37
(3) 不完全の完全／不安定の安定	38
(4) パトス性	39
4. コツとの出会い	41
(1) “できない”から“できる”へ -動きの分節化から構造化へ-	41
(2) コツとの「出会い」を意味する“できる”という現象	42
(3) コツの特性	44
a) 妥当性	44
b) 可能性	45
c) 配視性	46
第2章 スポーツにおけるコツの概念	48
1. スポーツにおける技術論の展開	48
2. 運動技術と科学技術との差異	50
3. 人間の行為に対する技術認識	51

4. 技術とコツ	56
(1) 技術認識にとって不可欠な”できる”とコツの関係	56
(2) コツの主観性と普遍性	57
(3) コツに技術性をとらえる現象学的根拠（現出性の理論）	61
(4) 「モノダ的なるもの」としてのコツ	63
第3章 第I部のまとめ	66
第II部 コツの体験と認識	67
第1章. コツの体験構造	67
1. 分極構造（パターン構造）	67
2. 体験の方向	70
3. 体験の強度	72
第2章. コツの図式	75
1. 体験図式と知識図式	75
2. コツの図式	78
3. コツの前言語的認識	80
4. コツを取り上げる意識の位相	82
第3章 第II部のまとめ	85
第III部 コツの言語表現の構造	86
第1章. 発話の基本構造	86
1. 発話における内言の存在と意味の役割	86
2. 発話内容を構造化する品詞	89
3. 発話における辞の機能	92
4. コツの発話文の特徴	96
(1) 断片的な表現であること	96
(2) 説明的な場面ではコツの内容は抽象化される	97
(3) パトス論理で語られること	99
第2章. コツの言語表現の意味論的構造	101
1. 意味論的表現	101
2. コツ表現時の単語の性質	103
(1) 機能性（関係性）	104
(2) 動感束縛性	105
(3) 意義素の変質性	107
(4) 虚構性	110
3. コツの発生と言語表現の間に介在する「意味形態」	112
4. 特殊なコープラの採用	115
第3章 第III部のまとめ	120
結論（コツの言語表現の構造研究の意義と今後の課題）	121
引用・参考文献	127

結 論

第1章 研究の目的

1. コツの研究とことばの問題

体育やスポーツの現場において、学習者や選手自身が自分の身体をどのように動かしたらいいのかという技術情報に関する研究、あるいは当該の運動の技術を抽出したりその技術を解明しようとすることは現場（選手や指導者）から要求される重要な研究である。このような研究において注意しておくべきことは、まずもって学習者にとって役立つ有用な技術情報というものは原理的に体験から遊離している情報（知識）ではなく、コツの次元にあるべき情報だ、ということである。

こうした立場からコツをテーマにした研究はこれまで多々ある。例えば、学習者自身がとらえたコツの内容や動きかたの内容、またその特徴を取り出そうとした研究（体操競技における平行棒のドミトリエンコという技の習得過程からそのやり方を解明しようとした研究 2006(1);同じく平行棒の前振上がり片腕支持1回ひねり倒立という技の筆者自身の私的なコツの内容やコツに対する考え方を明らかにしようとした研究 2006(39))、コツの発生と定着のプロセス（様相）を解明しようとした研究（鉄棒の前方支持回転やマット運動の後転とびの指導に関する事例研究 2000(162))、コツ指導の中で無意識に実行していた自分の動きのコツを意識上に現れるようにしていくこと（覚醒）の必要性に言及した研究（バドミントンのショットの指導例を基にした研究 2009(163)) などがある。また、ジュニア期の効果的な指導法の確立のための基礎資料を得ることを目的に、陸上競技や体操競技、水泳、柔道、バレーボール、ハンドボールなどの種目において、元一流選手や優れたコーチや指導者がそれぞれの種目の動きでコツや動きの意識（主観的情報）をどのようにとらえているかを調査対象者に対して面接を行い、想起内容、ことば、表現などの収集を行い、その結果をまとめた報告書も出されている（2002(117)）。さらに、コツを調査する際の質問紙作成に向けての問題点等をまとめた研究もある（2003(42)）。また、ドイツ語圏におけるこの種の研究では、コツ概念というより個人的な技術あるいは個人技法（individuelle Technik）という概念に関連して、運動のやり方の究明や改善を目指した研究がみられる（120, 171, 187）。

コツをテーマにした研究は、基本的に、力学などの自然科学的研究とは異なって、研究対象となった技や運動の要領や感覚上のポイントそのものの内容を事例を通して明らかにしたり、

動きに関する主観的情報の獲得や指導上の方法論的示唆を得ようとした研究であると言ってよいであろう。これらの研究では、当然、学習者や選手の語ることばを取り上げることが不可欠になってくる。すなわち、コツをことばで言い表す表現自体の本質問題と向き合わざるを得なくなるはずである。しかし、これまで取り組まれてきた多くのコツに関わる研究は、語られたことば自体をそのまま列挙したり、動きかたの内容を単に取り上げるにとどまり、その際のコツの意味核を取り上げ、それがことばとどのような関係をもっているのかという、コツとことばとの関係に踏み込んだものは皆無であった。少なくとも、上に述べたこれまでのコツに関わる研究では、コツの内容を示す際に言語表記を取り上げたり学習者や選手の発言内容に言及することはあっても、それらの言語表記や発言内容を言語という視点から、すなわち言語学的視点から取り上げたものはないし、上記以外の研究でも、コツに関わることばについて言語学的立場から論究した研究は見当たらない。

もちろん、運動と言語の関係については、これまでいろいろな立場から多くの学者によって指摘されてはいる。中でも、マイネルは『スポーツ運動学』（1960）において次のように述べている：「運動を合理的に把握していく第一歩は言語によって記述することである。この記述は単に運動を外面的に、写真さながらに正確に写し取るというだけでなく、同時に運動経過のある特徴を浮き彫りにし、また説明するものなのである」（98：149頁）。このことは、言語による記述（言語表現）が運動経過や運動の質的な差の特徴的描写にも、さらには運動の形態発生にも決定的な重要性をもっていることを意味している。

体育やスポーツにおける運動指導や運動習得の現場では、動きかた（やり方）をことばにして表したり、その内容をことばで理解できることはきわめて重要なことである。例えば、選手に宙返りを指導する場合には、指導者は選手に「もっと腕を引き上げるようにしてごらん！」などと、宙返りをする際のやり方を具体的にことばで指示するし、また選手もそうしたことばの意味するところを理解できることが必要である。もちろん、「運動をまったく知らない人にとっては、運動をことばで表されても、はっきりした像はとても浮かびはしない。・・・指導にあたって生徒に効果的に働きかけていくのには、ことばだけでは十分とはいえず、例示や説明が含まれなければならない」（98：150頁）。しかし、「ある新しい運動の習得がたいい言語による導入や課題設定によって刺激され、あるいは言語による説明や修正によって支えられ、かつ促進される」（98：370頁以下）ことは確かであり、運動の学習や指導、あるいは運動技能の向上にとってことばの果たす役割はきわめて大きい。

このような指導の際に用いることばと動きかたの関係については、スポーツ以外の世界でも

言及されている。生田は日本古来の伝統芸道や武道の世界における「わざ」¹の習得という観点から言語の果たす役割について考察し、「わざ」の習得においては、記述言語や科学言語とは異なる比喩的な表現を用いる「わざ」言語が介在している点に目を向けている（38：93 頁）。例えば、日本舞踊の教授プロセスでは、師匠は弟子に細々とした指示は一切せず、理論的な説明をするかわりに、簡潔で、しかも独特なことばを使うという。例を挙げれば、「一つの振りから次の振りへ移行する際の時間的経過についても師匠は『ためて、ためて』という表現を用いて一つの振りに時間をかけることの必要性を指示する。『もっと時間をかけて』あるいは『3秒間その振りのままで』といった記述的な言語表現を用いることは稀である。また日本舞踊では腰と膝の動きが重要なポイントになっているが、その適切な動きを指示する時にも、『腰をもっと入れて』とか『膝をやわらかく』といった表現を用いる。『腰の高さを何センチ位にして』とか『膝を何度角度にまげて』とは決して言わないのである」（38：94 頁）。

さらに生田は、バーノン・ホワードの声楽の教授プロセスを挙げて、「わざ」言語のもつ機能について説明している。それによると、声楽では“chest voice”や“head voice”、「目玉のウラから声をだしなさい」「目の下に棚を感じて声をだしなさい」「頭をつるようにして声をだしなさい」などの言語表現がなされるが、これらは技術的用語（craft language；生田はこれを「わざ」言語と呼んでいる）として、われわれが行為をする上ではきわめて重要な機能を有していることを指摘している。

動きかたないしやり方を指導するために、このような独特で特殊な言い回しや風変わりな表現、単語等が不可欠であるということは、一体、何を意味しているのだろうか。生田は、ホワードを引用して、これらのことばは教師の身体の中での感覚をありのままに表現して、学習者の身体の中かにそれと同じ感覚を生じさせる効果があり、そのような感覚を学習者が持てたときに声を出す生理機能がうまく働くと述べている（38：96 頁以下）。また金子はこうした特殊な言い回しや比喩的な表現などの運動指導上のことばのもつ役割について次のように述べている。「実際の運動学習の場では、身振りや示範やVTRなどの助けて運動の内容が説明されるだけでなく、言語表現によってその運動の要点が示されることは極めて多い。それは多少感覚的表現があり、他人にはさっぱり意味の通じない隠語的表現や比喩的表現が多いけれども、その説明を聞いている者は『筋感覚的運動分析器の助けを借り、また、その言語を通して自分自身の実施意識（Vollzugsbewußtsein）をもつことによって』理解でき、自分の運動を『対象

¹ 生田が用いている「わざ」という概念は、基本的には日本古来の伝統芸道、武道において習得したり教授したりする身体技能としての「技」であるが、こうした狭い意味の「技」の理解を超えて、それは習得対象全体を指しているという（38：8 頁）。

化』(Vergegenständlichung)して学習しているのである。確かに、運動の空時分節だけでなく、力動分節についても言語表現をとることはむずかしいけれども、たとえそれらが隠語的表現であったり、単なるかけ声のような感覚的表現であっても運動の学習の現場では極めて大切にされる内容であることは蝶々するまでもない」(51:295頁)。ここで重要なことは、こうしたことばは「学習者の意識に現れる五官感覚や運動体験と常に結びついて用いられるときだけ、運動修正に役立つのであり、「現実と何ら関係のない空虚な形式的なことばが使われるのでは何の役にも立たない」(98:390頁)ということである。

このような特殊な言い回しや表現だけでなく、現場で指導者が用いるごく普通のことばや表現であっても、それらは学習者に適切な運動体験をさせるために用いられなければならない。指導という場面において用いられる指導者が発するこうしたことばや表現は、もちろん指導者自身が“できる”や“できた”ときの感じを単に言い表そうとしたことばではない。そうではなくて、指導者が学習者の動きかたを分析してみて、「こうすれば学習者はできる(のに)」とか「そうしないから・・・できない(のだ)」というようにして、指導者が第三者の立場から見えて出てきた表現であり、またそれは学習者が“できる”ようになるための可能性に向けられたことばや表現でなければならない。こうした場面で発言される指導者のことばや表現を、金子の促発概念に従って(69:83頁)、ここでは促発言語と呼んでおきたい。

一方、実際に身体を動かし、動きの感じに直接触れている学習者が自ら語る自らの動きかたに関することばはどんな性格のものだろうか？学習者自身が自己の動きかたに関して語ることばは、まさに“できる”“できない”ということを実際の直接体験を通してコツ次元で言い表そうとしていることばであることは明らかである。この学習者によって語られるコツに関わることばも、同じく金子の用語に従って(69:83頁)、ここでは創発言語と呼んでおこう。

学習者がこの創発言語で表そうとしてそこでとらえているコツは、促発言語で表される他者(指導者、コーチ、自分以外の学習者など)のとらえている内容とは次元を異にしている。なぜなら、創発と促発というそれぞれの次元は基本的に異なっているからである。この場合、ベルグソンの直観概念²を導入して考えてみると、金子の言う創発という概念はまさにこの直観次元にある概念である。このことは、学習者自身が取り上げる動感³は直観の次元に属しているが

² ベルグソンの直観概念はゲーテの対象的思惟と関係づけられる概念であるが(緒論の第2章4参照)、この直観概念については第I部第2章4の(2)において改めて取り上げられ考察され、そこでコツとの関係性について言及される。

³ 動感という語は現象学者フッサールのいうキネステーズ(運動感覚)概念に相当するものであり、未来や過去を私の現在に架橋できる<動く感じ><動ける感じ><動きの感じ>を表す発生運動学独自の用語、かつ発生運動学の中核的キーワードである。これに従えば、例えばじっと座っているときのすわり心地も走っているときのスピード感覚も動感という概念でとらえられるのである。発生運動学では、この「動感」概念から、動感意識、動感運動、動感形

故に、そこで発せられる学習者の創発言語もこの直観から出ていることばであることを意味する。すなわち、学習者自身が自分の動きを浮き彫りにして語るコツは直観次元にある、ということができる。

発生運動学では、コツは自らの動感意識に現れてくる課題解決のための動きかたに関する運動感覚的な「有意味な核」(67: 258 頁以下)と理解されるが、われわれがこの「有意味な核」と向き合うことになるのは、直観において発生する、いわゆる身体知(とくに自我中心化身体知=コツ身体知)(71: 52 頁)が機能しているときである。このようにして、学習者の創発言語は、直観次元にある身体知を背景にしたコツを語ることばとしての性格を有することになる。

また、現場では、運動が“できる”ことを目指す学習者の運動課題の最善の解決法(51: 294 頁)としてのやり方に対して“技術”ということばが用いられることが多い(「彼の踏切技術はすばらしい!」)。ここで使われている技術ということばは図形的なかたちとしてのフォームを指して言うのでもなく、また単に個人的なコツを指して言っているのでもない。いわば自我中心化身体知としてのコツ身体知が有効に機能するところで現れてくる“よい動きかた”という意味で使用されていると思われる。このように考えると、この場合の技術ということばはコツそのものではないが、しかし、コツ次元で理解されなければならないものとなる。

本論における技術概念は、以上の理由から、コツ身体知(自我中心化身体知)が機能することで意味をもつ学習者や選手の立場から取り上げられる動きかた(やり方)と解され、それは身体知を背景に語られるコツに関わる発言、すなわち創発言語との関係をもつ。このことは、本論で用いる技術概念が科学技術で言うところの技術概念ないしは精密な測定機器を用い、バイオメカニクスの立場から解明されるべき動きの効率的なメカニズムというような科学的な技術認識から区別されることを意味している。

2. 本研究の問題意識と研究目的

学習者自身によって語られるコツは、言うまでもなく、学習者自身にしか分からない単語や表現を用いているとともに、それは主観的、感覚的、感情的である。また学習者が語ることばは、学習者自身が意識的にも無意識的にも関わりをもつコツのすべてを表わしているわけではない。当然ながら、自分が重要だと思っているコツを誰かに教える、伝える、書き残す必要がない限り、自ら発することばの意味は自分だけが了解していればそれでいいのであり、またそこで用いられることばや表現が主観的であっても、また感覚的であっても、それで一向に構わ

態、動感言語、動感メロディーなどの独自の用語が用いられる。

ないはずである。ただしその場合には、その人のそのコツは当然、目の目を見ないものとなる。

もちろん、コツの内容をすべてことばにして表すことはできない。動きに関する内容をことばにして表すことの難しさについて、金子は次のように述べている。「個人の卓越した技能がことばに表すことができなくて、その人と墓場に一緒に入ってしまうのでは技術伝承の立場から大きな損失といわれざるをえない。しかし、技術の運動経過をことばで完全に言い表すことは極めて難しいことは周知のことであり、武道の奥義書にみうける〈以下口伝〉の文字はこの辺のことを表しているものと思われる。・・・技術は単に外形的な恰好だけでなく、すなわち空時的分節だけでなく、力動的分節も取り上げられて、一つの運動ゲシュタルトを形づくっており、いわゆる勘どころといった微妙なさばきまでも適切にことばで表すことは不可能に近い。マイネルもいうように運動を記述することはシンフォニーをとってもことばで表し切れないことと同じなのである」(48:59 頁以下)。

このように動きをことばに表すことの難しさを指摘しながらも、金子は動きかたを表すことば(技術の運動表記)のもつ重要性について次のように述べている。

「例えば、〈腰を曲げる〉という場合と〈腰をとる〉〈腰を引きこむ〉という場合、前者が運動から遊離した形の描写であるのに対し、後者は運動におけるその形のみならず大切な機能を表してい」(48:60 頁)る。すなわち、運動の練習や指導の現場では、胸をふくむ、腰を釣る、つかける、噛む、開く等々、一般人にはおよそ何を言っているのかわからない奇妙なことばが学習者や指導者によって飛び交うが、これらのことばの用い方や表現のし方の差は運動の課題達成を左右してしまうほどの力をもつ。言い換えれば、学習者や選手が向き合うことになる動きかたとしてのコツそのものの差、あるいは技術として取り上げる動きかたの差は、ことばを発する際のその人が用いることばや表現の差となって現れてくるのだと言える。金子に従えば、コツの言語表現には課題達成を左右するきわめて大きな機能性がある。

逆上がりができる、ボールを正確にキックすることができる、クロールで泳ぐことができる、卓球でスマッシュを打つことができる、剣道で「小手一面」を打つことができる、柔道で大外刈りができるなど、スポーツにおける種目固有の、またその都度その都度の場面で学習者や選手が対峙することになる運動の課題の解決には、その基底に身体知として、コツだけでなくカンも機能している。例えば、「ボールを投げることができる」という場合、そこには「投げること」に関わるコツが機能しなければならないと同時に、そこにはどんな状況のときにどこにどのタイミングで投げたらいいのか、というカンも働いていなければならないのである。

金子によれば、コツとカンはそれぞれ自我中心化身体知(コツ身体知)、情況投射化身体知

(カン身体知)を意味する。すなわち、コツは「私の動ける身体の意味核を感じ取る身体知」(70:25 頁)、また「私の身体それ自体に居合わせている身体知」である。いわば自分の動きをどのようにしたらいいかという自己のやり方に関する身体知である。またカンは本来「比べ考える」という意味内容を持ち、「いろいろ変化する運動状況に応じて、どちらがよいかを考量し、判断する意味をもつ」(70:25 頁)。すなわち、カン「私の身体とそれを取り巻く動感志向の状況との関わりのなかで、動きかたを選び、決断して実行に移せる身体知」(70:25 頁)ということになる。

こうしたコツとカンは私の自我身体の中で発生するのであり、創発身体知の表裏的な志向体験(70:25 頁)という性格を有する。すなわち、コツは身体中心化作用でその姿を現し(70:24 頁)、カンは身体を取り巻く状況に動感志向を投射化するとき前面に出てくる。すなわち、一方が前面に出ているときは他方は背景に沈むという差異化構造を有している(69:327 頁)。このことは、コツの問題はコツだけの問題ではなく、その背後でカンとの関係を有していることを意味している。コツとカンの間にはこのような差異化構造があり、その意味では、コツが言語表現されることがカンと無関係であるということとはできないが、本研究ではこの差異化構造の存在を前提とした上で、金子も技術の運動表記として取り上げているコツの言語表現に問題を限定して考察を行うものである。

このコツの言語表現の課題達成に対してもつ機能性は、コツと創発言語との間の緊密な関わりを意味する。このことをすでに述べた、技術は創発言語との関係をもつという本論の技術認識と合わせて考えると、技術はコツに関わる創発言語の分析を通して解明されるという考え方が出てくる。

スポーツ技術の研究には、これまで、動き方の効率的、合理的なメカニズムの解明を目指して、自然科学的立場から、また因果法則の見地からそれを解明しようとする研究が確かに多かった。これに対して、本論の問題意識と着眼点は、スポーツにおける技術はコツ次元にあり、それは創発言語に反映されているととらえるところにある。すなわち、技術は実際に運動を行った人の意識や感じから、すなわち直観世界の解明から示唆されるべきであり、技術の本質は実際の運動意識にあり、それが言語に反映される、というのが本研究の基本的立場である。

こうした、技術とコツと創発言語の関係に着目して、本研究では、創発言語の分析をもって学習者や選手の立場からの良い運動のやり方(技術)を解明しようとする技術分析法の構想が視野に入れられている。すなわち、本研究はこの創発言語の分析に基づく技術分析法という、技術分析の新たな方法に道を拓くことを目指している。しかし、この創発言語の分析を通して

技術を解明していこうとする新たな技術分析法を構築するためには、まずもって、創発言語の構造、すなわち、コツの言語表現の構造を解明することが必要である。このようなコツの言語表現の構造はこれまで解明されていない。

以上のことから、本研究は、発生運動学と言語学の立場から、学習者が語る創発言語としてのコツの言語表現の構造、すなわち、コツの言語表現時の表現の仕方やことばの使い方の構造を明らかにすることを目的とするものである。

なお、本研究の特徴は学習者の創発言語を発生運動学における動感言語の問題圏の中に位置づけて取り上げている点、またその動感言語を言語学的に分析していこうとする点にある。

第2章 本研究の背景と立脚点

ここでは、本研究の依って立つ発生運動学の理解に資するために、この学問の成立過程と学問上の特徴を述べるとともに、発生運動学における言語論（動感言語論）の位置づけを示して、本研究の意義を明らかにしておきたい。

1. スポーツ科学におけるモルフォロジー思想の台頭—マイネルの運動学—⁴

1960年、旧東ドイツのマイネルの“*Bewegungslehre*”（『スポーツ運動学』）が上梓された。この本は、モルフォロジー的立場（運動形態学的立場）に立っている点で、それまでのキネシオロジーという運動の学問とは大きく異なっていた（モルフォロジー運動学の誕生）。この点に関しては、岸野が『序説運動学』（1968）の中で研究史的立場から詳しく考察している（78）。

岸野によれば、キネシオロジーとマイネルの運動学との相違は、前者が力学的・生理学的な応用学、いわゆる自然科学系の学ないし運動の科学的基礎づけの意味に解される身体運動学であるのに対して、後者は「単なる既存科学の応用ではなく、運動の質的特色を捉えるためのカテゴリーにもとづく」運動学であるという点にあるが、それはマイネルの運動学が「学問研究として上から開拓されたものではなく、下から問題の所在をつきとめることによって開花した研究であった」（78：19頁）からである。

しかしこのマイネルの運動学の特徴は、何といてもスポーツ運動を行為性の視点から捉えて（98：98頁以下）、運動モルフォロジー（運動形態学）という方法論を用いている点にある。マイネルは“*Bewegungslehre*”の中で、この運動モルフォロジーについて詳述しており、また、小論の“*Morphologie der Bewegung*”（1963）の中でも運動モルフォロジーの課題、方法と研究法、限界、意義について論じている（97：S.111ff.）。モルフォロジー（*Morphologie*）をギリシャ語の意味に解し、形態（*Formen*）と形態形成（*Formenbildung*）に関わる学と捉えるマイネルによれば、運動モルフォロジーとは、スポーツの運動形態の発生と絶え間ない転成、すなわち粗形態から技術的な完成形態までの可視的な運動、またそうした運動の特徴を研究し、最善の運動実施の質的徴表（局面構造や運動リズム、運動弾性、運動流動など）を確認し、明らかにしようとする「かたちの学問」（*Formenlehre*）（97：S.111）である。さらにマイネルは、運動モルフォロジーにおいてスポーツ運動を捉える方法として印象分析を重視し、映画撮影法

⁴ この章は、拙論「ゲーテ形態学とスポーツにおける発生運動学的運動分析」（文献158）の前半部分（1および2）を加筆修正したものである。金子は、運動発生という出来事を扱う実践的学問を提唱したが、これは発生目的論的立場をもつ運動研究のことであり、その意味が理解されていることを前提に、発生論的身体運動学や発生論的運動学、さらに発生論という語を簡略化して＜発生運動学＞と名づけられることを述べている（69：83頁）。本論では、金子のこの運動理論を＜発生運動学＞という用語で統一する。

やフィルム分析法、光跡撮影法などを組織的に用いて他者の動きの映像を把握し記述する他者観察と、自己の動きを主観的な形で報告したり分析したりする自己観察を挙げている。この場合、長年の訓練と豊富な運動経験は自己観察内容に高い信頼性を付与するとともに、他者観察をも本質的に補うことになる(97 : S.112)。

マイネルによれば、このような運動モルフォロジーはスポーツの指導者にとって理論的にも実践的にも大きな意義をもつ。というのも、運動がうまくいっているのか、失敗しているのか、流動的なのか、ぎこちないのか、リズムカルな動きなのか、そうでないのか、やわらかい動きなのか、硬直した動きなのかなどを取り上げることはスポーツ教育者にとって必要不可欠であり、生徒の動きを見て、それをモルフォロジー（形態学）的に捉えることによってしかそのようなアプローチは可能にならないからである(97 : S.112)。マイネルが現場における理論と実践のためにスポーツ運動のモルフォロジーの不可欠性を強調したのは、そのためである。

他方、形態学（モルフォロジー）と運動を結びつけた運動モルフォロジーという学問は、オランダの生理学者・心理学者・現象学者であり、スポーツ科学の世界にも多大な影響を及ぼしたボイテンディクが人間の運動の一般理論の構築を目指す中で言及していたものだった。マイネルがスポーツの世界で取り上げる以前のことである。

ボイテンディクは彼の研究活動の中期の大著である『人間の姿勢と運動の一般理論』（1956）の中で、運動理論における運動モルフォロジーの不可欠性、その対象、性格について、次のように述べている。「運動というものはゲシュタルトの意味におけるかたちをもった統一体として行われる。だから、その運動はすべての生命あるかたちと同様、分化、部分と全体の関係、かたちの類縁性、さらにかたちの発生というような、運動のもつゲシュタルト徴表に基づいて研究せざるを得なくなる・・・このことから運動理論にはすでに〈運動モルフォロジー〉が含意されている。運動モルフォロジーの対象は、たとえメロディーのようにはかなく消え去るものであっても、かたちをもって行われる運動である。運動のかたちというものは、じかに直観に示されるから、その構造徴表に基づいて研究されるべきものである。このような研究は、根本的に概念－因果分析とは異なるものである」。(12 : S.41)

マイネルは、ボイテンディクのいう人間の運動のモルフォロジーを評価してはいたものの、それが、記述もできなければ概念化もできない、また空間的にも時間的にも表すことができないという不可解な「主体（Subjekt）」概念を導入し、「運動の〈本質〉の認識に肉迫するために、直接の熟視や直観的観察だけ」(98 : 86 頁)に依拠していることを根拠にして、弁証法的唯物論の立場からこれを批判している。また、ポーランドのアンジェ・ボールもボイテンディク

のこの本に関する哲学的考察のなかで（1957）、その理論の独創性とその重厚さに高い評価を与えている一方、モナドや純粋に形而上学的に措定される何らかの点としての主体概念をボイテンディクが運動学の中に関係づけたことを熾烈に批判している（193：S.1109ff.）。つまりマイネルが“Bewegungslehre”の中で当時主張したスポーツの運動モルフォロジーは、ボイテンディクが重視していたこうした主体概念（131：S.58f.）や自己運動といった実存主義哲学の概念を基底に据えたものではなく、印象分析さえも科学的方法として遂行されるべき、認識獲得の第一段階として位置づけられていたものであった。

このようにマイネルが、当時、ボイテンディクの運動モルフォロジー思想を批判しなければならなかったのは、イデオロギーの違いからだったと金子は分析している。マイネルはスポーツの運動理論が現象学的、形態学的思考を基底に据えた理論でなければならないことを十分理解しており、そのモルフォロジー的な考え方と自然科学的な運動認識の間には決定的な断層があるにもかかわらず、それを統合しようとしたマイネルの論理矛盾は、共産主義社会の思想的制約によるものであり、マイネルの本来の研究意図は、「〈覚え - 覚えさせる〉という関係系のなかで、そのプラクシス科学の支軸に形態学思想を据える」（67：188頁）ことにあった。マイネルの遺稿（1998(100)）からも読み取れるように、その形態学的思想は、まさにゲーテに思想的源流をもつモルフォロジーであったという。

イデオロギーや認識論に違いこそあれ、後に西側のベルネットやフェッツが著した体育や運動学に関する専門用語集では、マイネルやボイテンディクの著書が参考文献として挙げられ、運動モルフォロジーが項目として取り上げられるまでになった（9：S.37：15：S.53f.）。このようにしてモルフォロジー運動学は、当時、ドイツでは新しい運動学の台頭として一大センセーションを巻き起こし、キネシオロジーやバイオメカニクスと対比する形で、運動研究の新しい萌芽として、スポーツ指導の実践現場に好意的に受け入れられていった（67：187頁）。マイネルが取り上げた問題視点（運動質論、学習位相論など）は当時は新しい問題領域として歓迎され、運動モルフォロジーという研究方法論に支えられたこの運動理論は、現場の指導者の活動を支える理論となったからであろう。マイネルの“Bewegungslehre”に促されて、モルフォロジー的考察法に関する解説やモルフォロジー的視座に立つ運動研究がやがて陸続と発表されることになり、運動モルフォロジーはスポーツ科学において重要な方法ないし学問領域として位置づけられるようになったのである。

このように運動モルフォロジーは体育やスポーツの世界で市民権を得るようになった。ただ、マイネル自身はモルフォロジーを、前述したように、ギリシャ語的意味で理解して形態と形態

形成に関わる学問として捉え、単に静的な形態を扱うものではないとはしているものの、それ以上この語の学問論的論議に踏み込んではいない。他方で彼は、方法論上の問題として、運動モルフォロジーはまずもって運動の形態発生のモルフォロジー的把握や記述を行うものであり、科学的研究の第一段階であるがゆえに、形態発生の原因と諸条件へのさらなる問いかけに関しては他の学問領域（生理学や力学などの既成科学）を必要とするとして、運動モルフォロジーの学問上の限界を指摘している(97 : S.112)。

マイネル自身がこのように考えていたからこそ、彼のモルフォロジー運動学は後に弟子たちのもとでサイバネティクスの運動学へと方向を転じてしまった。すでに述べたように、旧東ドイツという共産圏で研究活動を行っていたマイネルにとって、西側のボイテンデイクがすでに提唱していた運動モルフォロジーという方法論を核にして、スポーツ運動学を提唱するためには、マルクス＝レーニン主義を唱え、観念論的学問ないし西側の学問を批判し、弁証法的唯物論の立場に立つことの表明がどうしても必要であり、そこには思想的制約が重くのしかかっていた。マイネルが基本的に、モルフォロジー思想の本質的な学問論に立ち入ることがなかったのは、そのためであろう。

2. モルフォロジー運動学の今日的発展 —マイネルの運動学から金子の発生運動学へ—

スポーツ領域においてドイツで誕生したマイネルのモルフォロジー運動学は、日本にはまず岸野によって紹介された(78)。その後、金子によってその理論が日本の体操競技の世界で受容されるようになると(47 : 44 頁)、実践的な運動理論として支持され、その後幅広く日本のスポーツ科学界にも受け入れられるようになった。今日、「運動学」が体育の教員免許取得上、必修科目となっているのはその証左である。

日本のスポーツの世界で〈モルフォロジー〉という名辞がはじめて登場したのは、日本体操協会発行の研究部報 10 号に掲載された体操競技における新技開発や新技術発生の問題を取り上げた金子の「技の発展におけるモルフォロジー的一考察」(43)においてだった。さらに金子は、翌 1967 年、体操競技の国際的専門雑誌“Olympische Turnkunst”に“Zur Morphologie der Turnkunst”(44)を発表し、国際的に体操競技の技の研究に新しい視点をもたらした。金子はその後一貫してマイネルの一般理論としての運動モルフォロジーの立場に立ち、それを体操競技モルフォロジーという形で展開して、技の構造研究や新技術開発の発生に関する研究を次々に発表していったが、こうした研究活動によって技のモルフォロジー的研究は次第に国際的にも認知されるようになり、1970 年代当時の「国際体操連盟の審判員研修集会やコーチ会

議では、モルフォロジー的構造分析や技術開発の発生論的論議はすでに一般的になっていた」という(60 : 6 頁)。

金子はこのようなモルフォロジー運動学が日本に受け入れられるようになった契機として、モルフォロジー運動学が日本の古典芸能における名人芸の伝承法をめぐる固有の心的態度と接点をもっていたこと、当時のスポーツ（とくに体操競技）の競技力向上を目指す活動にマイネルの運動理論が実践理論として示唆に富む内容をもっていたこと、そして 1960 年代以降の日本の思想界における現象学的－人間学的な思想の流れの中でゲーテの自然研究が脚光を浴びはじめ、スポーツ科学においてもこの時期、モルフォロジー的思考過程に関心が向けられ始めていたことの三点を挙げている(66 : S.114ff.)。

マイネルの“*Bewegungslehre*”が『スポーツ運動学』と題して邦訳・出版されたのは 1981 年であるが、その翻訳を手がけた金子はマイネルの「運動モルフォロジー」という語の巻末の訳者注において、「モルフォロジー」という語がゲーテの造語であることに言及し、マイネルの著書等からはその関係がはっきりとは読み取れない運動モルフォロジーとゲーテ形態学とを関係づけている。また金子は「ゲーテが〈眼の人〉であったと同時に、マイネルはスポーツ運動の現象形態を直視する〈眼の人〉であった」(98 : 451 頁)ことを指摘し、マイネルが主張したモルフォロジーは単なる生物学における形態学ないし生物学の一部門の静的な形態学の意ではなく、ダイナミックなゲーテ形態学を意味していたことを強調している。その上で邦訳では静的な感を拭いきれない〈形態学〉という訳語を使わず、*Morphologie* を敢えてそのまま〈モルフォロジー〉としたという(98 : 451 頁)。

このマイネルの“*Bewegungslehre*”は何版か版を重ねたが、その後コンピューターなどの科学技術の発達によってサイバネティクスや情報科学が主流を占めるようになってくると、時代の流れはより客観的で科学的研究を重視するようになっていった。こうして次第に、マイネルのモルフォロジー運動学ないしモルフォロジー的研究方法論は科学論の立場から批判にさらされるようになってくる。マイネルの“*Bewegungslehre*”では、現象学的－モルフォロジー的立場が強調されすぎている、またそれがどんなに実践に役立つものであっても因果律的に説明できる方法と組み合わせられるのでなければ研究としては不十分である、などと批判されるようになったのである(5 : S.524ff. : 20 : S.385)。

そのためマイネル没後に弟子のシュナーベルが中心になって改訂した 1972 年の“*Bewegungslehre*”の改訂版では、モルフォロジーということばはすっかり消え去り、サイバネティクスや情報理論を取り入れることによって、いわゆる「運動の科学」色が強く押し出

されることになった(67:192頁以下)。すなわち当初の問題領域こそ残されているものの、改訂版の“Bewegungslehre”はいわゆる「科学的」と言える枠組みに衣替えされて、1960年の初版当時のモルフォロギー的立場に立つ運動学ではなくなってしまった。それはモルフォロギー運動学の深化を意味していない。改訂版は、マイネルが敢えて現場の理論と実践の問題解決のために提唱したモルフォロギー思想や方法論を「科学」という立場から、研究としては価値がないとして否定してしまった。それは、ゲーテの色彩論やモルフォロギーといった新しい研究地平が長いあいだ作家の片手間の趣味程度にしか見られず、世間から認められなかった事情と軌を一にはしていないだろうか(60:1頁)。しかし、ゲーテの独創的な自然科学思想⁵が今世紀に入って〈ゲーテ・ルネサンス〉を引き起こし、これまでの科学観にパラダイムの転換を迫るほどに注目を集めるようになったように、モルフォロギー運動学もやがて再び注目されるようになるのである(60:1頁以下)。

運動モルフォロギーが衰退を余儀なくされていたとき、金子はゲーテ・ルネサンスの流れにも支えられて、マイネルの初版本に展開されているモルフォロギー思想の奥深さに目を向け、それを復権させるべく、そのマイネルのモルフォロギー思想をゲーテ形態学と明確に結びつけ(68:3頁)、マイネルのモルフォロギー運動学を再生させようとした。さらに金子は彼の運動観察論(1987)の中で、スポーツ運動は物体運動ではなく、全体性心理学者のクレムによって提起された身体による行為としての〈運動ゲシュタルト〉であることを強調している(57:118頁)。

こうして金子によって世に問われることになった運動理論は、金子が発生運動学ないし発生論的運動学と呼んでいるものであり、それは〈運動発生〉という事態を扱う発生目的論的立場に立つ運動学である(69:83頁)。またこの発生運動学は、指導者が学習者に動きを伝え、学習者がその教えを受け動きを発生させるという、いわば「伝える - 承ける」という営みに関わる運動伝承理論としての性格をもつ。その中で、金子は学習者が自ら動きかたを生み出すことを〈創発〉、指導者がその学習者の動きかたの発生を促すことを〈促発〉と呼んでいる。

金子によれば、この発生運動学は、狭義の発生論、構造論、伝承論からなり、その心柱をなしているのが現象学的な動感(キネステーゼ)論である(69:93頁)。この動感論はマイネルが晩年に取り組み遺稿に託し、感覚論ないし感性学(Ästhetik)として前面に打ち出そうとした感性学的運動理論と密接に関わっている。金子は動感を強調して、発生運動学を運動感覚発

⁵ ゲーテの自然研究は〈緑の自然科学〉とも言われ、いわゆるサイエンスとしての自然科学的研究ではない。その方法は徹頭徹尾観察することであった。この方法によって、ゲーテはニュートンに代表される当時の自然科学とは一線を画す、植物学、動物学、色彩論、気象学、鉱物学などの学問を独自に展開した(文献17)。

生論ないし動感発生論とも呼んでいる(67 : iv 頁 : 69 : ii 頁)。なお、金子は当初(1995)、この発生運動学をゲーテの形態学思想との結びつきを強調した運動理論として、「スポーツ・モルフォロジー」と呼んでいた(60 : 1 頁)。

このスポーツ・モルフォロジーは、マイネルのモルフォロジー運動学においては前面には押し出されることのなかったゲーテ形態学を根底に据えた運動理論であり、私見では、マイネルのモルフォロジー運動学を深化・発展させたものにとどまらず、マイネルのモルフォロジー運動学を基底に据え、金子独自の問題意識から結実した、国際的に見ても独創的な実践的運動理論にほかならない。マイネルのモルフォロジー運動学は、国を越えてその本質が日本へと受け継がれ、発展させられたのである。

金子の最近の著書である『わざの伝承』(2002)や『身体知の形成』(2005)のなかには、ゲーテのモルフォロジー思想を根底に据えた新しい運動理論の登場を見てとることができる。また、金子はこの発生運動学の基本的な考え方を、1998年、ドイツのライプチヒ大学で開かれたマイネル誕生百周年記念シンポジウムの基調講演において、“Zur Bedeutung der ästhesiologischen Morphologie von Prof. Kurt Meinel”(マイネル教授の感覚論的モルフォロジーの意義)と題して発表している(67 : 200 頁)。このシンポジウムではマイネルのモルフォロジー運動学の新しい解釈である金子のこの運動理論に理解を寄せる研究者も少なくなかったという。ちなみに金子はその後、この基調講演の内容の基になっていた草案原稿をスポーツモルフォロジー研究 6 号(2000)に発表している(“Ästhesiologische Bewegungsanalytik des Sports”(スポーツの感性学的運動分析法))(65)。

その後、金子は『身体知の構造』(2007(71))と『スポーツ運動学』(2009(72))を江湖に送り出し、運動の実践現場およびスポーツ科学における発生運動学の重要性、不可欠性を世に問うている。

3. 発生運動学の方法論的基盤

このように、発生運動学は基本的にはゲーテのモルフォロジー思想を基底に据えた運動理論である。しかし金子はさらに、フッサールやメルロ・ポンティなどの現象学の理論を彼の運動理論(発生運動学)の柱に据えただけでなく、ベルクソンの純粹持続の運動論やボイテンディクの機能運動学、ヴァイツゼッカーのゲシュタルトクライス理論(運動形態の発生論)、シュトラウスの感覚論(『感覚の意味』)等を慎重に検討して、それらの諸理論もスポーツの実践理

論形成に重要な基礎を提供しうるものであるという確信に到達している(68:3頁)⁶。さらに、金子は全体性心理学のゲシュタルト理論やパラージの知覚論、ビンスヴァンガーの現象学的人間学に代表される精神医学的理論なども取り込んでいる。また、金子は「体育学習のスポーツ運動学的視座」において運動学習論を展開しているが、そのなかでスポーツ運動学は現象学的人間学が基礎になるとして、現象学的人間学の立場に立つ精神医学者のビンスヴァンガーの考え方を取り入れて論を展開している。運動の学習あるいは運動の指導では、生徒と教師、選手とコーチの間に感覚運動性の共鳴がなければならないと強調し、両者のチャンネルが合わなければならないと主張する。つまり、指導者には学習者の運動の感覚を理解することが重要になるという。このために、金子は自らの理論のなかに主体を重視する精神医学的理論も取り込んでいる。すなわち、金子は哲学的方法論をもって学問としての理論的枠組みを固め、スポーツ運動に関する現場に根差した実践理論(創発や促発という運動の発生に目を向けた指導ないし伝承の理論)として発生運動学の構築を目指したのである。

この発生運動学を構築する過程で、金子は上記の諸理論の中心概念を次々に取り込み、それらを発生運動学の理論体系の中心に位置づけている。全体性心理学者クレムが提起した運動ゲシュタルト(Bewegungsgestalt)、コールの運動投企(Bewegungsentwurf)、ボイテンデイクが注目したギョームの運動メロディーやメルロ・ポンティの運動メロディー(Mélorie kinétique)、パラージの潜勢運動(virtuelle Bewegung)、フッサールのキネステーズ(Kinästhesie)などを、次々に自身の理論の中に吸収していったのである。さらに、(共通感覚的)図式技術、分割できない運動感覚的な統一として、まるごと身体化されているコツという意味の「モナドコツ」(67:265頁)、潜勢自己運動、創発や促発——たとえば創発身体知(覚える身体知)や促発身体知(教える身体知)——など、発生運動学独自の用語や概念も多数提唱している。またスポーツの運動形態(動きのかたち)を、物理学的座標系における運動概念やジョン・ロックのいう精密幾何学的なかたち概念と混同されるのを回避し(66:S.126)、行為としての志向的運動体験を特徴的に示すために、キネモルフェー(kinemorphe)という用語を用いたり(66:S.125:61:373頁)、単なるかたちの学問ではなく、ゲーテ的な意味の運動モルフォロジーを表すべきときにはキネモルフォロジー(Kinemorphologie)(61:367頁)の語を使ったりして、発生運動学を特徴づける用語や概念を精力的に打ち出すにいたった。こうして金子はゲーテの形態学思想を基底に据えた発生運動学を提唱するとともに、それをさらに

⁶ 金子は自らのことばで、形而上学的、人間学的、現象学的な厳密な分析に基づくこれらの運動理論は、スポーツの実践ないし伝承現場に重要な基礎を提供していることに気づいたと述べている(68:2頁)。

現象学や形態学や人間学によって基礎づけ、スポーツの現場における運動学習や指導の具体的なして本質的な諸問題に迫ろうとしたのである。

現場の運動問題を哲学的な方法論を介して理論化することは、従来のスポーツ科学からすれば許しがたい異端児的なアプローチと受け止められるかもしれない。少なくとも今日のスポーツ科学の研究方法論は自然科学色が強く、動作分析にしても学習論にしても自然科学的、サイバネティクス的な分析手法や統計処理が重要だと見られているからである。しかし「科学的」、「客観的」であることを標榜するこうした立場は、これまでスポーツの領域で何度となく問題になった理論と実践の間の乖離を乗り越えることができなかった。

このようなスポーツ科学の現状を憂慮した金子は、スポーツ運動の学習、習得問題や指導問題、その研究方法論は決して現場的一実践的な世界から遊離してはならないと、事あるごとに主張していた。ゲーテの形態学思想やフッサールの現象学などの哲学的理論を背景に運動理論を構築しようとしたのは、金子がまさに運動の現場に密着した理論を目指していたからであり、金子はわれわれのスポーツ現場の運動習得や運動指導の問題を解決していく上で、こうした哲学的理論が不可欠であるという認識をもっていたのである。

4. 方法論的特徴

(1) 動感観察 - 対象的思惟⁷

発生運動学における運動の分析で、方法上重要になるのは観察である。発生運動学の立場からすると、観察は、動きの状態を外部視点からとらえているとしても、事実の確認や研究の第一段階に止まるものではない。発生運動学では観察は問題に対する炯眼、切迫した強い関心、飽くなき注視を通して、観察対象となる動きそのものの側から動きの核心を掴もうとする動感観察を意味している。

金子は「運動観察のモルフォロジー」(1987)において、指導者の運動観察の方法論に言及している(57)。運動の指導に際して重要なことは、学習者の活動をより良い動きかたになるように導くことであり、そのために運動指導者は、学習者の動きの客観的な状態だけでなく、そのときの動感意識をも捉えなければならない。

動きの客観的状态に関しては、指導者はそれを空間図形の問題として直接眼で捉えることもできれば、ビデオカメラなどの機器を用いて、それを外的な〈像〉や〈かたち〉としてより精

⁷ この項は、拙論「ゲーテ形態学とスポーツにおける発生運動学的運動分析」(文献158)の「4.発生運動学的技術分析に生きるゲーテ形態学の方法論」の「(3)ゲーテの対象的思惟という方法論を基底に据えた技術分析」を加筆修正しまとめ直したものである。

密に捉えることもできる。一般に学習者の動きは、そうした客観的な空間図形の問題として捉えられることが多いが、しかし実際の指導現場においては、指導者はそうした外的な領域に止まらず、動きを学習者の動感や意識にまで入り込んで、その上で学習者の動きの問題を把握しなければならない。その際、指導者には、学習者の動きを注視しながら運動経過に現れている問題を運動者の側に立って〈見抜く〉能力、すなわち本来の意味での動き（動感形態）の観察（動感観察）が求められる。

こうしたことから金子は、この動きの観察が運動共感（Mitvollziehen）に支えられて実践されなければならないと強調する。それは、単に学習者の動きを観察対象として冷ややかに傍観者的な態度で眺めるのではなく、自分も学習者と同じ運動感覚的实施意識をもってその学習者の動きのなかに入り込んで観察しようとすることにほかならない。ここで言う運動共感について、金子はこう述べている。「運動像を対象（Gegenstand）として、向こう側に見て共感するのではない。運動想像力によって、自らその運動を実施するところに、初めて全的な意味での運動共感が成立する。」（57：123 頁）

この運動共感の概念をもとに金子はこう結論している。運動指導者は「観察対象になっている運動経過を改めて観察者自身の自己運動として、潜勢的（virtuell）にやってみて、それを観察するのでなければなら」ず、この観察は「観察する運動をイマージュの中で遂行しながら、それを自己観察する」ことにほかならない（57：123 頁）。そして、この意味の自己観察を遂行しようとする際には、「自分が現実にもその運動をやっているときと同じ視野が展開されるし、運動それ自体が、どこでどんな力を入れ、どのような空時分節で行われるかも、主体的意図をもった自己運動として、鋭く観察されるのでなければならない」（57：123 頁）と述べている。こうして金子は、パラージの潜勢運動（virtuelle Bewegung）の概念を拠り所として、運動指導者に求められる「潜勢自己運動」（virtuelle Selbstbewegung）という彼独自の概念を提唱している（57：123 頁）。

金子はその後、『わざの伝承』の中で、指導者の促発能力の一つに位置づけられる、学習者の運動感覚の図式化プロセスに潜入し、その構成化を促発できる指導能力に注目して、この潜勢自己運動を「代行能力」と言い換えている（67：527 頁）。

運動の指導者に要求される指導能力として位置づけられるこの潜勢自己運動や代行能力は、発生運動学における技術分析をする際の中核的方法をなしている。指導者が潜勢自己運動や代行を行うということは、まさにその場において、学習者の動きを〈もの〉の運動としてではなく、シュトラッサーの言う「主観 - 主観図式」の上に成り立つ運動観察の本質的態度をとって

分析することだからである(57 : 115 頁以下)。その意味で、潜勢自己運動したり代行したりすることは、観察対象（分析対象）である他者の動きや運動実施の内実に迫り、その本質を明らかに出す技術の分析方法なのである。

このような分析方法は、ハインロートがゲーテについて指摘した対象的思惟という方法(176 : 15 頁以下)、すなわち思惟が対象と一体化している方法と軌を一にする。こう言えるのは、金子が潜勢自己運動の概念をパラージの潜勢運動の概念を抛り所として提唱した際に、パラージの潜勢運動の概念もゲーテの形態学思想からもたらされたものであることを踏まえつつ(67 : 179 頁)、〈動きのかたち〉を観察する運動観察論を展開しているからである。潜勢自己運動とは、結局のところ、観察・分析の対象となる他者の動きを他者の動きに即して捉えようとする試みにほかならない。

ゲーテがその自然研究の中心に据えた、この対象と一体化し対象に即して見るという対象的思惟という方法論に金子は注目し、発生運動学におけるその重要性を主張している⁸。金子によれば、ゲーテが対象に即して本質に迫るときの「見る」には *anschauen* の語を用いているが、an に「対象に即して」の意味がこめられていることから、*anschauen* には「即対象的思惟」の意味が含意されているという。ゲーテの「対象的思惟」は対象を向こう側においての傍観者の思惟ではなく、「即対象的思惟」の意味であると、金子は指摘している(67 : 178 頁)。このような対象的思惟としての観察は単なる観察に止まらず、理論にまで高められる。ゲーテによれば、「あらゆる熟視は考察へ、あらゆる考察は思念へ、あらゆる思念は結合へと移行し、それゆえ、われわれは対象世界を注意深く眺めるだけですでに理論化している」(17 : 307 頁)からである。

この「対象に身をおいて、対象に即し観察し、思惟する」というゲーテの対象的思惟は、後にベルグソンが科学的分析方法に対置させて強調することになる“直観”という方法の先駆的意味をもつ方法論である。その意味では、ゲーテの対象的思惟という方法論も直観的方法論であるということが言える。この対象的思惟という方法論は現象学的モロフォロギー的立場に立つ発生運動学では、スポーツの〈動き〉や〈動きかた〉や〈動きのかたち〉の発生や構造の問題を把握・分析する中核的方法論になっている。発生運動学における方法論がこのような直観を重視する方法論であるということは、それが概念分析や因果分析と異なることを意味している。

⁸ 「スポーツモルフォロジー研究」創刊号（文献 60）で金子はゲーテの思想を仔細に検討し、今日の発生運動学がゲーテの思想を背景にした理論であることを強調している。

ゲーテの対象的思惟を基本とするこうした直観的方法論は、スポーツの動きの本質を現実の動きの中で動的に捉えようとするところに特徴がある。ポイテンディクも述べているように、優雅な動きとは本人がそうしようとして努力するときにだけなしうるものであり、その優雅さを筋電図的因果分析で捉えることはできない(12:S.359)。優雅ということの本質に迫るには、対象と一体化し、対象に即して観察し直観するしかないのである。

本論は、このような基本的認識のもとで、学習者や選手自身が直観によってはじめて向き合うことになるコツを明るみに出すときの拠点を、学習者や選手が発する創発言語に求めている。

(2) 動感交信 - 借問法⁹

運動を練習するとき、学習者は動きの感じ(動感)を頼りにしている。ただ、そこでの動感内容自体は必ずしも明確に自覚されているとは言えない。われわれはそれを的確に言えないこともあるし、まったく言えないことも、あるいは、はじめはその存在に気づかないこともある。しかし運動が“できる”ようにと練習しているのであれば、そこに“できる”に関わる動感が発生し、課題解決の仕方を探る内的活動が活発化してくることになる。

こうした動感はいわゆる手振り身振りを交えてことばを使って語られる。その内容はそうすることの動感的根拠、課題解決の考え方で暗に語られている。しかし、一般には、学習者はこれらの内容も、そのときの動感も、課題解決の考え方もそれほど明確にことばにして言うことではないし、あるいは、それらはあまり意識の前面に出ていないのかもしれない。

このような学習者の動感に迫りその内容を理解していく方法として、金子は借問法(70:199頁)という問いかけの方法を用いることの重要性を強調している。この方法は、金子によれば、指導者の促発指導において不可欠な方法であり、指導者が学習者に対して問いかける方法である。しかしこの方法は、単に質問したりインタビューして学習者の考えていることを聞くのではなく、指導者が学習者に次々とたたみかけるように問いかけていき、そこで語られることばから学習者の微妙な動感地平の内実までも聞き出すとともに、学習者の動感意識を紡ぎ出していくことを目指す方法なのである。

例えば、「今のはどんな感じだった?」「ちょっと足を踏み出すタイミングが早かったんじゃないか?」「今の踏み切りはどこが良かった思うか?」「それはどうして?」「いつもの感じと同じ?」などと、学習者のその都度その都度の回答に対して、多角的・多層的に、さまざまな観点から運動の状態に対して質問を重ねていくのである。また例えば、「前傾姿勢はスピード

⁹ この項は、拙論「技術分析の意味類型に関する現象学的考察」(文献156)の(6)をまとめ直したものである。

をつけるのに有効だと思う」、「腕の操作はこうにしたらいと思う」、「大切なのはこの局面でかかえ込み姿勢に入ることだと思う」等々という言い方で学習者が自己のコツを語った場合、これらの発言内容に関して問いかけていき、学習者自身の課題解決の考え方や考えている（感じている）ことをとらえ、ここから、学習者が考えている「スピードをつけること」、「腕の操作」、「かかえこみ姿勢」の意味や学習者の動感意識内容などを明らかにしていこうとするのである。

しかし、この借問法によって学習者の発言内容に問いかけていくというのは、単に学習者にいろいろと聞いて、何を感じたのか、何をどう考えたのかなど、小さなことまでただ答えさせるというようなものではない。借問法では、質問する指導者には指導者自らの問いかける視点とその内容が明確になっていること、すなわち、指導者自身が動感論的テキスト（70：153 頁）¹⁰の志向構造を厳密に分析していることが条件となるのであり、指導者はその上で学習者の動感深層に迫っていくことが必要である。金子はこの借問というたたみかけていく問いかけの方法は動感交信をする指導者にとって不可欠な質問法であり、指導者はこの借問ができる動感借問能力を身につけていなければならないことを強調している（70：199 頁）。

このように、借問法は基本的に指導者が促発指導をする際に用いる方法であり、指導者が指導の際に、学習者と動感交信する方法として、金子によってその重要性が指摘されている方法である。しかし、この借問法は動感交信の方法として促発指導において必要だというだけではなく、コツやカンといった動感や身体知を研究対象とする発生運動学の研究法としても用いられる。

5. 本研究の独自性

金子は発生運動学の理論領域に、マイネルによって導入された、動感形態と言語表現に関する動感言語論（71：136 頁以下）という問題圏のあることを指摘している。そこでは、動感言語というものを次のようにとらえている。すなわち、「動感言語は動感形態そのものなのであり、その動感言語のなかには・・・動感形態そのものが住み込んでいる」（71：144 頁）。金子によれば、動感形態は主語形態（主語的な動感形態）と述語形態（述語的な動感形態）に区別され（70：110 頁）、それらは言語化される可能性がある（71：136 頁以下）。この場合、動感

¹⁰ 動感論的テキストとは、金子によれば、「運動現象のなかに新たに構成される観察対象」（70：153 頁）である。すなわち、通常、文学作品の本文や教科書と理解されるテキストということばを、ここではその語源（編み上げる、企てる、組み立てる）の意味で用いて、指導者がその指導者の視点（例えば、助走の仕方）から構成していく動きの内容が動感論的テキストと言われるものである。

言語は大きく主語形態の動感言語と述語形態の動感言語に分けられる。主語形態の動感言語は動感形態の表記や術語論に関係するものであり、とくに運動に名前をつけて区別する際に用いられる言語と言えよう（例えば、鉄棒のある技を“逆上がり”と呼ぶこと）。この主語形態の動感言語は、「修練形態の言語表現に並々ならぬ関心を示し」たヤーンの修練体系にその源流をみることができる（71：155 頁）。また述語形態の動感言語は、この名前のつけられ習練対象としてとりあげられた運動や技（主語形態）を行う際のコツや要領を表わそうとするときの言語表現や運動記述である（例えば、「もっと強く踏み切るといい」）。

金子は、過去においてすでに体操競技における「技の表記」論を展開していたが（48：29 頁以下）、これは今日の動感言語論における用語を用いれば、上記した主語形態の動感言語の問題圏に属するものである。

体操競技における技名はその名称で呼ばれる技の運動内容（課題性）を表すとともに（48：44 頁）、他の技と区別する機能を有する。また技の命名にあたっては、できるだけ簡潔な表記の中で「技の運動内容を形態的に正確に、また本質的な機能的特性を」（48：42 頁）とらえておくが必要になる。ここで使用されている「形態」ということばが、今日の用語の「動感形態」を意味していることは言うまでもない。すなわち、技は動感形態に対して命名される必要のあることが強調されている。この技の命名、すなわち、技の動感形態の命名に際しては命名上の規則がある。それは、器械種目の枠を越えた共通レベルで技の形態を規定し、技の基本形態を名づけるためのベースを示す名称である『基本語』と、運動の細部を規定する『規定詞』の使い方に関するものである（48：45 頁以下）。『基本語』には姿勢基本語と運動基本語がある。姿勢基本語には<立><座・臥><懸垂><支持>といった用語が、運動基本語には<上がり><回転><ひねり><振出し><下り><とび越し><とび><入れ・抜き><交差><旋回><転向><移動>といった用語がある。また『規定詞』には前面、背面、側面などの<面>の規定詞、縦向き、横向き、中向き、外向きなどの<向き>の規定詞、順手、逆手、大逆手などの<握り>、中や外などの<位置>の規定詞、前方、後方、側方などの<回転方向>の規定詞、かかえこみ、屈身、伸身、脚前拳などの<姿勢>の規定詞、とび（空間的規定）、速（時間的規定）、力（力動的規定）などの<運動>の規定詞がある。

これらの基本語や規定詞の組み合わせによって技の命名がなされるが、そこには規則として、技表記のための言語要素（術語）の配列順がある。たとえば、マット運動の「前方倒立回転とび」と命名される技は、「前方<回転の規定詞>+倒立回転<運動基本語>+とび<運動の規定詞>」の順番で表記され、この順番を入れ替えて言うことはできない。すなわち、「倒立回

転とび前方」や「とび倒立回転前方」とはならないし、そのように表記される技は存在しない。また、「とび前方倒立回転」といった場合には、「前方倒立回転とび」とは異なる技の名称となってしまう。この場合、技名の意味する運動内容は、術語として使用されている一つ一つの言語要素自体の分析から解明される。すなわち、それは意味論¹¹的に解明される対象だ、ということになる。したがって、術語としてのこうした技の表記には、言語学上のいわゆる文法規則が介在しているのである。

この文法規則のもとに技に名前を付与し、誤解のないように技の共通理解を得ようとするところに技の表記論（主語形態の動感言語）の存在意義がある。またこの場合、技名表記に使われる言語要素（基本語や規定詞など）は、動感言語論の立場から言えば、技の動感形態と密接な関係をもっている点が強調されなければならない。

こうした技の表記（術語）の問題を取り上げる一方で、金子は、技術の運動表記の問題圏（述語形態の動感言語）の存在にも言及し、技術表記のむずかしさとその問題性を指摘している（48：59 頁以下）。技術に関する言語表記や発言には、絶えずその内容の正しさとその信頼性が問われるからである。

しかしこの技術の運動表記に関しては、動感言語論の立場から以下のことが強調されなければならない。それは、指導者や学習者が発する技術に関わることばや特殊な言語表現、すなわち述語形態の動感言語（金子によれば、この動感述語は動感意識の対象述語¹²ということになる）には理論的態度による対象化作用¹³があるという点である（70：105 頁以下）。とくに、学習者自らの自分の動きについての発言は単なる感情的で心情的な述語というだけではなく、「判断や価値意識を巻き込んだ動感的な述語」（70：106 頁）だという点に目を向けなければならない。このことは、学習者の発言は、体験の中ですでに動きの善し悪しが価値論的に判断され、実践との関わりの中で理論的にとらえられていることを意味している。

金子はこの対象化作用が機能しているが故に、学習者の語る発言（対象述語）や対象化作用

¹¹ ここでは言語学における意味論の意である。なお、意味論については第Ⅲ部第2章の1を参照のこと。

¹² ここで言われている対象述語とは動感述語の意であり、多くの身体知に支えられ語られることばである。例えば、今の自分の動きは「いい感じだった」「タイミングが遅かった」などである（33：16 頁以下；70：106 頁参照）。しかしもちろん、指導者が学習者の動きを見て感じそれを表すことば、例えば、「（この選手の踏切は）遅いな」も対象述語であり、そこには判断作用や評価作用が示されている（70：106 頁）。

¹³ 対象化作用とは客観化作用とも呼ばれ（71：19 頁）、金子によれば、多数に共通する一者（類的核）をとらえる志向体験の働き（70：105 頁以下）、あるいは「動感形態を本原的な時間化能力でとらえ、価値覚によって動きかたを評価し、周界状況に応じて判断しながら、多数に共通する一者、つまり、類的核に向かって努力するという志向体験」（72：154 頁以下）である。これは数学的形式化による客観化とは区別される。対象化作用（客観化作用）に関しては、第Ⅰ部第2章4の(2)でも取り上げられる。

そのものを、単に主観的なことだとして研究から切り捨てることはできないことを強調している（70：106 頁）。なぜなら実際に運動する個々人がコツとして語る動感述語（述語形態の動感言語）は、述語形相¹⁴として一般化される過程の出発点を形づくっているからである（70：114 頁以下）。言い換えれば、学習者自身が語るコツの発言内容（創感言語）は、実際に“できる”という体験をする中で、いわゆる“直観”から発せられたことばであり、それは対象化による理論的内容として、もともと技術的性格（＝学習者の動感言語によって出てきた有効な“動きかた”の内容）を有するものなのである¹⁵。

ここで本研究が重視するのは、このような学習者自身が語るコツの言語表現は学習者が単に感じたことの表現なのではなく、その言語の表現や表現形式には技術的次元の直観内容が現れているという点である。ただし、学習者が語るコツの言語表現（述語形態の動感言語）は、技の表記（主語形態の動感言語）を成立させているような厳格な文法規則をもたない。

コツの言語表現では、発話者が抱いている意味がいろいろな表現形式で語られる。あるいは、学習者がコツについて言語表現する場合、語ろうとする内容の意味核に的中するための言語表現が任意に、しかし、ある法則に従って用いられているとするのが、本研究の基本的な考え方である。こうした考えに基づいて、学習者がコツを語る言語表現に直観的内容が表われる際の表現構造を浮き彫りにしようとするところに、本研究の独自性が見出される。

¹⁴ 述語動感形態の形相の意で、個別的な述語動感形態の一般化された内容（70：113 頁以下）、すなわち、誰にとっても妥当する一般性のある内容を指す。

¹⁵ ここで言う直観はベルグソンの意味であり、詳しくは第 I 部第 2 章 4 の(2)を参照のこと。また技術の概念については、第 I 部第 2 章全体を参照のこと。

第3章 本論の構成と主な資料

本研究は、緒論、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部、結論から構成されている。

緒論は3つの章から構成されている。この緒論では、問題の所在と本研究の目的、研究の立脚点と本研究独自の視点、そして論文の全体構成が示される。各章の内容は、以下の通りである。

第1章では、コツの研究の現状分析およびコツとことばの関係に言及することによって、コツの研究においては言語表現の問題が取り上げられるべきことが述べられて、本研究の目的が明らかにされる。

第2章では、本研究の立場である発生運動学の成立過程と発生運動学独自の方法論上の特徴が述べられるとともに、動感言語の分析という問題圏の位置づけを示すことによって本論の独自性が示される。

なお、第2章は、以下の既発表論文の内容を加筆修正しまとめ直したものである。

佐野 淳：ゲーテ形態学とスポーツにおける発生運動学的運動分析，モルフォロギア，29号，45－62，2007（文献158）．

佐野 淳：技術分析の意味類型に関する現象学的考察，スポーツ運動学研究，18号，1－11，2005（文献156）．

第3章では、本論の全体構成と主な資料が示される。

第Ⅰ部は3つの章から構成され、学習者が語るコツの内容およびコツの特性が明らかにされる。とくに、スポーツ運動の場面において“できる”にはコツの発生が不可欠であること、そしてそのコツは、従来から考えられているように、単なる個人的で主観的なものではなく、普遍的な内容をも有していることが明らかにされる。

各章の内容は以下の通りである。

第1章では、スポーツ現場における“できる”ということの問題圏を考察することによって、“できる”という現象にコツが関わっているということが明らかにされる。

なお、第1章は、以下の既発表論文の内容をまとめ直したものである。

佐野 淳：倒立のメタモルフォーゼ，スポーツモルフォロギー研究 3：75－88，1997（文献147）．

佐野 淳：キネゲネシスの知．スポーツモルフォロギー研究 3：51－64，1997（文献146）．

佐野 淳：スポーツ技術の運動感性学的考察，スポーツモルフォロギー研究 6：1－18，2000．

(文献 152) .

佐野 淳：コツと技術の関係に関する運動学的考察，スポーツ運動学研究，16 号，1－11，2003
(文献 154) .

佐野 淳：スポーツ技術とコトバの規則，伝承 5 号：71-96，2005 (文献 157) .

第 2 章では、第 1 章によって明らかにされた“できる”とコツの関係を前提として、そのコツと技術との関係が考察される。そのために、まず、スポーツにおけるこれまでの技術論の展開が素描され、スポーツ技術は科学技術とは区別される人間の行為の内容であるという認識が述べられ、そこから技術が人間の運動感覚的意味核としてのコツと関係するということが示される。さらに、このコツは直観的な内容を有し、主観的であるものの、モナドコツとして普遍的なものでもあることが強調され、学習者が語るのは単なる主観的なコツではなく、普遍的な内容を有していることが明らかにされる。

第 3 章は、第 I 部の内容のまとめである。

第 II 部は、3 つの章から構成され、われわれがコツを体験する構造と、その体験したコツが意識とどのような関係をもっているのかが考察される。

第 1 章では、『パターン構造』という考え方から、精神医学者の安永が提起した「A/B」と表記される体験構造の理論を拠り所として、コツの体験構造が考察される。

なお、第 1 章は、以下の既発表論文の内容を加筆修正し、まとめ直したものである。

佐野 淳：スポーツ技術の運動感性学的考察，スポーツモルフォロジー研究 6：1－18，2000
(文献 152) .

第 2 章では、安永の図式概念に従って、コツの把握には「コツの図式」が関与していること、コツは前言語的に認識されるが反省するときには言語化されること、さらに、コツを取り上げている意識位相の違いによって言い表されるコツの内容にも違いが出てくることが指摘される。

なお、第 2 章は、以下の既発表論文の内容をまとめ直したものである。

佐野 淳：モルフォロジー的見地からみた運動の仕方の直観的内容について，スポーツ運動学研究 8：13－25，1995 (文献 144) .

第 3 章は、第 II 部の内容のまとめである。

第 III 部は、3 つの章から構成され、体験したコツの言語化過程に目を向けて、学習者のコツ

の言語表現構造が明らかにされる。

第1章では、ヴィゴツキーの内言論（内言は外言の前提的言語である）を拠り所として、コツの発話構造（コツ発生→内言→外言）を示した上で、発話文が詞と辞の構成によってできていること、発話では名詞や動詞、形容詞、副詞などの品詞を用いて体験したコツを言い表そうとすること、そしてコツ発話の表現は断片的であり、説明しようとするとその内容が抽象化されること、コツ発話はパトス論理で語られることが示される。

第2章では、体験したコツが言語表現される場合の意味論的表現構造が明らかにされる。

なお、第2章は、以下の既発表論文の内容をまとめ直したものである。

佐野 淳：こつの言語表現に関するモルフォロギー的考察，スポーツ運動学研究，17 号，13－23，2004（文献 154）．

第3章は、第Ⅲ部の内容のまとめである。

結論では、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部のそれぞれで明らかになったことがまとめられて本論全体の総括が行われるとともに、今後の展望が述べられる。すなわち、本研究はコツについて学習者が語る創発言語の表現構造を解明しようとして取り組まれ、最終的に、学習者自身の語るコツの表現構造が意味論的構造として明らかにされるが、このようなコツの言語表現の構造の解明はさらに深められるべきであること、そして、こうした言語表現構造が明らかになることで、学習者自身が語るコツに関する創発言語を言語学的視座から分析して技術を解明していくという、スポーツ技術の新たな分析法の可能性が提示されるとともに、現場の技術（促発）指導に関わる指導者の促発言語の表現構造の解明の必要性にも言及し、この領域の今後の課題がまとめられる。

第Ⅰ部 スポーツにおける“できる”とコツ

第Ⅰ部では、学習者が語るコツの内容および性質が明らかにされる。とくに、スポーツ運動の場面における“できる”ということはコツの発生に支えられていること、そしてそのコツは、従来から考えられているように、単なる個人的で主観的なものではなく、普遍的な内容を有していることが強調される。

第1章. 創発概念としての“できる”

第1章では、スポーツ現場における“できる”ということを創発という視点から特徴づけるとともに、その“できる”はコツとの出会いを意味することが述べられる。

1. “できる”の場面¹⁶

(1)運動発達による“できる”

人間は自らの歩行を加齢とともに身につけていく。一般に1歳ごろには、歩行形態が可能になる(98 : S.269ff. : 292 頁以下)。つまり通常の見方からすれば、乳児に焦点を当てた歩行の発生は運動発達の問題圏に含まれるものと解される。しかし、歩行の発生は、きわめて高度な平衡感覚能力の獲得を意味するものであり、このことは時間とともに生理学的諸条件が満たされることで自然に可能になってくるものではない(67 : 223 頁)。歩けるようになるまでには、文化社会的環境のなかに育ち、しかも子どものそれ相応の衝動や欲求を前提として、それを周囲が刺激するとともに、子ども自らの努力と練習が不可欠である。事実、子どもは歩けるようになるまでには、寝返りやおすわり、ハイハイの運動形態を経過した後、立位姿勢を獲得し、その後転んだり立ち上がったりを繰り返して1、2歩の歩行に成功するのであり、そうして次第にその歩数を増やし、ようやく二足歩行、すなわち歩けるようになっていく。この場合、子どもはただ単に歩行を行っているのではなく、そこには歩きたいという欲求や衝動、周囲の励ましなどが働いている。子どもはこうして歩行動作を身につけていく。この身につけ方は手続き学習(procedural learning)と呼ばれている(132 : 23 頁)。手続き学習は身体感覚的なレベルの運動習得であり、運動の展開をイメージ化して頭に思い浮かべて覚えていくような身につけ方、すなわち宣言学習(declarative learning)によるものではない(132 : 23 頁)。つま

¹⁶ この節の(1)と(2)は、拙論「コツと技術の関係に関する運動学的考察」(文献154)の(4)をまとめ直したものである。

りそれはまだ、本人の明確な意思による自覚的、意図的なものではない。しかしそれは、本人の志向的努力を前提としたものなのである。

こうしてようやくある程度歩けるようになった乳児は、その後、その歩行を楽しむように何度も何度も繰り返し、やがて子どもなりに自在に歩けるようになる。ゼロ歳児の運動発達はこの歩行運動の獲得に向かう発達といっても過言ではないだろう。いずれにしても、この時期の運動発達において二足歩行が可能になるということは、当然、その歩行に必要な脚部の筋力や身体全体のバランス能力を身につけたことを意味する。とくにこの平衡感覚の能力は、不安定な二本の足で立つ上で不可欠な能力であるとともに、足を交互に移動させていく際のきわめて高度な前提的能力である。

このように一般には運動発達としてとらえられる乳児の歩行の発達経過も、別の見方をすれば、これは“できる”のプロセスであると考えられる。なぜなら、乳児は歩くことに向かって、乳児なりのコツの獲得に向けた志向的取り組みを行い、その結果として歩行のコツを獲得し、不安定でもよちよち歩きとして歩くことが“できる”ようになるからである（67：223 頁：250 頁）。

この歩行の発達に示されるように、人間の基本運動系の発達は、他方で“できる”のプロセスを示している。

(2)練習による“できる”

スポーツにおいて、例えば、逆上がりや倒立などの器械運動の技であろうと、陸上競技のハードル走、また球技などのパスやドリブル、さらに柔道の投げ技や剣道などの技は、学習者にとって“できる”対象となる運動であり、運動学習はこれらが“できる”ようになることを目指した活動である。この“できる”は何の努力もなしに可能になるのではなく、そこには少なくとも、意図的に何回も数をかけるという練習が不可欠になる。そうした努力があるからこそ、運動が“できる”ようになったときには喜びを感じ、感動の世界を味わうことになる。

言うまでもなく、最初は誰でも“できない”状態にある。その“できない”運動を“できる”ようにと取り組む活動、また“できる”運動をさらにより良く“できる”ようにしようとするのが運動学習なのである。この場合、学習者は指導者から助言やアドバイスをしてもらったり、また練習の中でいろいろと工夫された方法を試みたり、幫助してもらったりして“できる”を目指すのである。そしてその結果として“できる”ようになっていくのである。例えば、走高跳びにおける背面跳びは、一度もやったことがなければ最初はどうやってバーを跳び越えたら

いいのかさえも分からないし、またそれなりに試みたとしてもうまくバーを跳び越すことはできない。しかし、実施上のポイントを教えてもらい、そのポイントを頭に入れて練習を積むことによって、やがて“できる”ようになる。

このようにスポーツの運動が“できる”ようになることを目指す活動は運動学習の中核をなしており、それは学習者本人に“できる”ようになりたいという衝動や目標が存在することによってはじめて成り立つ活動である。

a) “できる”の質

運動が“できる”ということは、学習者の習熟レベルによって当然その“できる”の階層も異なってくる。例えば、初心者がやっとのことで鉄棒の逆上がりが一回できたというときの“できる”、その逆上がりが5回に3回はできるというときの“できる”、さらに失敗せずに逆上がりはできるが姿勢の乱れが見られる“できる”、また、サッカーのドリブルシュートが非常にうまくできるというときの“できる”、柔道の背負い投げができるようになったというときの“できる”、そしてその背負い投げが得意だというときの“できる”等々。

このような“できる”の階層は、きわめて小さくくりで示せば、一般に言われる初級レベル、中級レベル、上級レベルに分けられる。もちろん、これらの階層はさらに細分化されることは言うまでもない。すなわち、達成性（目標を達成“できる”かどうか？）、正確性（運動が常に正確に実施“できる”かどうか？）、安定性（運動実施に「乱れ」がないかどうか？）を核として、効率性（無駄のない動きをしているかどうか？）、効果性（運動が求められる効果に寄与しているかどうか？）、姿勢の調和性（運動時の姿勢がよいかどうか？）などの運動の「質」（98：S.140：146頁以下）に基づいて、習熟段階の異なる“できる”が区別されるのである。このように、“できる”には多様な段階がある。

b) “できる”の障碍

運動が“できる”ようになるプロセスや“できる”ようになってからでも、そこにはさまざまな障碍が生じる。例えば、次のような障碍である。

- ・ できるような気がしない
- ・ 自分が何をしているのか、よくわからない
- ・ 怖くなってしまう
- ・ 途中で運動を止めてしまう

- ・それまでの「感覚」と違うという感じをもつ
- ・できたりできなかったりが現れ、実施が安定しない
- ・「正しい」姿勢をとることができない

運動発達という視点からみた場合には、こうした障害は性的成熟期の前半におけるホルモン分泌作用の影響によって発生する（98：S.311ff.：336頁以下）。しかしこれ以外にも、ある運動が“できる”ようになって、毎日その運動を練習し磨きをかけたり、“できる”を前提にして試合を行うなどの場合でも、突然“できなく”なったり、何かおかしくなったり、感覚が狂ったり、不安定さが増したり、またそれまでのようにうまく“できなく”なることがある。“できる”に向かうプロセスでは、このような症状が出て、何度やってもできない、わからない、うまくいかないことがある。このような場合には、身体的条件（体格、身長、体重など）や運動の能力的条件（運動感覚、バランス感覚など）が影響していることがある。また恐怖感などの情動的問題が“できる”“できない”に影響を及ぼしていることも多い。

このように、“できる”という状態は一定不変なのではない。練習をすること、トレーニングをすることとは、単に運動を繰り返して運動が定着することを目指すだけではなく、絶えず自分の運動の感覚あるいは課題達成との関係で生じる“動感”の状態を維持・管理、あるいは確認することを意味している。

2. 能力表現としての“できる”¹⁷

(1) “できる”の語源

これまで、運動発達と運動学習の観点から“できる”ということを論じてきたが、そもそもこの“できる”という語で表される意味を、われわれはどのように理解すべきであろうか。森田はこの“できる”という日本語の語義変遷（語源と意味変化）を辿ることによってその意味するところを次のように明らかにしている（104：309頁以下；105：19頁以下；281頁以下）。

森田によれば、“できる”という日本語の今日的意味はきわめて多彩であり、例えば、「にきびができた」「しわができる」「支度ができた」「こどもができた」「会話ができる」「できる学生」「できた人物」「ふたりはできている」等々の表現に見られるように、その意味をひとつにまとめることは難しいという。

“できる”は語義的に言えば「いでく（出で来）」であり、本来、われわれの側に現れ出てくることであり、無から有が生ずることが本来の意味であるという。つまり、新しい事物が出

¹⁷ この項は、拙論「スポーツ技術とコトバの規則」（文献157）の（2）をまとめ直したものである。

てくる、生ずる、事物の出来（しゅったい）が“できる”の基本義である。「おでき」「できもの」といった言い方はここを起点とした表現であり、身体内部から出てきて体の表面に生じたものの意である。またこの“できる”は、モノであれば、「子どもができる」（生まれる）「野菜ができる」（ものが生産される）「体育館ができる」（建物が建つ）「友達ができる」（友達をつくる）となり、コトであれば、「テストができた」「関係ができる」「連絡ができる」「食事の支度ができました」（完成・完了）となる。ここには、コトの成立や現象の完了といった意識がその背景にある。さらに行為の主体を表現の中心に立てることによって、「それは僕にもできる」「英会話ができる」「け上がりができる」「彼は逆立ちができる」「私はなんでもできる」というように、“主体”があることを行う能力や資格があることを表す、つまり能力表現となる。この場合の“できる”も、まさに当人の能力が「いでく（出で来）」なのである。そしてさらに発展すれば、「できる学生」「よくできている答案」など、“優れている”や“上手だ”といった評価表現として用いられる。

(2) “できる”現象の評価と判断

このような多彩な意味をもつ“できる”であるが、本論で運動技術に関わって取り上げられる“できる”は、「英会話ができる」「け上がりができる」などの表現にみられるような能力表現であることをまずもって確認しておかなければならない。われわれがある運動が“できる”と言う場合、ごく一般的に言えば、それは設定された運動の課題あるいは目標が「達成」されることを意味している。例えば、平泳ぎで25メートルを泳ぐという課題ないし目標を設定し、足を底に着かずに泳ぎ切れれば、この課題は“できた”ことになる。また逆上がりという課題に対して、踏み切って腰を鉄棒に近づけるようにして後方の上昇回転をして何とか鉄棒上に支持できれば、われわれは逆上がりが“できた”という。さらにその逆上がりでも、学習段階の違いによって、その技全体ではなく、まず足が上方に振り上げることが“できている”かどうかが問題になる場面もある。いずれにしても、これらの場合にはあらかじめ設定した課題ないし目標の達成が問題になっているのである。

また、サッカーの試合では、相手をかわしてドリブルシュートをする場面で、それがうまく行けば、ドリブルシュートが“できた”という。さらに、例えば、野球でバッターが2ストライク3ボールと追い込まれたときに、自分の嫌うボールをすべてファウルに「する」場合にも、その選手はボールをファウルに“できる”という。これらの場合には、すでにもっている“できる”の「能力」（ドリブルシュートが“できる”、ボールをファウルにすることが“できる”）

を前提にして、流動的な試合場面あるいは困難な場面において生じた課題（ドリブルシュートをする、ボールをファウルにすること）を即興的にしかも的確に達成するときの“できる”が問題になっている。もちろんこの場合、このような“できる”の能力がないのに、偶然“できてしまった！”ということもある。ここでは、そのときの学習者や選手がおかれた状況との関係で、課題を達成“できる”かどうかが問題になっているのである。

さらに、何とか苦労してけ上りが一回“できた”のに、次には“できない”こともある。一度“できて”も、それ以降いつも“できる”かどうかは、決して保証されているわけではない。ここでは、いつでも“できる”かどうか、という課題の達成の、すなわち“できる”ということの安定性が問題になっている。

一方、テニスでボールを打ち返すこと（課題）が取りあえず“できた”のに、「それは“できた”うちに入らない」と言われることもある。もちろん、自ら「これではだめだ！できない！」と評価することもある。また、“できたり”“できなかったり”する場合、それは“できない”と他者から評価されることもある。このような場合には、“できる”の上手さ、能力レベルの高低、達成度、“できる”の質が他者あるいは自分によって評価（意味づけ、価値づけ）されている。

これらの例に見られるように、“できる”ということは、設定した課題あるいはその都度生じてくる課題を解決するときの学習者や選手の「運動状態」あるいはとくに外形的な運動経過に関わる客観的な「達成状態」を指していると同時に、他者ないし自己自身によってその達成状態が“評価”されるという、二面性をもっている。さらに詳しく見ていくと、学習者や選手の「運動状態」あるいはとくに外形的な運動経過に関わる「達成状態」といっても、体操競技のような「技」のフォーム上の「出来栄え」としての“できる”と、運動実施の「結果」としての“できる”、つまり「何メートル跳べた」という「記録」に区別することができる。この場合、課題が5メートルを跳び越すことであれば、5メートルを跳び越した時点で他者や自分の評価とは無関係に、それは“できた”ということになる。

また、達成評価という場合には、他者による評価でも、他者がその運動ないし結果を見て、念を押す意味で下す評価（「よし、“できている！”」＝この場合、実際に課題が達成されている）や、当初設定した課題が客観的に見て達成できていなくても（フォームでも結果においても）、決して悪い実施でなければ、また次につながっていくような可能性を秘めた実施であれば、「まあ、いいだろう」という意味で取りあえず“できた”と積極的に評価することもある。つまり、この場合には、指導者が学習者や選手の「運動状態」を「可能性」という視点でどの

ように評価するかが鍵になる。この「可能性」には、指導者が学習者や選手の“運動”を単に外的な運動経過上の問題として取り上げる場合（「このような客観的な状態になっているから“できている”」）と、運動質の観点（しなやかな動きだ！、リズムがよくない！、スピード、雄大さ・・・など）から問題にする場合がある。また、運動経過ないしフォーム上の問題ではないが、そのときに生じる「音」（「ドタン！バタン！など大きな音が出ては“だめだ！”できている内にははいらない」、など）なども「可能性」という視点で問題になろう。さらに内面の情動的体験（学習者や選手の体験としての運動感）まで見通す場合（その実施は満足のいくものではなかったが、本人は「できそうな感じ」をもっているようだ！、出来は悪かったが、いいところを攻めているようだ！など、運動の感覚や運動の意識に焦点を当てた評価）も「可能性」という視点で取り上げられる。

他方、“できる”の自己評価では、学習者や選手自らが自己の運動実施に対して、「いまのは“できた”」「さっきのは“できていない”」などと評価することがある。この場合、自分では“できていない”と思っけていても、コーチから“それでいい”“できている”と評価されることもあるし、逆に、自分では“できている”と思っけているのに、指導者から「それはだめ！」「それは“できている”うちにははいらない！」と言われることもある。このことは、“できる”ということが学習者や選手の課題達成の客観的な状態だけの問題ではなく、それを学習者や選手自身がどう受け止めているか、また他者がそれをどのように評価しているのかという、出来栄への評価の対象でもあることを意味している。

しかし、この“できる”いう状態は、最終的には学習者や選手自身がとらえられていることが重要である。“できる”とは、学習者や選手自身がまさにその“できる”を体験（成功体験）して、その内実を“了解”していなければならない“運動状態”だからである。例えば、鉄棒のけ上がりの実施の良否が他者によって取り上げられることがあったとしても、“できる”ことの本質は他者ではなく、「できる感覚」「できる意識」（指導場面ではもちろん指導者もこの学習者や選手の感覚や意識を取り上げなければならない）を通してけ上がりの成立に直接的関係をもっている学習者自身にあるからである。

3. “できる”という現象の本質的特性¹⁸

ここでは、この“できる”という現象の本質的特性について考察する。

¹⁸ この項の内、(1)と(2)は拙論「倒立のメタモルフォーゼ」（文献147）の（3）と（6）を、（3）は「コツと技術の関係に関する運動学的考察」（文献154）の（3）を、また(4)は「キネゲネシスの知」（文献146）の（6）を「“できる”という現象の本質的特性」としてまとめ直したものである。

(1)努力性

例として、倒立を取り上げて考えてみよう。逆さになって2本の腕で立つ、という倒立では、直立姿勢と同様、バランスをとるという機能が中核をなしている。つまり、狭い支持面上で物理的に不安定な姿勢でバランスをとるということである。もちろん、倒立と直立姿勢の違いは、足上に立つか手で立つかの違いである。しかし、解剖学的に見れば、脚は、骨格、関節、筋組織等が直立に適したものであるのに対し、腕はそうではない。人間が直立姿勢ないし直立歩行するようになって、腕は立つことから解放されているのであり、基本的に身体を支える構造をもっていない。しかし、逆さになった身体を手で一定時間支えること（倒立）は、練習やトレーニングによって“できる”ようになる。

普通、体操競技や器械運動に関する指導書ないし技術書には、倒立についてその構造と実施上の注意点、段階練習などが応用や発展の観点から記述されている。当然のことであるが、これらは倒立ができるための「条件」の記述ではない。指導書や技術書がこうした記述であるのは、倒立をすることが、自然現象の法則ではなく、人間の努力行為によるものだからである。人間は、努力行為なしに倒立はできるようにはならない。

もちろん、倒立ができるための「条件」を記述したり説明しているものもある。例えば、福田は倒立について、次のように述べている。「頭部には正常頭位に還ろうとする立ち直り反射が認められる。この際、頭部は体幹に対しては背屈するから上述の如く頸反射により四肢は伸展する。」(27: 25 頁) また「逆立ちの如き困難な姿勢に於ては頭部を背屈させ上下肢の伸展を増強する頸反射に則る姿勢をとることが絶対に必要で、逆に腹屈して立とうとしても、四肢殊に上肢は頸反射から屈曲緊張強まり、体幹を支え得ず、如何なる名人と言えども逆立ちはできない。」(27: 42 頁) これほど極端ではないにしても、今日でも、このようにして反射理論からスポーツの運動やそのフォームを説明することは非常に多いと言えよう (166: 1 頁以下)。また、体操競技や器械運動の専門的文献においても、反射理論から技の実施の知見を得ようとする試みもあるし (108: 6 頁以下)、技の技術に対して姿勢反射の意義を論じるようなものもある (191: S.15ff.)。

これに対して金子は、倒立について、短絡的な反射理論からのこうした説明（倒立ができるための条件的記述）を、実践との不整合性を根拠として、次のように批判している。すなわち、反射理論から主張されている倒立像は、「適正な姿勢反射の利用によって、自然に反った」(52: 233 頁以下) 姿勢であり、それが「正三角形の原理」という指導法を生み出すことになったと

いう。しかし、こうした倒立姿勢は、支持面上にくる重心線から体部分がはずれてしまい、バイオメカニクスの的には合理的な倒立とは言えないという。倒立の姿勢をバイオメカニクスの立場から考察したヘイによれば、「反った倒立」(arched handstand)は「まっすぐな倒立」(straight handstand)に比べて、確かに非合理的であるという(35 : S.289ff.)。

ここで注意しなければならないことは、反射理論では、倒立ができるための「条件」として反射を利用することが有効であると言うのであり、またバイオメカニクスではその「条件」として、物理的平衡を保持するために身体をまっすぐにすべきだということである。ここには、倒立ができるための「条件」(自然科学的)が示されているだけであり、競技として追求する運動財としての倒立の理想像はおろか、その倒立の平衡維持を誰がするのか、すなわち主体の活動には何ら目が向けられていない。

このような自然科学的な原理や法則が示されても、それは人間の努力行為とは別次元にある。金子の「理想的なポーズがわかってても、そのように体を保持するには大変な努力がいります」(50 : 88 頁)という記述や、まっすぐな倒立をするための肩関節の柔軟性について、「柔軟性はそんな短時間で身に付きませんから、倒立の修正もとても長い間に及びます」(50 : 88 頁以下)という記述にも、「倒立ができる」ということを努力行為ないし努力過程としてとらえていることが示されている。ここには、倒立の努力過程が射程に入れられなければ、「倒立ができる」ということは問題の俎上には上がってこないということが意味されている。

実際、「逆さになって手で立つ」ということは非日常的な運動であり、立つことや歩行や走などのように、誰でも即座にできることではない。また通常、倒立は平衡感覚が要求される技であり、なかでも片手倒立ではこの平衡感覚がすぐれていることが強調される(2 : 25 頁)。さらに倒立は平均立ちの技に分類されていることに示されているように(52 : 227 頁以下)、身体の平衡維持の代表的な技として位置づけられている。この倒立で要求される平衡感覚ないし平衡維持機能は、人間の行為あるいは努力過程なしには身につかない。つまり、逆位での姿勢の平衡、2本の腕だけで身体を支える平衡、何分もその逆さ姿勢を維持する平衡などは、いわば人間の努力過程で身につけられる「動感的な」平衡であって、物体の平衡保持の原理に基づいて生じるような平衡ではない。だから、この「動感的な」平衡は、ものがバランスよく安定しているというような力学の意味の平衡ではなく、練習やトレーニングを通じて身につけられ、あるいは発生する「努力性の平衡」ということができる。

ここで言う「努力性の平衡」とは、人間の行為ないし努力によってもたらされている事態ととらえられる。つまり、倒立をする場合、一般的には重心が支持面上にあれば、それは物理学

的に言って安定状態なのであるが、しかし、その倒立を誰でもすぐにできるとは限らない。倒立の練習という努力過程を経ない限り倒立を行うことはできない。ましてや、物理的に安定しているからといっても、何時間もその姿勢を維持することなど人間にはできはしない。平衡が乱れて倒れそうになったとき、それを立て直し、「踏ん張り」、倒れないようにするには、われわれの努力行為が倒れないようにさせているのであり、力学的原理からそのような倒れないようにする行為が生まれているわけではない。金子は指導書において倒立の練習について次のように述べている。「倒立位になったら、呼吸を止めないで、できるだけ長い間立つように努力しましょう。倒立で立っている間に、自分でバランスをとるように心掛けることが大切です。」(52 : 90 頁) このような記述からも、倒立の平衡は物理学的、力学的現象としてではなく、人間の努力過程として理解されなければならないことがわかる。

このことから、“できる”とはまさに努力性をその本質的特性にもっていると言えよう。

(2)洗練化志向性

はじめて“できた”け上がりの初期形態は、その後何も変化しないのではない。通常、その後は練習を重ねることを通して、また指導されることによって、その初期形態はさらにより良い、より流れるような無駄のない運動経過を示すようになる。マイネル(1960)に従えば、そうした過程は粗協調位相→精協調位相→運動の安定化位相への習熟の展開、すなわち、“できる”の変容の姿である。このような“できる”の変容の姿は単なる変化というものではなく、ゲーテに従えば、メタモルフォーゼの概念で理解されるべき変化であると言えよう。ゲーテのメタモルフォーゼの概念は、すべての生物や自然、人間の行為や思考にも転用されるものであり、今日では芸術など(91 : 59 頁以下)の多方面の学問領野にも影響を与えている。

ゲーテのメタモルフォーゼ論は植物変態論あるいは植物メタモルフォーゼ(1790 年)としてまとまった形で提示されているが、ゲーテは動物にもこの概念を適用している。メタモルフォーゼとは一般に、変態あるいは形態の形成と変形であり、例えば、植物において基本器官ともいべき葉が花になり、果実になり、種子になるように、また脊椎動物において、椎骨が尾骨、頸椎、頭蓋などに変形していくように、その姿を変え移行していくさま、あるいはその作用ないし働きである。つまり、「植物の各部分をつぎつぎと生み出したり、ある一つの器官を変容させながら、さまざまな形態をつくり上げたりする変化」であり、また「多種多様に姿を変えてみせてくれる同一器官の...働き」(18 : 166 頁以下)を意味している。また、このメタモルフォーゼのなかに、ゲーテは原形象ないし原型を見出している。例えば、有機体が生長し変化

していても、その中で有機体の自己が失われることはない。この固有性が原形像ないし原型であり、変化するものの普遍的形像ないし典型である。つまりゲーテは、変化していても、そこには自己を保つ普遍性ないし恒常性があることを見てとったのである。このメタモルフォーゼについてゲーテは次のように述べている。「生きているものはすべてメタモルフォーゼします。植物においても、動物においても、そして最高の動物と言うべき人間においても。」(18 : 174 頁以下) リンネもこのメタモルフォーゼということばを用いているが、それは静的であって、生命現象をダイナミックにとらえようとして用いたゲーテのメタモルフォーゼ概念とは区別される。ゲーテのメタモルフォーゼ概念には、基本的に、自己を保ちつつ変容していくさま、またその働きが意味されている。

われわれの運動の“できる”の変容(“できない”→“できる”)は、このようなゲーテのいうメタモルフォーゼとしての変化である。そしてメタモルフォーゼとしての変容だからこそ、“できる”状態はさらにより良い“できる”状態を目指して動感能力(コツやカン)の統覚に方向づけられる。このことを、ここでは洗練化志向性と呼んでおく。初期形態として発生する原初的運動形態(できる)やそれまで欠点のあった運動形態(できる)が、より無駄がなく良いと評価される精協調位相ないしは安定化位相の運動形態(できる)に変容していく(メタモルフォーゼ)のは、本質的にそこに洗練化志向性があるからだと言える。

(3)不完全の完全／不安定の安定

澤潟が『医学概論』(121)の中で、人間の身体の構造と機能について示した不完全の完全、不安定の安定という特性は、運動における“できる”ということにも当てはまる。

澤潟によれば、われわれの身体の構造は発達のどの段階をとっても不完全の完全、不安定の安定の状態にあるという(121 : 70 頁以下)。この澤潟の認識は、われわれ人間の身体が機械のように組み立て式に構成されているのではなく、未分化な状態から次第に分化していく発生的なものであることに言及したものである。澤潟の発生的認識によれば、発達どの段階をとっても、身体はひとつのまとまりのある完全体であり、その限りで存在価値をもつ。だからわれわれは発達の各段階を類型的にとらえることができる。この場合、完全体としての身体の姿(構造)は固定化され変化しないのではなく、絶えず完全を目指すようにして変化していく。澤潟は発達の各段階において、身体はこの場合、完全のようで不完全な状態を示し、また逆に不完全のようで完全な状態だということから、発生の特徴として不完全の完全ということを挙げている。また、われわれの身体の機能も絶えず幅をもち、ゆとりをもって一定の状態を保っている。

る。それゆえ、そこには常に、不安定ながらも安定した状態を保っているという不安定の安定という特徴が示されるという(121 : 77 頁以下)。この澤潟の指摘する不完全の完全や不安定の安定という発生現象の特徴はもちろん身体の構造や機能について言われたものだが、この特徴は“できる”にも当てはまる。

また、金子はマイネルの指摘した運動の鋳型化との関係で、次のように述べている。「運動形態は、いつでも修正可能な遊び幅、ないし、しなやかさのなかに高昇志向をもつのでないと、その形態はそれ以上の改善の余地もなく、その生成発展の生命力を失ってしまう。」(67 : 210 頁)ここで言われている遊び幅や高昇志向といったことは、人間の運動のもつ過程性(時代制約性 ; 45 : 109 頁)から出てくるが、このような認識は澤潟の言う身体の構造や機能には最終的な完全や安定ということはないという考え方と軌を一にしたものだと考えられる。運動が“できる”ということも高昇志向、発展性、過程性の中にあるものであり、不完全ながらの完全、不安定ながらの安定という特性をもち、絶えず揺れ動きながらより良い“できる”に向かっていると見えよう。ここでは完成態としての“できる”という認識は通用しない。その時点その時点で、完全、安定した“できる”を取り上げたとしても、他方ではまだまだ完成していない、安定していないという面を持ち続けるのである。

“できる”という状態は、一般に良いと言われるような完成され安定した運動や上手な動きだと思えても、常に終わりのない完全や安定が目指される“できる”という状態なのである。

(4) パトス性

ヴァイツゼッカーは「パトスの」(Pathisch)を次のように説明している。すなわち「パトスの」という語は、「生物学的生存が存在物としては与えられていないで、「したい」、「しうる」「してもよい」、「すべきである」、「せねばならぬ」などとして決断に課せられているような生物学的生存の側面を指している。パトスの性格とはまた生き物の不確定性のことでもあり、これは根拠関係に基づいている。」(189 : 308 頁以下) また木村によれば、「パトスの」とは、生命をこうむっている生きものの様態であり、それは「したい」「できる」「せねばならぬ」「してもよい」「するのが当然だ」等々の形で経験されるもので、つねに人称的／人間的あるいは主体的／主観的な性格をもっている(190 : 93 頁以下)。パトスのあり方とは、まさにこのような人間の実存的なあり方のことであり、これはものの客観的な存在のあり方(存在的あり方)から区別される(190 : 91 頁以下)。パトス的なものは存在的ではなく、人称的なものなのである(190 : 92 頁)。

それでは、このパトスという視点は、“できる”においてどのような意味をもつのであろうか。経験主義者ヒュームによれば、われわれの行為の決定は理性ではなく感情（情念、情動）によって行なわれるという（28：513 頁以下）。これは、一切が普遍的法則の論理的必然性によって支配されていると考え、理性的思惟によってとらえられるとする、理性を重んじる合理主義の考え方に對置される考え方である。行為決定に関して感情の優位を指摘しているこのヒュームの考え方は、われわれにとって、ある意味では示唆に富むものである。なぜなら、「け上がりで鉄棒の上に上がるためには、どのようにしたら（身体を動かしたら）いいのか」「宙返りをするにはどこに気をつけたらいいのか」などは、まさに意味系（情況）と価値系（正しいか正しくないかの体験）（13：S.43ff.：78 頁以下）の中で生じ、快感・不快感、さらには“できる”といった確信的な感情との関わりを意味しているからである。腰の回転を鋭くすることも体重を右にかけるのも、つまり“できる”ためにどんな動きかたをしたらいいのかの選択と決定は、「この個人技法だと窮屈だ！」「そうした方がいい！」「そうせざるを得ない！」「今のところそうやるのが一番いい！」「こうすればできる！」というわれわれの諸々の感情（心の状態：パトス）がそうさせたのであり、理性によって計算されたものではない。これに従えば、選手の自分の動きに関する「自己指令」（Selbstbefehle）（21：S.60：67 頁以下）は、理性ではなく、感情（パトス）によって発せられる。

またクリスティアンは、われわれがある行為をする（動く）ときには、自分のその動きが正しいかそうでないかを体験して、そのやり方のなかから正しい動きを正確に実現していくのであり、そこには「それでいい」（同意）とか「それではだめだ」（拒否）といった価値契機があるとして、このような体験を「行為における価値意識」と呼んでいる（14）。つまり、この場合には「このように」という身体の操作は、概念的、理論的な内容によってではなく、「そうせざるを得ない」「そうした方がいい」という主体による行為の価値づけに基づいて行われる。

すなわち、人間の運動では、「良い」「悪い」といった価値的感情、快・不快の感情、「これだ！」「ちがう！」といった確信的感情が、“できる”を本質的に規定しているのである。それゆえ、ボールの操作のやり方も宙返りをどのように行なうのかも、われわれの心の状態（パトス）とは無関係ではありえない。動きを覚える場面における動きの発生（「できる」）を、根底で感情（心の状態：パトス）が支配していると言ってもよいであろう。従って、パトス、すなわち実存としての感情や気分といったものは、ただ単なる心の状態なのではなく、われわれの“できる”を根底から支えているものである。“できる”は本質的にパトス的なものである。

4. コツとの出会い

(1) “できない” から “できる” へ 一動きの分節化から構造化へ¹⁹

このような本質的特性を有する運動が“できる”という現象は、言うまでもないことであるが、その運動が“できる”ようにと練習²⁰を積み重ねなければならない。“できる”という現象は、そうした練習の積み重ねの結果なのである。このような“できない”から“できる”に至る練習過程において、動きに分節化と構造化が起きて、“できない”動きが“できる”動きに変わるのである。中田は学習において、意識は自らの学習と教師のことばがけなどによって分節化を起こした後、あるとき構造化されるとして、学習過程における意識の変化に言及しているが(図1参照；115：160 頁以下)、これは、運動の“できる”に向かう過程にも当てはまる。この中田の分析は動きの分節化、構造化ととらえ直すことができる。

すなわち、動きが“できる”ようになる練習過程において、学習者自身の取り組みと指導者からのアドバイスを受けて学習者の動きには徐々に分節化が進む。言い換えれば、運動が“できない”のはその動きに“できる”ということに対応した動きの分節化が生じていないからだと言える。“できない”という場合、そこで行われている動きは分節が曖昧なまま連続的に流

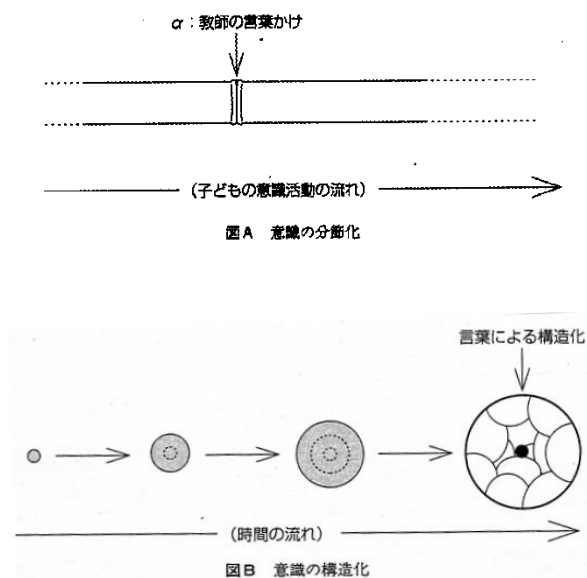


図1 意識の分節化と構造化

¹⁹ この項は、拙論「技術指導のスポーツ運動学的視座」(文献 151)の後半部分(「4」)を加筆修正したものである。

²⁰ 練習ということばの原義は、「ある行為を上達するようにくり返したり、またくり返してある技術を身につける行為」(116：256 頁)であり、そこには長く険しい道のりがある(22：S.272)。技術を身につけるには、この徹底した練習が要求されることは言うまでもない(194：109 頁以下)。

れ去っていく動きでしかない。動きの分節化というものは、一連のこうした動きの流れが“できる”という視点から、動感的にも外的なフォーム的にも動きの節目節目の意味や機能が明確になってくると解される。このとき重要になっているのが、マイネルに従えば、実践的思考による「運動感覚の知恵」を働かせることである（67：382 頁）。しかし、その分節化状態がフォーム上に可視的にはっきりと現れるかどうかは保証されてはいない。

学習者の“できない”動きが“できる”ようになる過程で、このような動きの分節化が起こるが、この分節化された動きは、その後、ある時点ある瞬間で構造化される。構造化とは、練習をしている動きが分節化を起こした後の練習過程のある瞬間において、それまでの動きが“できる”動きに一举に姿を変えることと解される（115：166 頁以下）。

このような構造化によって、学習者は“できる”世界へと踏み込むことになり、この構造化の瞬間に感動し、喜びの感情をもって“できる”世界を体験することになる。この動きの姿が変わる瞬間は、動きの各分節が“できる”ということに関わってまとまりをもって成立したことを意味する。また、この構造化が生じるということは、学習者自身が実際に運動が“できる”という体験をしたことを意味している。これをボイテンデイクは、運動メロディが奏でられる「知覚の構造化」の段階と呼んでいる（12：S.288）。もちろん、この構造化が訪れる時期を正確に予測することはできない。しかし、学習者自身は練習している中で分節化から構造化へ、そして構造化の時期を練習する中である程度予測することはできるであろう。

(2) コツとの「出会い」を意味する“できる”という現象

このように、“できる”という現象は動きが分節化された後の構造化の段階で発生するが、メルロ・ポンティによれば、この時に学習者は具体的運動をしているのであって、抽象的運動（物理的運動）をしようとしているのではないという（127：179 頁以下）。すなわち、例えばけ上りをしようとする場合には、あくまでけ上がり（具体的運動）を行おうとしているのであって、そこでは、足を 45 度上方に振り上げるとか、何 Kg の力で蹴るなどといった物理的運動を行おうとしているのではない。また、かりにそのような注意点を頭に入れて行ったとしても、あくまで「け上がり」という具体的な運動を行おうとして、そのけ上がりが“できる”のである。

学習者に現れるこのような具体的運動が構造化されて“できる”という現象は、学習者がその瞬間にコツと出会っていることを意味している。例えば、鉄棒の逆上がりが“できる”ときの、またサッカーにおいてボールの蹴り方が良くなったりしたときの“できる”という現象は、

コツとの出会いが生じている事態と解することができる。

このようなコツとの出会いが意味される“できる”という現象は、また他方では、技術力の現れでもある。金子によれば、技術力は「制御能力や適応能力などの協調能力を意味しているのではない」という。それは現時点でもっとも新しい対私的な運動感覚図式の意味核を完全に身体化したその個人のわざ」（67：441 頁）、あるいは「現時点でもっとも有効なく図式技術＞を私の動感身体で思うままに駆使できる能力」（69：224 頁）と解され、「技術を習得した能力というよりは、時間性と空間性を動感身体に取り込んで同化した身体知」（69：244 頁）を意味する。つまり技術力は“できる”という現象をもたらしている、動きかたに関わる身体知なのである。

このように身体知ととらえられた技術力は自我中心化された対私的なものという意味で「コツ身体知」（70：340 頁）と解される。コツ身体知は「身体に関する単なる知識ではなく、新しい出来事に対して適切に判断し解決できる身体の知恵を意味して」いる（69：2 頁）。すなわち、それは「そう動ける」知恵を意味しているのである。この場合の＜身体＞は物質的、物体的身体ではなく＜生命的身体＞であり、それは動きつつ感じ、感じつつ動ける身体（動感身体）を意味している。この生命的身体（動感身体）に技術が身体化されると、その動感身体による技術が実現されることになる。すなわち、動感身体による技術の実現はコツとの出会いを背景にして“できる”という現象をもたらすことになる。例えば、倒立姿勢で 10 秒間静止できる、テニスでボールを正確に相手コートに打ち返すことができる、というようにである。

このように、“できる”という現象では、運動の課題達成に関わって、動きの中にメロディーが流れて、そこにまとまりをもった運動形態が発生している。このことを、金子は「創発」という概念を使って次のように述べている。「＜創発＞（*emergere*）という表現は、語源的には、＜浮かび上がる＞＜姿を現す＞という意味をもち、ここでは、その個人の運動感覚に新しいメロディーが流れて、新しく一つの運動形態が創出されることが意味される」（67：462 頁）。しかも、金子によれば、この創発概念は、ヴァイツゼッカーがゲシュタルトクライスという概念に託した同時性の発生と軌を一にしてい、運動感覚図式の発生と消滅が含まれているという点で、ポラニーの暗黙知における創発概念と区別されるという（67：462 頁）。要するに、金子のいう創発という概念は、動きかたを自ら生み出したり、わざを身につけることを意味し（69：83 頁, 97 頁）、運動が“できる”ということを表している。

以下では、この創発という概念で取り上げられる“できる”という現象において出会うコツについて、さらに詳しく考察を進めていく。

(3) コツの特性

a) 妥当性²¹

選手や学習者は、“できる”を目指す中でコツと向き合うことになる。少なくとも、選手や学習者にとっては自らの運動体験の中で、あるコツが「妥当」（＝正しいあるいは良いやり方であると思われること）（118：123 頁）という性格をもつようになる。つまり、学習者によって動きの瞬間にとらえられるコツは課題解決を保証しているのである。

例えば、ある運動に対して、「腕や脚をこのように動かすこと」「スピードをつけて行なうこと」「もっと低い姿勢で行なうこと」「手首をしっかりと返すこと」などがコツとして、その都度彼らの意識の中で妥当しているものとして、選手や学習者にとっては「ほんとう」のこととして現われてくるのである。もちろん、その後その動きを詳細に調べてみた場合に、その結果と彼らがとらえたことが違っていることもある。「脚がしっかりと振り上げられていたから、その動きがうまくできた」と思っている、ビデオ撮影によって映像を再生してみると、「脚はしっかりと振り上がっていなかった！」ということも多分にある。客観的な結果からみれば確かにそうかもしれないが、しかし、そうした動作を発生させている当の本人にとってみれば、課題解決に対して脚は確かに「しっかりと振り上げて」いたのである。それを撮影した映像をもとにして、後から「脚は振り上がっていなかったのだから、その脚の振り上げとその感じは課題の解決には直接関与してはいない」と断言したところで、このことを正しいとする根拠は、当の本人にとって妥当している内容とはまったく関係のないところにある。つまり、その際の指摘は選手や学習者自身にとって妥当しているコツがその課題の解決に対して「間違っている」とか「違う」、また「それほど重要なことではない」という根拠にはならないのである。われわれにとっては、「しっかりと脚を振り上げる」と思ってそう行なうことがその課題解決にとって大切であり、そのことがその当の本人にとって「妥当」しているという点が重要なのである。

この場合、選手や学習者に妥当しているコツは、抽象的（物理的）に取り上げられるのではなく、彼らにとっては具体的にできるという意味でとらえられている。つまり、ある動きの達成を保証する、例えば、脚の振り上げ、手首の返し、腰の回転などはいずれも選手や学習者には自らの課題解決を保証しているという意味として取り上げられているのである。スポーツでは、できるということの意味へと方向づけられていること（志向性）（230：81 頁）の中で、コツは問題になっているのである。

²¹ この項は、拙論「キネゲネシスの知」の（文献146）の（5の前半）をまとめ直したものである。

「どうして自分はけ上がりがうまくできないのか」という事態を前にして、学習者自身は「脚が鉄棒に近寄ってこないからではないか」「肩の力が入りすぎている！」「振れ戻りの後もっと強くけってみよう」などと自問自答し、コツを探ろうとする。そこでのコツは学習者にとっては「必要」だと思われるという意味を担っているのである。

しかし、このように学習者本人に妥当している意味は、一定不変で終始変わらないものなのだろうか。確かに、あるコツによって当の本人が“できる”と感じたときにはそのコツは本人に妥当しているが、それはある条件によって、さらに強められたり（動かし難く感じられたり）、変更させられたりする。例えば、鉄棒の懸垂振動において、「あふり動作」のある仕方が宙返り下りの空中での「高さ」に影響を及ぼすという場合、その仕方がコツとして宙返り下りの空中での「高さ」を出すという意味を裏切らないときには、そのコツの妥当する感じはさらに強くなるが、その仕方でうまくいかなくなり、別のコツで行うことによって、さらに「高さ」が出ることを経験した場合には、「今までとは違う別のコツがいい」という意味が生じ、妥当が変更されるのである。

また、学習者本人がいいと思っている妥当したコツが、指導者から「それでいい！」と肯定されれば、その妥当は強められるが、「ちょっと違う！」としてあまり評価されない場合には、その学習者には、「ああ、これではだめなのか！」というように、その妥当が変更される可能性が生じてくる。つまりこの場合には、その妥当は他者との関係で強められたり変更させられたりするのである。われわれは、この妥当の概念をもって、学習者本人のとらえるコツの内実（身体知）に迫ることができる。このように、コツはまずもって学習者本人に妥当する形で現れる。

b) 可能性²²

コツがこのような妥当性と結びついているということは、コツが人間の存在の仕方と密接な関わりをもっていることを意味している。人間の存在についてハイデガーはそれを現存在もしくは実存ととらえ、人間の存在の仕方を物の存在の仕方とは異なるものとして位置づけ、人間の存在に関して現象学的考察を展開したことは周知のことである。ハイデガーによれば、現存在あるいは実存（人間）は可能的な存在であるという（25：121 頁）。例えば、「何かがしたい」「何かができそうだ」ということは、あることの可能性がその人間に付け加わったということ

²² この項は、拙論「キネゲネシスの知」の（文献（文献 146）の（5 の後半）をまとめ直したものである。

ではなく、可能的存在として存在している人間において、何がしかの可能性が自由意志とは関係なくせり出し表面化してきたことを意味している。こうした可能性が人間の世界を形作っているのであり、人間はこの世界に関わって生き存在しているのである（世界－内－存在：In-der-Welt-Sein）。

このような可能性の概念に関連して指摘しておきたいことは、コツは可能性としてわれわれの中に沸き上がってくるものだということである。例えば、「け上がりはこうするといい！」とか「宙返りをするときには、腕をしっかりと振り上げることが大切だ！」などは、一般に運動実施上のポイントと言われるが、それは実際にある運動（技）を行なうときにわれわれの意識のなかに沸き上がってくるものであり、主体が責任を負うべきコツであり、具体的な動感的やり方であり、課題を解決するための“意味”なのである。つまり、コツはこの人間の「可能性としての存在の仕方」から生じてくるのであり、任意に、恣意的に、自由意志的に生じてくるものではなく、ある状況に置かれたときにある程度方向づけられて生じてくるものなのである。コツは可能性によって方向づけられ発生してくると言えよう。

c) 配視性²³

コツは、基本的に、その運動が“できる”こととそのでき方が「わかる（了解する）」ということの2つの側面に関わっている。われわれは動きが実際に“できる”と、あるいはその動きを実際に行ない、そこで何らかの手応えを感じると、コツがわかる（了解される）という状態になる。この場合、コツは学習者には「～するためのもの」「～するのに役立つもの」として意味づけされている（25：157 頁以下）。コツがわかることは、その運動が“できる”ことを前提としているのである。

このような“できる”を前提としたわかり方を、ハイデガーは配視（Umsicht）と呼んでいる。この場合、「視」とは現存在の了解固有の認識の仕方や見て取る作用を言い、それが「道具」に対して向けられる場合に配視と呼ぶ（25：158 頁以下）。ボールをどんな感じでどのように蹴れば正確に味方にパスでき、どのような体勢を作ればとび箱を上手にとび越すことができるかは、実際に身をもって経験することが起点となっており、実際のところ、その要領や手順とその感じはその本人にしかわからない。言い換えれば、その本人はたとえその要領を正確に言語化できなくても、その動き方を見て取っているのであり、そのコツをわかっている（配視）のである。

²³ この項は、拙論「スポーツ技術の運動感性学的考察」（文献 152）の（3）をまとめ直したものである。

このコツがわかっている（配視）ということは、コツを客観的に向こう側に対象として置き、それがわかるということではない。われわれは、運動を体験する際にわれわれ自身のなかに発生する動きの感じと対峙し、その要領をわかるようになる。したがって、例えば、ボールの蹴り方や投げ方などのコツを身につけようとする（身体化）は、実際には、客観的に提示されたやり方をわれわれがただ単に写し取る（模倣する）というようなことではない。そうではなく、そこで示されたやり方を自分でやってみて、そこに発生してくる自分の運動の感覚と対峙し、自らの動きの中からそのやり方の妥当性を了解しようということだと言えよう²⁴。このとき、やり方は自己の外部にあるのではなく、あくまで動きの当事者のなかに「ある」のである。このようにやり方が外部にではなく、常に運動の当事者が動きを発生させるところに「ある」（指導者のアドバイスに導かれて）ということから、そのやり方は運動が“できて”はじめてコツとしてわかるものなのであり、その逆ではないと言えることができる。

本来、運動が“できる”あるいはコツがわかるというのは、まずもって自分自身がその運動が“できる”ことを前提としており、外部から提示されたやり方を知識としてわかる、説明できるということとは区別されなければならない。その場合のわかるは、あくまで実践とは関連のない知的な理解にとどまっている。このことから、コツがわかるためには、まずは自分も「やってみる」ということがどうしても必要なことになる。コツがわかる（了解する）のは、まずは実行が起点になるのであり、実行を伴わない頭での知識的理解からではない。コツとの出会いは配視の中で生じるものである。

²⁴ 要するに、「配視」という“わかり方”の特徴は、基本的に、実際に行なう中でいろいろなことに気付きながらわかっていくという点にあり、その実行のなかで“できる”が積み上げられていくのである。従ってこの場合、個人技法は“できる”の積み上げを前提として“わかる”ということになる。

第2章 スポーツにおけるコツの概念

この章では、スポーツにおけるこれまでの技術論の展開が素描され、スポーツ技術は科学技術とは区別され、そこでは“できる”ということに関わって「コツ」が問題とならざるを得ないことが指摘される。さらに、この場合の「コツ」は直観的にとらえられ、モナドコツとして主観的かつ普遍的な内容を有していることが強調され、“できる”に関わって学習者が語るのはこのような性質や特性をもつコツであることが指摘される。

1. スポーツにおける技術論の展開

体育やスポーツの世界において、技術ということばが人口に膾炙するようになって久しい。この技術については、これまで内外の多くの学者や研究者によって、研究論文や著書の中で取り上げられてきた。

金子は、スポーツ技術の概念をめぐる多くの研究者たちの論議をまとめ、技術論を展開している(45:99頁以下)。その中で、ベルネットの指摘として、スポーツの世界で技術(Technik)という語が取り上げられるようになったのはアテネオリンピック(1896)以降であることが述べられている。そのベルネットによれば(9:S.118ff.)、スポーツにおける技術的な運動形態は、汎愛派以来、学問的な考察の対象になっていて、陸上競技の技術の学問的な前提はフィートによってすでに作られていたことをクリング(1795)は確認しているという。しかし、その概念の明確化ということになると、それはアテネオリンピック以降のものであり、アングロサクソン人が使った *trick* (経験によって確かめた熟練の洗練化された形態) ということばが最初である。金子によれば、シュネルはそれを *Kniff* とドイツ語訳し、さらにブルストマンは1910年に3大Tとして、「Technik (技術)」「Training (トレーニング)」「Taktik (戦術)」を区別し、技術の概念規定に大きく貢献したという。体育やスポーツの世界において、運動技術の概念はこのようにして発生した。

しかし当時の運動技術は、探求しようとする最も良い実施のやり方であり、熟考と試行のなかから獲得されるやり方の法則の総和であると認識されてはいたものの、それはもっぱら力学概念を用いたメカニズム的理解であったようである。そして、当時はまだ英語の *technic* と *style* が同義語扱いであったり、ドイツ語でも *Technik* と *Stil* の概念はまだ明確にはなっていなかった。当時の技術に対するある程度まとまった概念規定は、金子によれば、1923年のシュヴァルツェの文献(1923)まで待つことになるという。こうしたことを根拠として、金子は体育やスポーツの世界において技術ということばおよび概念が現れたのは20世紀初頭になっ

てから、という見方を示している。

この20世紀初頭において体育・スポーツの世界で取り上げられるようになった技術は、言うまでもなく、*Bewegungstechnik* あるいは *sportliche Technik* の意であって、それは「運動経過 (*Bewegungsablauf*)」に限定される事柄である。金子によれば、この意味の運動技術の概念に関しては3大Tを区別したブルストマンの研究に始まり、多くの専門家によって論じられ、運動の鑄型化や様式、習熟の形成などの技術の周辺的な問題への取り組みがあったという。その後、第二次大戦後になると、ボイテンデイク、マイネル、ベルネット、ケラー、トログシュ、シュナーベル、フェッツなどによって、運動技術の概念に関する研究が多数発表されるようになり、本格的な技術論が展開されるようになった。中でも、マイネルやベルネットの技術認識は有名であり、当時のスポーツ界にも大きな影響を与えた。金子の分析に基づけば、その後、1968年にポーランドのワルシャワでスポーツ技術に関する国際シンポジウムが開催されるに至り、1960年代後半までには術語論としての技術論議はある程度落ち着きをみたという(55)。

1970年以降は体育理論からスポーツ科学への衣更えの時期であり(53:2頁以下)、スポーツトレーニングの一般理論あるいはコーチング論の構築が前景に立てられるようになり、1960年代に隆盛であった技術の術語論は影を潜めてしまった。代わって、技術情報のシステム理論に傾斜した運動学習論や技術トレーニングに関する研究論文が増加した。この時期のこうした傾向は、体力面の研究や管理論、周期論などに比して、スポーツ技術の一般理論の研究があまり進められなかったことを意味している(53:3頁)。

こうした中で、1960年代当時にある程度まとめられ、それ以降市民権を得るようになった技術の概念規定を見てみると、実践のなかで発生し検証された合理的な運動のやり方(*Verfahren*) (マイネル 1960)、指導内容としての運動のやり方の法則(ベルネット 1962)、さらに一定の運動の課題を解決するために発達してきた合理的な運動形態(*Bewegungsform*) (国際スポーツ専門語会議: 1965(10))といったものがある。つまりスポーツの技術は、運動の達成との関連で取り上げられ、課題達成を保証していると考えられる運動のやり方であった(142:166頁)。

しかし、このように技術概念が定義されても、そこで言われている運動のやり方や運動形態がどのように、どんな内容で理解されるべきものなのかについては、実際のところ明確に示されていない。運動のやり方や運動形態のこのような不明確さ故に、その後、グロッサー／ノイマイヤーら(1982)によってなされたスポーツの技術の定義は次のようなものとなった。すなわち、運動の理想的なモデル(*Idealmodell*)、またそうした理想的な運動(*Idealbewegung*)

を実現するための合理的な課題の解決法（Lösungsverfahren）、あるいは合理的な動き方、というようにである。この意味の技術は「ことばや図で、バイオメカニクスや数学の用語を用いて、機能解剖学の用語を用いて、さらにはそれ以外の方法で記述することができる」（21：S.8;2頁）というように、技術をまさに科学的な原理や自然法則性との関連で考えているといっているものになっている（21：S.8：2頁以下）。

2. 運動技術と科学技術との差異

スポーツにおいて技術ということばは、今日、例えば「技術系種目」、「技術欠点」、「技術点」などのように、運動の種目特性を表したり、演技の評価視点として使われることもあるが、しかし多くは、例えばサッカーでは「ドリブル」、「シュート」、「ヘディング」など、体操競技では「け上がり」や「宙返り」などの「技」（技術として取り上げられた運動形態）を指して言うときに使われる。また、この技術ということばは個々の局面や動作を指して言うことも多い。例えば、助走の技術、踏み切りの技術、着地の技術、振り出しの技術、振上げ型技術、反り型技術、巻き込み型技術、突っ込み型技術という言い方、さらには、側湾技術、握り直し技術、肩角減少技術、ホップ技術、スライディング技術、回転加速技術、緩衝技術、順次接触技術、あふり技術、抜き技術、落とし技術、はずし技術、肩かぶせ技術などである。

このようにして取り上げられる技術は階層構造をもつことが指摘されている（4:190頁以下）。例えば、陸上競技の走高跳では、バーをとび越すための合理的なやり方として「背面跳び」が、器械運動の鉄棒では鉄棒の上に上がるやり方として「逆上がり」が、柔道では相手を投げるやり方として、例えば「大外刈り」が、一般に技術と言われているが、この場合の技術は、ある行動課題を合理的に解決する仕方という意味で、名前が付けられた特定の運動形態（4：190頁以下）を指しているのである。これに対して、この特定の運動形態（技術）を構成している機能単位は、下位技術とみなされる。例えば、金子のいう特定の運動形態の実施に関わる中核技術、導入技術、移行技術がそうであり、また、助走、踏切などは機能局面であり、そこにはそれらの技術や機能局面を成立させる多くの下位技術がある。

このような階層性を有する技術に対して、金子はそれまでの諸々の学者や文献、また国際会議等で示された概念規定を詳細に検討し、その結果としてマイネルの概念規定の立場に立っている（45）。マイネルはスポーツの技術を次のように述べている。「スポーツ技術は、ある一定のスポーツの課題をもっともよく解決していくために、実践のなかで発生し、検証された仕方であると解されよう。その解決の仕方は合理的でなければならない。つまり、それは現行の競

技規則の枠内で、合目的な、できるだけ経済的な仕方によって高いスポーツの達成を獲得するものでなければならない。」(98 : 261 頁)

マイネルのこの概念規定のポイントは、以下の点にある。それは、運動経過に関わる点、現場で発生するという点、その限りでの最善の課題解決のやり方である点、競技規則が関係する点、そしてその合理性という点である。しかし金子はこのマイネルの概念規定に追従するだけでなく、さらにこうした概念規定の背後にある本質問題を詳細に検討して、その上でこのマイネルの概念規定の妥当性を主張している。

金子は『運動技術論』(1968)のなかで、このマイネルの概念規定を補足する形で、それまでの概念規定に共通して見られる合理性という技術の本質的特性をめぐって、運動技術と鑄型化の問題、様式との混同の問題、スポーツ運動が行われる諸条件や規則との関係、合目的性と経済性の問題、個人技法と技術との関係、技術の過程性(時間的、時代的制約性)、技術の定立の問題などを考察している(45)。言うまでもなく、こうした考察はスポーツ技術の何たるかに現場サイドから真正面から問いかけたものであり、概念規定において重要かつ不可欠である。

この中で、金子はとくにスポーツで言われる技術は生産技術などの科学的技術と本質的に異なる性格をもっているという点を強調している。この点について、金子は次のように述べている。「もちろん、この技術は機械技術のように個人の能力が最小限に縮減された状態で通用されるのではなく、ある一定の運動能力の前提を練習によって作り出した上でなければ、適用され転移されることはできない。生産技術も個人の動作習熟を無視することはできないであろうが、次第に自動化されて動作の局限化の方向に進むのに反して、運動技術は高度になればなる程、その前提となる運動の質的習熟や身体的能力は多く要求されることになる。これは生産技術と運動技術の本質的な差異をあらわす一つともいえる」(45 : 108 頁)。この金子の言は、スポーツにおける運動技術が生産技術などの科学技術との差異をもつ固有の問題であることを示しているのである。

3. 人間の行為に対する技術認識

ここで言う技術(テクニク : Technik, tecnica)という語は古代ギリシャ語のテクネーを語源とするが、この技術ということばは、ひとまず、ものをつくる、それも人間が手とところを使ってものをつくることにかかわっている行為概念であるにとらえることができるという(36 : 7 頁以下)。

古代ギリシャ語のこのテクネーという語を、プラトンはエピステーメ（因果法則と結びついた知識）と結びつけて理解しようとした。つまり、ものをつくるにもそこに因果性がとらえられていることを前提とした概念がプラトンのとらえたテクネーなのである。このプラトンのテクネーはより高次の認識段階にある概念であり、科学技術という今日一般に用いられている技術の概念がこれにあたる。

プラトンはこのテクネー概念を論じる際に、その否定形としてトリベール概念（熟練、巧みさ、経験的技術等）を対立させ、それにテクネーより低い価値を与えている（110：74 頁）。このトリベール概念は、「単に、経験を積み重ねることのなかで得られる技法」にすぎず、また「因果的な自然の本性に関する把握なしの、つまりは *alogos* の性格」（109：15 頁）をもっているもので、かりにそうした技法で何かをなし得ても、それが因果性の知識に裏打ちされていなければテクネーというにふさわしくないと述べている。料理の技法や絵を描く技法、彫刻を彫る技法も、この意味で言えば、トリベールとして単なる経験から導かれたものにすぎず、テクネー、すなわち技術としての資格を持ち得ないことになる。

ここで言われる技法は、言うまでもなく、まさに料理をしたり絵を描いたり、また彫刻を彫るときに経験を通して重要だと認識されるようになったやり方を指しているのであり、プラトン流のテクネー解釈によれば、そうしたやり方はトリベールとして、単なる経験的レベルの域を出ず、テクネー（技術）の問題になり得ないことになる。しかしこうした料理をしたり絵を描いたり、また彫刻を彫るときに技法ないしやり方こそがスポーツにおける運動技術と密接な関係をもっているのである。

加来によれば（128：257 頁以下）、プラトン流のこのようなテクネー解釈はそもそも弁論術が技術ではないことを証明しようとして、テクネーとトリベールあるいは経験（エンペイリアー）の間の次のような違いに着目して行われたという。すなわち、ひとつは扱う対象の取り上げ方の違いであり（テクネーはつねに取り扱う対象の「善」を目指すのに対し、トリベールは対象の快を目指すだけである）、もう一つは対象を理性的な認識によって取り上げ、それを理論的に説明できるかどうかの違いである。つまり、「技術は、それが取扱う対象の本性についての、理性的な認識によって得られた知識を基礎としているものであり、したがって、それがとり行なう処置についても、その理由なり原因なりを、理論的にはっきり説明することのできるものである。ところが経験のほうは、対象についての理性的な認識を欠き、ただこれまではこうすればこうであった、というだけの記憶を手がかりとして、全く無理論、無計算に、たんに勘（感覚）にもとづいた当て推量をするだけのものであるから、したがってまたそれは、それぞれの

場合において、それがとり行なう処置についても、またどうしてそうするのかという理由をも、何一つ理論的には説明できない」(141：258 頁) ところに両者の違いがあるというのである。

このような根拠によるテクネーとトリペーの区別の意義は、まずもって弁論術が技術ではないことを証明しようとしたところにあるが、こうして両者を区別する考え方は、例えば今日の科学技術ということばに代表されているように、技術概念を自然科学と結びつける根拠ともなっていると言えよう。つまり今日、技術ということばは一般にプラトン流のテクネー解釈に基づいて理解されることが多いのである。

一方、日本語の技術という漢字自体は、古くから中国や日本の古典に登場しているが、日本語の近代以前の時代に用いられていた技術なる語は、芸術と同義であったという(36：11 頁以下)。当時の芸術の概念は今日の美術や工芸ではなく、広く生産技術や産業技術の全体を指していた。この芸術概念が今日のような技術概念と区別されるようになった発端は、19 世紀に西欧の新しい思想、文化、学術としての「Art and Science」に接したところからであり、さらに技術という日本語が日常生活のなかで市民権を獲得するようになったのは、大正デモクラシー期であるという。それ以降、日本においてはこの技術ということばは急速に広まると同時に、第二次世界大戦後の 1956 年の『経済白書』で用いられた「技術革新」なる新造語以来、その使い方が実に多彩になり、ますます拡大して用いられるようになっている(36：13 頁)。

確かに今日では、日本語の技術ということばは科学との一体化傾向を強め、技術と科学との境目ははっきりしなくなり、科学技術ということばに代表されるように、技術概念は自然科学と一体化して用いられるようになっている。しかし一方で、熟練や巧みさを意味するスキルも技術と呼ばれることが多い(36：23 頁)。さらに、生きる技術、考える技術、書く技術、学び方の技術、翻訳の技術、スキーマの技術等々、技術の使われ方は実に多様である(36：9 頁)。

このように、われわれが生きる技術、考える技術、書く技術、学び方の技術といった場合、それらは必ずしも因果律に基づいて知識としてのエピステーメ(自然のなかに本来的に存在する因果的な関係の知的な把握)と結びつけられているのではなく、まさに経験の積み重ねから抽出された生き方、考え方、書き方、学び方、すなわちやり方そのものが意味されているのではなかろうか。

このように考えてみると、今日、多様に用いられている技術(テクニック)なる語の理解は、エピステーメを前提としたプラトン流のテクネー解釈だけで済ますわけにはいかない。少なくとも、われわれのスポーツの世界で用いられる技術の概念を理解しようとする際には、単純に、プラトンの言うエピステーメと結びつけたテクネー概念と理解することはできない。もちろん、

技術（テクニク）をプラトン流に解釈するならば、経験の積み重ねから獲得されたやり方はやはりトリペーととらえられて、暫定的な知識としての「ドクサ（思い込み）」を背景にしたものとして、テクネーより低い価値づけがなされ、技術とは呼ばれないことになる。この場合、その技法ややり方がプラトン流のテクネーとしての技術であると言いうるためには、いわゆる科学的立場から理論的な裏付けがなされる必要があるからである。村上はこのようなテクネーとトリペーの違いを次のような例で説明している。例えば、建築（大工）の技法において、直角を得るために、一本の縄のループを $3 \cdot 4 \cdot 5$ に分割して目印をつけた基準縄を使うことがあるが、それが単に経験の積み重ねから知られて使われている限りではそれはトリペーに止まるが、それがピュタゴラス的、数学的な知識から演繹的に生み出され、裏付けられた「 $3 \cdot 4 \cdot 5$ 」の基準縄の使用であれば、それはテクネー（技術）ということになる（110：74 頁）。

この考え方に従えば、われわれがスポーツの世界で一般に言っている技術は、そこに科学的な理論的裏付けを加え、その基でそのやり方をする場合に、はじめてそれが真の意味のテクネーとなり、技術と言えるということになる。今日のスポーツ科学における技術分析は、まさにこのような考え方をベースにしたものであると言えよう。

しかし、われわれがスポーツでしばしば用いる技術、例えば、ジャンプの技術、け上りの技術、宙返りの技術、はずしの技術、バッティングの技術、踏み切り技術等々は、因果律に基づく性の自然科学的知識としてのエピステーメを背景にして言及されるようになったものだとは言い難く、多くは経験から取り出された経験則（実践知ないし身体知）としての性格をもつ、まさに技法（Kunstregeln）とも言うべきやり方なのではないだろうか。つまり、この経験則としてのやり方は、プラトンの言うエピステーメと必ずしも結びついているものではないということになる。とするならば、われわれがスポーツの世界で、まさに実践現場でしばしば用いるやり方としての技術の内実は、プラトン流に言えばトリペーの次元にあることになり、われわれが体験から導き出したこのやり方の価値は単なる経験として軽んじられ、学問的には無価値なものとなってしまう。しかし、それは一貫して、行為主体の意識に関係した内容であり、行為者が何かをする際の注意すべき点あるいはその要領、また自らどのように行動ないし運動をしたらいいかというときの行為者が取り上げるべきやり方なのであって、エピステーメと結びつけたプラトンのテクネー（「技術」）概念からは区別されるべきものである。

またすでに述べたように、能力表現としての“できる”はその基本義の「出で来」から考えてみれば、“できる”は、できることがわれわれに能力として「発生してくる」ことだと解することができる。ハイデガーによれば、テクネーはこの＜出で＝来＝たらしめること＞

(Her-vor-bringen) に属するものであるという。つまり、テクネーは“できる”の次元にあるということになる。少なくともここで言われる“できる”は、「ものごとをうまく処理する」という場合の“できる”である。

また、アリストテレスも本来の意味のテクネー概念を実践知として、人がものを作り出すときの仕方、すなわちやり方としてとらえているが、アリストテレスの場合は、このものを作り出すやり方は「<ああしてもよい>し、<こうしてもよい>」もので、一つのやり方に限定されるものではないという(67:384 頁以下)。アリストテレスは、人間が「ほんとうのもの」をとらえる仕方の「知」の分類として、技術(テクネー)、科学知(エピステーメ)、思慮(フロネーシス)、叡知(ソフィア)、理性(ヌース)を挙げ、このうちテクネーとフロネーシスはいろいろな仕方があってもよく、そこには巧拙が生じるとし、他方、エピステーメは「ああしてもよい、こうしてもよい」というものではないととらえている。まさにこうしたアリストテレスのテクネー概念(やり方)こそ、われわれがスポーツの現場でしばしば用いる技術概念と合致するのではないだろうか。

さらに、ヒポクラテスの医術(実践の技術であって、病人から病患を除去し、病人の苦痛を減じる術)における技術観を見てみると、われわれのスポーツ領域における技術概念を追求していく上で興味深い共通点が浮上してくる。ヒポクラテスは、実際の病人の病気への対応という観点から、医術という技術は空虚な仮定を必要としない(26:59 頁以下)、言い換えれば、実践を第一とするという立場を強調している(81:48 頁以下)。そこでは、技術の要素として経験に基づく技能と知識があげられ(81:48 頁)、プラトンが軽視した料理法(プラトンの言えぱトリペー)は単なる経験として蔑視されるべきものではなく、そもそも医術(医学)の源なのであり、料理法は技術なのだという(26:61 頁以下:81:48 頁以下)。

このヒポクラテスの医術(実践の技術)としての技術観は、プラトンの「テクネー＝エピステーメ説」だけで技術を考えてしまうわれわれにとって、ひとつの大きな示唆を与えてくれているように思える。スポーツの現場で言われる技術は、ヒポクラテスに従えば、実践の技術であって、指導者が学習者や選手に運動を“できる”ようにさせるための術であり、また学習者自らが“できる”ために経験に基づいて得られた技能ないし「知」であると言える。

スポーツの現場において行為として行う身体の動かし方あるいはやり方は、課題解決に重要な意味をもつが、このやり方が技術であるという認識は、まさにアリストテレスの技術観やヒポクラテスの認識を根拠としてはじめて成立するものと考えられる。

4. 技術とコツ

(1) 技術認識にとって不可欠な“できる”とコツの関係

スポーツにおいて、運動技術の概念はもともと技能（“できる”という能力）の発揮を保証する個人の運動習熟と不可分に結びついていた。すなわち、例えば、ボールを投げることができするためのボールの投げ方、逆上がりができるための身体の動かし方（やり方）が一般に技術と解され（155：14 頁）、そこでのやり方は“できる”を左右するものとして認識されていた。しかし、一方では、このような技術とみなされるやり方の運動経過を客観的、科学的に提示しようとする努力の中で、次第に技術と“できる”の関係は希薄になってしまった。

こうした中で、すでに述べた科学技術との差異を強調した金子は、スポーツにおける技術は、戦術や運動様式、そして習熟や練習目標としての運動を生徒に獲得させる手順や方法とは区別されるものであり（55：20 頁以下）、運動課題を達成“できる”ときのやり方で、公共的な性格（48：202 頁）をもつ、という認識を示したのである。

こうして今日、スポーツにおいて技術と呼ばれるものは、“できる”ための個人のやり方が一般妥当性のある運動のやり方として定立されたもの（45：107 頁）、あるいは、「超越論的な動感身体知としての間動感性をもつ公共的技術」（69：224 頁）と解されるようになっている。しかし、このような技術の概念規定は“できる”と直接関係するコツの概念が導入されたことによって可能になっていることに、われわれは注意しておかなければならない。

個人的なやり方（個人技法）は、言うまでもなく、“できる”ことを目指したその個人のなかに発生するコツを契機にしてとらえられるやり方である（48：203 頁以下）。金子によれば、個人のなかに発生するコツは運動感覚的意味核（67：274 頁）あるいは運動感覚の意識現象（67：227 頁）であって、「明確な言表を拒むものであり、『こんな感じ』としか言い表せない」ものである（67：254 頁）。金子は『わざの伝承』（2002）のなかで、運動における技術というものをこのコツとの関係系のなかでとらえ直しているが、それは『運動技術論』（1968）のなかですでに指摘されていた、個人技法は技術の温床であるという考え方をさらに深めたものであると考えられる。

確かに、個人技法はあくまで個人の身体条件や運動能力、またその個人特有の意識や感覚内容、癖、考え方、性格などを前提として、その個人が「苦しい練習を積み重ね、あるいはうたかたの解決に狂喜し、あるいは解決つかぬまま灰色の世界に長大息し、暗中に模索しながらその技術的解決法に挑んでいく」（45：107 頁）という試行錯誤に基づく個人的努力の結果習得された“できる”ための運動のやり方であって、きわめて個人色の強いものであることは言う

もでもない。したがって金子が指摘しているように、「課題解決にあたって、個人的な多様な前提条件の上に合目的的に経済的に行われる「運動」(Bewegungsablauf) そのものは直ちに技術としての成立を意味しない」(45:107 頁)のである。つまりたとえある個人にとって成果の出るような“できる”ためのやり方であっても、その「個人のくせや枝葉末節的方法をあたかも合理的な方法の中核をなすもの」(45:107 頁)としてしまうことはできないのである。さらに言えば、個人にとってその“できる”ためのやり方が成果が上がるものであっても、そのままではそれは誰にでも通用しうる成果の上がるやり方、つまり技術とは言えないのである。

このようなことから、金子はこの個人の課題解決法(個人技法)を技術として一般化していくには、すなわち、そのやり方が公共的な内容と判断されるためには、そのやり方が他者に転移可能であることが確認されなければならないと述べて(49:35 頁)、「個人技法の中にある一般化しうる技術性をみきわめること」が重要であることを指摘している(45:107 頁)。この金子の指摘は、その個人の“できる”を成立させているコツ(運動感覚的意味核)が誰にも当てはまるものなのかどうかの吟味が必要であることを説いているのであるが、公共的なやり方という技術の認識にとってまずもって重要になるのは、個人が実際に“できる”ということ、その際にその個人が会えるコツと関係させてとらえることである。

(2) コツの主観性と普遍性

すでに述べたように、個人技法というものは、“できる”ために個人の中に発生するコツを契機にして生じてくるやり方であり(67:257 頁)、そのやり方の内容は極めて主観的なものになるという(48:203 頁)。他方で、金子によれば、その個人のコツは次第に「われわれのコツ」として共有されていき、さらに「公認されたわれわれのコツ」へと昇華されて社会的承認を得るようになるのだという(67:282 頁以下)。この点に関して、金子はまた次のように述べている。「たがいに共通する内容把握を認め合って、その“こつ”は公共性を帯びはじめる。この公共的な“こつ”が原初的な技術の発生である。」(48:204 頁)つまり、「個人技法的な“こつ”(trick, Kniff)は公共的な、一般化された“こつ”(technique, Technik)へと煮つめられ、昇華されて、技術となりうる」(48:220 頁)、と言うのである。このことに従えば、ある個人技法が公共性の次元で取り上げられるということが、その技法を技術として位置づけるための条件ということになる。

しかし、個人が掴んだコツというこの主観的意識現象をどのようにすれば公共的な次元にまで引き上げて技術として提示できるのだろうか？ある人のあるやり方(個人技法)を一人でも

他者に転移させてみてそれで成功すれば、その人のコツは技術になった、ということなのだろうか？金子によって技術はコツと関係づけられるという認識が得られたが、そもそもこの技術とコツと個人技法との関係の本質を、われわれはどのように理解すべきなのだろうか？

コツは、すでに述べたように、運動の体験を通して個人内に発生するその個人にしか分らない運動感覚的意味核である。だからこそそれはあくまで個人的なものなのである。その限りでは、それは主観的なものでしかありえない。しかしこの主観的で個々人で違うコツが如何にして私一般のコツ、一般妥当性のあるやり方へと高められるというのだろうか？

金子はフッサールを拠り所として、自分にしかとらえられない自己運動のなかにも客観化への志向体験が潜んでいることに目を向けている。すなわち、個人的志向体験のなかにも他に共通するもの（類的核）をとらえる働きがあるというのである。これは客観化作用ないし対象化作用と呼ばれ（71：18 頁以下）、そこには理論的態度があるという。

この理論的態度とは、「私は思惟する、私はある作用をスペチエス²⁵的な意味で遂行する、私は主語を措定し、次いで述語を措定する等々」（33：4 頁）の態度であり、この態度はうれしい、かなしいなどの単なる心情的、感情的な態度とは区別されるものである。フッサールは次のように述べている。「われわれが物理学者として輝く青空を観察している場合には、理論的な見方をしながら、それと同時におそらく快感も感じているであろうが、しかしその快感に浸っているわけではない」（33：8 頁）。また、次のようにも述べ、心情的態度と理論的態度の違いに言及している。「われわれは一枚の絵を眺めて《楽しむ》ことができる。その場合のわれわれは審美的な快感に浸って、まさしく絵を《楽しむ》という快楽的態度で生きている。しかしそのあとわれわれはその絵を美術評論家や美術史家の目で眺めて《美しい》と判定することもできる。その場合のわれわれは理論的に判断する態度を取っているのであって、もはや評価し楽しむ態度で生きているのではない。・・・しかし・・・評価することは、判断によって価値ありと認めること、ないしは価値について述定することであると解するならば、それは心情的態度ではなく、理論的態度を表していることになる」（33：8 頁以下）。このような理論的態度をもって対象化作用が働くことによって、志向的体験は単なる個人的なことではなく、一般性へと高められるのである。

またこうした問題をカントに従って考えると、次のようになる。人によって受け止め方が異なるコツは、カントの言う趣味判断（Geschmacksurteil）（73：70 頁以下：310 頁以下）にあたり、感性学的判断（ästhetisches Urteil）と考えることができる（100：34 頁）。カントによ

²⁵ フッサールの場合、スペチエス（Spezies）とは、「普遍的なイデア的同一者」のことを表している（33：215 頁）。

れば、趣味判断という感性学的判断には、自分だけではなく、公共性をもった普遍妥当性が含まれているという（100：34頁）。例えば、「美しい」という判断は単に私だけではなく、一般的にもそういう判断が成立することを暗に示しているのである。すなわち、「私にとって」の判断ということには、常に「誰にとっても、そうであるはずだ」という要請が含まれているのである。

同一の課題に取り組んでいるとき、一連の運動経過のなかのどの局面でどのようなタイミングで、どのようにして行うかなどはもちろん個々人で違う。つまり、コツや動きかたの有効性に対する判断というものはその個人の主観的な判断（48：203頁）なのであり、多分に人によって異なるものである。まさに各人が取り上げるコツは多様であると言えよう。しかし、コツのこの主観的な判断をカントのいう趣味判断と考えれば、そこに他者と共有し得る側面があることが認められることになる。

さらに、ベルグソンの直観の概念に基づいてこのことを考えてみることはきわめて有益であろう（124：126頁以下）。ベルグソンの直観とは、基本的に、対象そのものを実感し、その対象そのものとなってその対象そのものを内から知ろうとすることである。しかしわれわれは木になれないしビルになれないし、また車にもなれない。すなわち、木をビルを車を直観し内から知ることはできない。「内から知る」とは、そのものになって知ることを意味するからである。この直観によって、対象自体（意識や動感）が実感をもって「わかる」のである。この「わかる」ということは、言うまでもなく、実際に運動するときの＜感じ＞、またそのときの運動感覚的意味核としてのコツを実際の感じとして「わかる」ということであり、そこでは主体基準系から物理座標系への座標の変換、すなわち記号や数字等への何らの変換もなされない（143：6頁以下）。言い換えれば、コツは運動感覚の意味核であるが故に、そもそも他のものに変換できないものなのである。け上がりをする際のコツが「わかる」には自ら実施しなければならない。

澤潟はこのような直観を次のように説明している：「直観の可能なものがある。それは意識である。例えば、私が腕を動かす場合を考えてみよう。その腕の動きは外から眺めることができる。しかし、その動きは自ら腕を動かす動作に即して、それを内から実感することもできる。そしてそのおり内感される意識は、外から眺められる腕の空間的な位置の移動とは全く別種のものである。そして、それこそ正に意識と呼ばれるものなのである。しかも、それはただ内感のみ知りうるものなのである。換言すれば、意識は直観によってのみ認識しうるものなのである」（123：15頁以下）。

このように直観の対象は意識であるが故に、必然的にそれは個の独自性に向けられる（内的直観）。また、澤潟はベルグソンの直観論は発展的な側面を示している点に触れて、ベルグソンの直観論はこの内的直観だけではなく、意識以外の外的対象（物質）と関わる時には肉眼ではなく心眼で見るのであり、この心眼の働きも直観であり、それは外的直観であるという（124：147頁）。

澤潟は、このような内的直観と外的直観について説明する中で、ベルグソンの直観が「その対象の独自性を認識させるだけではなく、その個性の独自性を可能にしている一般者をも把握する」（124：149頁）ものである点を強調している。澤潟はこの場合、この一般者を抽象的一般と具体的普遍とに区別している。澤潟によれば、このうち抽象的一般は、個の個性を考慮しない平均値的な意味合いをもち、「最高の一般者でありながら、実は内容のない空虚な『無』」であり、これに対し具体的普遍は各存在の個性や特殊性を認めた上で、それらの個性を可能にしている一般者であるという（6：289頁，124：149頁以下）²⁶。このことは、直観というのは単に具体的な個の内から知ることだけではなく、その具体的な個の内から知ることによって普遍を見るということ（124：146頁）、すなわち直観の内容は一般者（具体的普遍）にも通じている、ということの意味している。

このように、フッサールのいう多数に共通する一者（類的核）というものをとらえる働きが理論的態度を取る客観的作用（対象的作用）としてわれわれの志向的体験にあるということ、またカントのいう趣味判断という視点からは普遍性も取り上げられるということ、さらには、直観は個の対象の独自性をとらえるものだが、その個なる視点は一般者に通じているというベルグソンの直観概念から考えてみれば、個人が取り上げる主観的なコツは、実はその個人だけのもの、と単純に言うことはできなくなる。それは、まさに間主観性²⁷、間身体性の次元にあるということになる。

コツの発生はその個人から見れば確かに個人的で主観的なものであり、個人技法は確かにそこから成立している。しかしそのときに拮むコツは、多数に共通する一者をとらえる志向的努力の結果獲得されたものでもある。そうすると、そのコツの発生は単に私的な事態に止まらな

²⁶ ベルグソンによれば、抽象的一般とは例えば、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫と並ぶ虹の彩をを無視して、それらをただ「色」と呼ぶことであり、具体的普遍とは、そうした個々の色合いを認めただけで、そうした彩色が一点にまると純白色になることをとらえることである（6：289頁，124：150頁）

²⁷ 竹田は、間主観性を次のように説明している；「＜私＞と＜他人＞がともに唯一の世界の中にあるという確信を持ちあっているその関係を、「間主観性」と言うのではけっしてない……。そうではなく、「間主観性」とは、“他我が＜私＞と同じ＜主観＞として存在し、かつこの「他我」も＜私＞と同じく同一の世界の存在を確信しているはずだ”という＜私＞の確信を意味する。間主観性とは、＜私＞と＜他者＞の相互関係を言うのではなく、＜私＞の確信のある構造をさしている」（179：131頁以下）。

くなる。このような認識を前提にすると、コツという主観的なことがすでに一般性、公共性という次元で取り上げる技術に通じていると考えることができる。個人技法は、単なる個人的で主観的であるがゆえに技術とは言えないというような単純な図式では理解できないことになる。

こうしたことを根拠とすると、個人のなかに発生する運動感覚的意味核としての主観的なコツは、その根底ですでに誰にも当てはまる「われわれのコツ」としての普遍性、すなわち技術的性質をすでに合わせ持っていると考えられる。言い換えれば、コツ自体がすでに間主観的なものである、それは自己に閉じこもった自分だけの蔑視的な意味での単なる個人的、主観的なものではなく、他者も共有し得るものだ、ということなのである。

このことから言えることは、個人技法は間主観的なコツの一つの側面であり、他方、技術はその個人以外の人々が運動実施時において、その間主観的なコツ（運動感覚的意味核）に触れた場合に了解できる有効な動きかた（やり方）だということである。言い換えれば、技術はある運動（例えば、け上がりという技：主語形相）ができるためのより良い、あるいは、できるためには不可欠と考えられる“やり方一般”（述語形相）であり、それは個人技法（述語形態）あるいはコツ（運動感覚的意味核）との関係をもつ。

(3) コツに技術性をとらえる現象学的根拠（現出性の理論）

現象学の立場から言えば、運動の実践現場においてわれわれが“できる”ために関心を向けることになる具体的なやり方は諸現出であり、それは現出者に通じている、と考えることができる。ここでは、この「現出者—諸現出」という現象学の現出性の考え方に基づいて、コツに技術性がとらえられることの根拠を示そうと思う。

フッサールは、われわれが事物について経験するものはすべて主観と関係しているとして、次のように述べている。「われわれは・・・現出している形態と形態そのものを区別し、現出している空間的な大きさと大きさそのもの、現出している場所と場所そのものを区別しなければならない」（33：96頁）。谷はこのようなフッサールの考え方を、現出者および諸現出として次のように説明している。「たとえば机は「平行四辺形」や「台形」に描かれる。しかし、私たちは、机を平行四辺形や台形だと見ているわけではなく、「長方形」だと見ている。・・・私たちは、平行四辺形を感覚しているが、それを突破して、長方形を「知覚」している。あるいは、平行四辺形を「体験」しているが、それを突破して、長方形を「経験」している。・・・私たちは、「現出」の感覚・体験を突破して、その向こうに「現出者」を知覚・経験している」

(180 : 56 頁)。ここでは、われわれの知覚（「諸現出」）には「現出者」が伴うという現出性が指摘されているのである。

この現出者、諸現出という考え方、すなわち現出性ということを学習者や選手が取り上げる個人技法に適用してみると、次のようになる。すなわち、実際に行っている（体験している）のは運動達成のための具体的な個人技法およびその動感（諸現出）であるが、学習者や選手はその個人技法の体験を突破して、その個人技法からコツ（現出者）を経験している、と。たとえば、鉄棒の前回りにおいて回転の後半に握り換えをしてみることは（諸現出）、もしそれでうまく回ることができれば、そのときのその個人技法としてのその握り換えは、前回りの“できる”を支えているコツ（現出者）である、として受け止められる、ということである。すなわち、このやり方（諸現出）は、課題達成のコツ（現出者）に通じているということができる。け上がりができる、ボールを正しく蹴ることができる、正しい走フォームなどという場合、自ら動く中でその動きの良さあるいは正しさを自分なりに考えるが、そのとき学習者や選手自身のなかには「これではだめだ！」「こうではない！」「こうだ！」という「感じ」が生じてくる。この「感じ」こそコツであり、現出者であると言える。

このコツ（現出者）はそれ自体としては伝えられないが、諸現出、すなわち、ことばによる説明、擬態語による表現、ある場面において同じ動作を体験することなどの形で提示することができる。この場合の個人が行っているやり方（個人技法）は、コツ（現出者）の諸現出という形をとっている技術だと言うことができる。

例えば、マットの前転の技術には、順次接触技術と伝導技術が挙げられる（52 : 17 頁以下）。具体的には、前者は回転中、身体の胴体部分（背中）がマットに順次にスムーズに接触するような「身体の動かし方＝技術」、後者は脚部の勢いが上体部分に伝わるための「身体の動かし方＝技術」がその内容になる。しかしわれわれは、前者は身体を「丸くすること」「肩がマットについたあと、すぐにどすんと腰部分が着かないようすること」など、後者は「回転に入ったら、一度身体を伸ばして、立ち上がる直前に脚を引き寄せる」というような説明をすることでしか、またその示範を示すことでしか（諸現出）、そのやり方を表現することはできない。

このようにしてわれわれはある程度の具体的なやり方を提示し得るが、他方、「順次接触」技術、「伝導」技術という場合の「順次接触」「伝導」ということば自体は、前転という運動を効果的に行うための運動感覚的意味核（現出者）をことばで表現したもの（記号化）なのである。しかし、それが実際のやり方の“意味核”（現出者）に通じていなければ、この「順次接触」や「伝導」ということばの中身は分からない。

前転を何回も行い、練習し（諸現出）、その結果、この点が大切なのではないかということがコツとして、あるいは意味として浮き彫りになってくるとき、順次接触や伝導のコツ（現出者）に出会う可能性が出てくる。このコツ（現出者）との出会いが具体的なやり方（諸現出）との関係の中でとらえられたときにはじめて、われわれはそのやり方（諸現出）を技術ととらえることになる。

ここにおいて、技術抽出の流れでは、「活動（諸現出）→コツ（現出者）との出会い→技術（諸現出）」というプロセスを示すことができる。この流れは、あくまで技術抽出の流れであって、技術を身につけようとする流れを示したものではない。学習活動によって、これからすでに明らかになっているやり方（技術）を身につけようとする流れは、「技術（諸現出）の提示→練習活動（諸現出）→コツ（現出者）との出会い（できる）」となろう。逆に言えば、運動ができるようになっている状態では、現出者（コツ）を経験していることになる。

“できる”ということは諸現出としてのやり方を体験することだが、その中で現出者（コツ）を経験していることを意味する。このように、現象学における現出性の理論に従えば、コツ（運動感覚的意味核）は現出者、運動経過として取り上げることができる具体的なやり方は諸現出として技術ととらえることができる。いわば、現出者としてのコツは具体的なやり方に姿形を変えて現出するという現出性を有しているのである。

(4)「モナド的なもの」としてのコツ

このような現出者としてのコツは、私の原初的な固有領域のなかに身体化されている意識現象であり（67：265 頁）、物体として、物質として客観的な場所を占有して存在しているようなものではない。すなわち、コツは自然法則の対象とはなり得ないものである。金子は、このような自然法則の対象とはなり得ない身体化されているコツはライブニッツの提唱したモナドなのだという認識から、コツを「モナドコツ」と呼んでいる（67：265 頁）。モナド(monade)とは単子と訳され、「拡がりも形もない不可分で単純な実体であり、非物質的な力あるいは作用を実体化したもの」（200：602 頁）であり、原子とは区別される存在概念である。

金子はコツをこのモナドとしてとらえているが、それは主体をモナドと呼んだボイテンディク（12：S.26）や生きものをモナドと呼んだワイツゼッカー（190：100 頁）と同様の立場に立って、コツというものの存在論的性格を強調しようとしたからだと思われる。すなわち、コツは客観的に存在するというわけではないので、精密科学的な研究対象にはなり得ない。しかし存在論の地平において、本人にとってはその存在を否定するわけにはいかないものである。

この点を受け入れるか入れないかが、自然科学的立場に立つか現象学的な立場²⁸に立つかの違いであると思われる。

ボイテンデイクは「主体」(Subjekt) というものを「純粋な形而上学的な点」としてそれをモナド(monade)と呼んだのである。すなわち、「主体」は確かに非延長であり客観的にとらえることなどできないが、しかしそれは「すべての運動の、あらゆる意味内容の、またあらゆる変化形態の根本的な原因なのである」(12 : S.26) と述べて、主体という概念の意味を説明している(12 : S.27)。主体はモナドであり形而上学的な点だということの意味は、われわれが経験する世界(現象)はその「(形而上学的な)点」としての主体にとって現象たりえていなのだということにあり、ボイテンデイクはまさにこの意味で主体を措定したのである。

しかし、このようなボイテンデイクの言う形而上学的な「点」としてのモナドは、フッサールの視点からみると、それが単なる思弁的な形而上学的概念ではないことが明らかになる。金子は、モナドというものがフッサールの言う絶対ゼロ点のような極限にあたるものだと述べて(67 : 266 頁)、このことを強調している。このフッサールの言う絶対ゼロ点を、ラントグレーベは、次のように説明している。「もろもろの器官をそなえたわれわれの身体は、絶対的な零点であり、すべての経験にたいする定位の中心、すべての『そこ』に対する絶対的な『ここ』である」(87 : 74 頁)。また、「身体は絶対的な『ここ』であり、他のすべてはそれとの関連において『そこ』にある。つまり、それは空間のなかの物ではなくて、自己運動することによるすべての空間形成の原理なのである。」(87 : 188 頁) つまり、それは形而上学的な点なのである(71 : 15 頁)。この絶対ゼロ点あるいは形而上学的な点は、<私>に内在する空間や時間あるいは力というものを取り上げる際の関係の原点あるいは関係点である。上下、左右、前後、さっきと今とこれから、あっちやこっちなどは、<私>のその関係点からの判断である(71 : 15 頁)。

このフッサールのいう絶対ゼロ点は<私>のものであるが、この<私>はボイテンデイクのいう主体に相当する。フッサールによれば、この<私>は「豊かな具体性においてとらえられる自我」、また「人格的な個別性、習慣性や歴史性といった生き生きとした具体化のなかにとらえられた超越論的自我」(67 : 267 頁)なのであり、このような自我をフッサールはモナドと表している。

²⁸ 現象学の考え方がないし方法論の導入が不可欠だとする学問領域として、日本では木村(75, 76)の研究に代表される精神医学領域が有名であるが、地理学でも中村によってメンタルマップの問題として、超越論的還元や本質直観などの現象学的方法の重要性が説かれている(112, 113)。木村や中村がそうせざるを得なかったのは、彼らが扱った問題がその問題性からして、自然科学的アプローチにはなじまないものだったからである。

要するに、ボイテンディクやワイツゼッカー、そしてフッサールは主体や生きもの、また自我や私（絶対ゼロ点）というものに対して同じようにモナドの概念を当てているが、このようなモナド概念を使用することの意味は、主体にしても生きものや私にしても、それらは客観的に存在するもの（存在的なあり方）ではなく、パトスのなあり方（第1部第1章3(4)を参照）としてとらえられ、それは反論理的²⁹な性格を有し、しかもその本人には具体性をもってとらえられていて、ものごとの判断はすべてそこから生じているという点を重視しているからである。ヴァイツゼッカーによれば、モナドは「空間内にあるのではない、時間内にあるのではない、数えることができない、測ることができない、代理できない、分割できない・・・」（190：100頁）ものであるが、それはパトスの、反論理的な性格をもつ主体概念なのである。

これと同様な論拠から、金子は、コツもこのような「モナド的なもの」の本質的特性を備えているという（67：265頁）。すなわち、コツは「部分がないから数えられないし、測定できないし、私に固有なるものだから代理できないし、発生も消滅もかならず一挙に行われる」（67：265頁）、分割不可能にして単一の運動感覚的統一体なのだという。このような特性をもつが故に、コツはモナドというしかないと言うのである。付け加えれば、上述したように、モナドがパトスのであり反論理的であることから、このモナドコツ、すなわち、運動感覚的意味核もパトスのであり反論理的なものだ、ということになる。モナドコツは理性（ロゴス）の論理ではなく、パトスの論理をもつと言えよう。技術はこのようなモナドコツと関係をもつ。

以下の第Ⅱ部では、このモナドコツが体験上でどのように取り上げられるものなのかが考察され、さらに第Ⅲ部では、そのモナドコツの言語化に関わる問題とその言語表現構造が考察される。なお、本論では、単にコツと言うような場合でも、以上のようなモナドコツの意味で用いている。

²⁹ 反論理とは生命や出来事、出会い、生成というひとつの全体の中に相反する意味のある論理的矛盾を含んでいることを指す概念である（190：95頁以下）。例えば、反論理的な事態とは、ある言表もその否定もともに真であるような事態である。ヴァイツゼッカーは、運動行為も生成の性格を持ち、意味のある矛盾の性格をもっているという。すなわち、それは反論理的な性格を有しているという（190：96頁）。

第3章 第Ⅰ部のまとめ

第Ⅰ部では、スポーツの現場において、まず、“できる”ということ（例えば、逆上がりができる、上手なハードリングができる、巧みなシュートができるなど）を支えているのはコツであるという、“できる”とコツの関係を考察した。そしてこの考察を基に、コツの特性を示すとともに、コツの概念を明らかにし、学習者が語るコツというものの性格を浮き彫りにした。

すなわち、スポーツにおいて能力所有の表現である“できる”という現象には努力性、洗練化志向性（ゲーテ）、不完全の完全/不安定の安定（澤潟）、パトス性（ヴァイツゼッカー）といった本質的特性があり、その“できる”を支えているのが妥当性（フッサール）、可能性（ハイデガー）、配視性（ハイデガー）といった特性をもつコツ（運動感覚的意味核）であることが示された。またこのコツは通常、個人的なもの、主観的なものと考えられているが、しかしそれは単に主観的であるだけでなく同時に普遍的な性質をもつ「モノドコツ」という理解が必要であることが指摘された。

第Ⅱ部 コツの体験と認識

第Ⅱ部では、われわれがコツを体験する構造と、その体験したコツが意識とどのような関係をもっているかが考察される。

第1章 コツの体験構造³⁰

第1章では、精神医学者の安永が提起した体験の『パターン構造』という考え方をより所として、「A/B」と表記されるコツの体験構造が示される。

1. 分極構造（パターン構造）

ここでは、“できる”のために重要なコツにわれわれがどのようにして気づくのかを、精神病理学者の安永が精神病理（とくに分裂病：今日の用語では統合失調症）の世界を理解する際に取り入れた、イギリスの哲学者ウォーコップの『パターン』という概念を用いて考察する（191：17頁以下：196：15頁以下）。

安永が用いている『パターン』という概念は（195, 196, 199）、体験構造をとらえる方法上の論理的基本概念であり、論理関係にあるA, Bの概念対の対立構造、またそれによって記述されるような体験の構造関係を示している。すなわち、体験記述のために必須の一群のカテゴリ対（質／量、全体／部分、生命／物質、了解／説明等々）が『パターン』（実存的二元構造ないし体験の二重構造）と呼ばれ、その際にカテゴリーの各対はA/Bという記号で表記される。またこの両項の間にはある不可逆的關係は $A \geq B$ と表示され、さらにその強度は $a \geq b$ によって表記される。この『パターン』という概念で、またその記号的表示で、体験の各瞬間の性状をとらえ記述することができるという。

安永は、体験の直接所与のなかに分極構造があることに注目し、ウォーコップの『パターン』という概念を整理して、それをA/Bないし $A \geq B$ 、 $a \geq b$ という記号で表記したのである。またこの『パターン』概念を中核とした安永のファントム理論（空間論）（196）は、必ずしも現象学的立場を意識していたとは言えないが、安永の現象理解は現象学の系譜に属し、その理論は現象学の一つの注目すべき所産であるという（96：386頁以下）。この理論は、精神病理学の世界において、彼独自の発想から生まれた独創的な臨床的手法と位置づけられる。この『パ

³⁰ この章は、拙論「スポーツ技術の運動感性学的考察」の（文献152）の後半部分（4～6）を加筆修正したものである。

ターン』概念やファントム理論は、人間の体験構造を論理的にとらえ整理したものとして大変興味深いものであるし、われわれがコツを認識する構造を考察する上でも非常に示唆のある内容を有していると思われる。

ここに記号化されたA、B両項の体験構造の関係（『パターン』）は、正常の状態では、その特徴を次のように整理することができる（196：16頁以下：199：22頁以下）。

- ① A、Bの両項は体験の両極を表し、それぞれ単独では意味をなさず、互いに他項を必要とする。
- ② しかし、この両項は、右と左、男と女というような可換的で平等的、相対的、対称的な関係ではない。
- ③ A/B という表記の意味は、常にAから出発すればBは自ずと体験に現れ理解される、という体験の一方方向的構造関係（Bに対するAの先行性）を表している。また、その一方方向的構造を前提として両項の非対称性を表すときは $A \geq B$ 、両項の強さをも考慮して表すときは、 $a \geq b$ と表記される。
- ④ この順序は逆にはできない。すなわちBを出発点としてAの本質を理解することはできない。したがって、 B/A 、 $A \leq B$ ないし $B \geq A$ 、 $a \leq b$ ないし $b \geq a$ とは表記できない。

このような関係ないし原則は、アプリアリな関係というより、正常の状態の体験世界の事実的「あり方」をとらえたものである³¹。

安永は体験におけるこのような構造関係ないし原則をもつ『パターン』概念を、「自」－「他」、「質」－「量」、「全体」－「部分」、「統一」－「差別」、「因」－「果」などのカテゴリー対を例にとり、それぞれ自／他、質／量、全体／部分、統一／差別、因／果と表記し得るとして説明している（196：17頁以下：199：13頁以下）。すなわち、これらは体験の出発点として必ず自、質、全体、統一、因があり（言い換えれば、われわれにはまず自、質、全体、統一、因が体験される）、そこから他、量、部分、差別、果が理解されるのであって、その逆の関係構造をもたないということを意味している（もちろん、これらは $自 \geq 他$ 、 $質 \geq 量$ 、 $全体 \geq 部分$ 、 $統一 \geq 差別$ 、 $因 \geq 果$ と表記され得る）。この場合、前者は後者を必要とする、という形式をもつ。例えば、質／量（ $質 \geq 量$ ）で考えてみると、この質と量は、体験においては、互いに一方を欠いては成立しないものであり、体験はまずは何らかの質（安永の規定するところによれば、

³¹ 安永によれば、分裂病（統合失調症）の場合、この『パターン』が逆転しているという。すなわち、 B/A 、 $A < B$ ないし $B > A$ 、 $a < b$ ないし $b > a$ となっているという仮説を立てている（196：35頁：199：191頁以下）。

質は「体験をその時々においてその主体にとって（私にとって）意義あらしめる、まさにその個性的な面のすべて」（196：21 頁）である）を取り上げる。そして、そのものの量的側面は体験のもう一方の極として取り上げられる。したがってこの場合、質と量はものの性質の次元ではなく、体験自体の性質としてとらえられる次元を起点としている問題なのである。こう考えると、質、量というようなA、Bに代入される内容（概念）は、実存論的概念である。この点は、体験構造を理解する上では、きわめて重要な点であると思われる。したがって、単なる、自と他、質と量、全体と部分、統一と差別、因と果が「ある」というだけの形式的把握では、体験とは何ら関係のない抽象概念を並べただけにすぎないのであって、体験構造を問題にしていないことは言うまでもない。

安永によれば、われわれの体験一般は、すなわち、行動、認知、判断、概念理解などの行為体験は、生きた体験の場においては、常にこのような『パターン』構造をもつという（196：23 頁以下）。安永は、スポーツにおける動きのコツも、その後この問題圏に入れて考えている（198：201 頁以下）。このことの意味は、われわれの行動、運動、行為といったことを了解し、その本質問題を明らかにしていくには、主体の「体験」ないしA／Bと表記された場合のA体験が起点となる、あるいはA体験が起点とならざるを得ないということにある。安永はこのような『パターン』A／B構造を、フッサールの意識構造としてのノエシス（A）－ノエマ（B）の関係に、完全ではないが、ほぼ対応するものだとしている（196：27 頁）。

われわれが、運動が“できる”ようになろうとして、運動の当事者として取り組むとき、そこには必ず“できる－できない”、“上手－下手”、“良い動き方－悪い動き方”、さらに“できる－わかる”、“わかる－わからない”などが切実な問題として浮上してくる。また他方、動きを研究するときにも、動きの“主観的内容－客観的な運動経過（運動形態）”、あるいは“主観的な動き方－客観的な動き方”などが問題になってくる。これらは、いずれも課題とされた動きができるかできないかに関わるコツの問題なのである。

これらの一群のカテゴリー対は、慎重に考えれば、安永の言う『パターン』概念が当てはまる構造を有するカテゴリー対である。したがって、以下のように表記される。すなわち、できる／できない、上手／下手、強い／弱い、良い動き方／悪い動き方、できる／わかる、わかる／わからない、主観的内容／客観的な運動経過（運動形態）、主観的な動き方／客観的な動き方、あるいは、できる \geq できない、上手 \geq 下手、強い \geq 弱い、良い動き方 \geq 悪い動き方、できる \geq わかる、わかる \geq わからない、主観的内容 \geq 客観的な運動経過（運動形態）、主観的な動き方 \geq 客観的な動き方、というように表記される。このことの意味は、A項に代入される、例

えば、できる、上手、強い、良い動き方などが先行してB項（できない、下手、弱い、悪い動き方など）の本質が知られるような構造を有している、ということである。この関係は逆にはならない。

例えば、「できる \geq できない」「良い動き方 \geq 悪い動き方」で考えてみよう。まだできない運動の体験の瞬間において、「できない」「悪い動き方」と感じた動きであっても、その「できない」や「悪い動き方」の感じは、まだ体験していないにも関わらず想定される「できる」や「良い動き方」の感じを基準（出発点）にすることで比較考量された感じであって、この「できない」「悪い動き方」という自己判断は、そこで想定された「できる」「良い動き方」との関係で生じるものだからである（キネステーゼ的判断）。この場合に注意すべきことは、この「できる」「良い動き方」の感じは、まだ体験してわかった（身体化された）ものではないが、それでもわれわれはその「できる」「良い動き方」の感じを先取りにイメージ化し、常に基準にし得るという構造をもっていることである。もちろんこの場合、そこで基準となっている「できる」「良い動き方」の感じは、絶対的にまた客観的に「正しい」という意味の感じではない。だからこそ、一般に言われるように、「間違った感じで覚えている」ということも起こり得るのである。しかしもし、そうした基準がなければ、われわれのなかに、そもそも「できない」「悪い動き方」の感じがどうして出てくるのだろうか。そこには、自分なりの「できる」「良い動き方」の感じがまずもって前提とされていたと考えざるを得ない（199：23頁）。「できない」「悪い動き方」の感じ（B項）から出発すると「できる」「良い動き方」の感じ（A項）は基本的に了解不能であるのに対し、「できない」「悪い動き方」の感じ（B項）は「できる」「良い動き方」の感じ（A項）があることではじめて了解されるという意味で、これは『パターン』構造を有していると言えよう。この場合、「できない」感じ（B項）と「できる」感じ（A項）は別々にある二つのものではない（196：27頁以下）。

このように考えてくると、コツは『パターン』的体験構造を起点として取り上げられることが示唆される。すなわち、コツはわれわれの体験内で、体験のA項にある自分なりの“できる”、“上手”、“良い動き方”などを前提として発生してくるのである。

2. 体験の方向

このような理解に従えば、コツは体験構造を起点として生じる。言い換えれば、あるコツをどのように受け止めるかは、われわれの体験上の判断による（個人技法の体験的判断）。ここではこの問題をさらに安永の示した体験線（基準体験線）（199：25頁以下）に基づいて考察

してゆきたい。

安永は、『パターン』A/B構造をもつわれわれの体験構造を、さらにAからBへと向かう体験線（「A……→……B」）で説明している。これは体験の公理となるべきAの前項としての公理的自明性とBの後項としての論理的従属性を示したものであり（199：22 頁以下）、またわれわれの体験が主体（「私」ではなく「私は」）から対象へと向かう方向性をもつ構造を有していることを示している。この場合、Aは論理学的な体験起点であり、体験線の起点となる以外、絶対的位置はもたない。また安永は、Aを「私は＝自極」と「狭義自我」に分け、それぞれeとEとして、この体験線をe—E→……、あるいは、e→……Eというように図示している。つまり、「私は＝e」は自分の「自我＝E」を対象化し得るということから、ここでは、e（「私は」）という主語部と対象化し得るE（「狭義自我」＝「私というもの」）の体験線上の関係が示されている。この体験線をさらに右に伸ばしていくと、客体（対象）図式F（体験線がぶつかる「私にとっての」知覚像）と対象極f（このfもeに対する理論的点である—これはカントの「もの自体」に相当する）があり、体験線はさらに e—E→……F—fと図示し得るという。要するにこれらの体験線は、われわれの体験が「e＝私は」を起点として矢印の方向に向かい、われわれはその線上でその都度、具体的なこと（E＝自我、F＝知覚対象物）を体験していることを示している基準線なのである（基準体験線：このような考え方は、ほぼフッサールの言うノエシス—ノエマ構造に対応する考え方である）。この体験線でまずもって意味されるのは、われわれの体験はeを起点として、この体験線上に並ぶ多くの図式（この「図式」に関しては、後で改めて考察される）と対峙し、それが（例えば、主観図式から客観図式へと）右に行けば行くほど客観性、量的性格を帯びてくるということである。この場合Fの体験は、要するに、外界物の知覚体験である。

このような安永の想定した体験線によって、われわれがコツを認識する構造は次のように整理することができる。すなわち、われわれは自ら動く（キネステーズ意識）ということのコツの認識の端緒としているが、課題達成のために自ら動くというときの体験で自己が取り上げるコツは、体験線上の左端のeから出発して（主観的図式群ないし主観的な動きの感じ）、Eまでの範囲（e→E…）でとらえられる。この体験線でFを外界の対象知覚物とした場合、自ら動くことでとくに取り上げられるのは、ぎりぎりこのEまでであって、外界物のFまではいかない。ここでは便宜上このように理解しておく。また他方、他人の運動を見てそのやり方を取り上げるような場合には（客観観察あるいは他者観察）、原理的には、その体験線はさらに右に向かい、他者の動き方をF（客観的ないし客我的対象）として知覚体験することになるので

($e \longrightarrow F \longrightarrow f$)、そのやり方は客観的、量的、対象的な図式（モデル）の性質を帯びたものとなる。

このように体験線で考えると、われわれは e から f 手前までの範囲でやり方を取り上げていることになる。しかし自分の運動の体験ということでは、やり方を自分の体験を起点として考えることになるので、そのやり方はコツとして、あくまで e から E までの範囲にある主観的図式群ないし主観的な動きの感じ（もちろん、これも E までの範囲で右方向に行くに従って、言語化、概念化、対象化し得るものとなる）と関わっているのである。

ここで注意すべきことは、自分のコツに関しては、あくまで左（ e 方向）から問題になっているということである。言い換えれば、それは、言語化しにくいコツ（運動感覚的意味核）から、言語化ないし概念化、対象化されるようなやり方の内容へと向かっているのであって、その逆ではないということである。この点は、技術としてのやり方というものを考えていく上できわめて重要である。それは、以下の二つの点においてである。一つは、個人技法が「私はないし「私にとって」という e を起点としていること、もう一つは、それは e から出た体験線上の E までの範囲にあるのであって、その体験線の流れ（方向）を無視した、それ自体のモデル（体験から離れた単なる計算上の動き方＝ B あるいは F ）をわれわれはコツとしては認識しないということである。スポーツの動きにおいてわれわれがコツとして認識するのは、何がしかの動きかた（体験上から取り上げられる動きかた）が達成を左右する重要な契機となると、われわれが自らの動きの体験から（基準体験線の流れのなかでのキネステーズ意識から）必然的にそう思うように仕向けられ、またその重要さに気づくからである。

安永の基準体験線を用いて説明すると、われわれがコツを認識する場合、そこには $e \rightarrow f$ へと向かう認識の方向性があり、言語化はその方向の流れの中で起こるという構造を指摘できる。そしてわれわれはこの場合に、そのコツを“最適”だ思うようになり、重要だと受け止めているのである。

3. 体験の強度

これまで『パターン』構造や基準体験線によって、コツが体験構造を起点としたものであることの基本的枠組みとその認識が成立する方向性が示された。以下ではさらに、このコツにわれわれがどのようにして注目するようになるか、あるいはどんなときにわれわれはそのコツに気づくのかの構造を、『パターン』構造をなす A 、 B 両項の強さの観点を導入して考察してゆきたい（195 : 38 頁以下 : 196 : 28 頁以下）。

すでに述べた体験の『パターン』構造において両極をなすA項、B項は、さらに強さを付与して考えることができる。この場合、安永はa、bの小文字を用いて $a \geq b$ という記号で表記している。この表記はA項とB項の力関係（緊張関係）だけを表したものであるが、このように両項のそれぞれの強さを考えるということによって、われわれの体験がどのような性質のものに変容するのかが示される。例えば、質／量の『パターン』で説明すれば、aの強さとは体験の「質」的強度を意味し、bの強さとは体験での「量」的強度を意味する。さらに言えば、aが強いということは体験上の「質感」が増し主観がどのように受け止めているかという、体験の主観的意義が強く切実になってくるのに対し、bが強いということは体験上で量的側面が浮上して、客観的な面が前面に出て来るということである。例えば、喜び、悲しみ、快・不快感、苦痛など、ある体験の瞬間において、主観にとっての体験の切実さが問題になっている場合はaが強いことを意味し、物を量的に、あるいは物理的・化学的に眺める場合には、それは量的な体験であって、bが強くなっている状態であることを意味する。しかし、体験とは常にある強さのaがある強さのbと釣り合うことで成立するものであって、bがなければ（ゼロ）体験は混沌としたものであり、またaがなければ（ゼロ）体験はそもそも成立しないと、安永は言う（195：39頁）。

このようなことを前提にして、安永は正常な精神の体験論理のあり方を $a \geq b$ と表記した。つまり、正常な体験では常にaがbよりも大きい（強い）か等しい（平衡）状態であるという。これを起点として、すでに述べたように、安永は $a < b$ の状態を『パターン』の逆転する分裂病体験の構造であるとしている。しかし、われわれはこれ以上この問題には立ち入らない。われわれにとっては、今のところ、 $a \geq b$ と表記し得る体験構造がコツの体験とどのような関係を持ちうるのかを論じることができれば十分だからである。

ここで、この $a \geq b$ と表記し得る体験構造からコツに注目するようになる（気づく）、コツの体験の構造を考えてみよう。われわれの体験は、そのときどきで、a、bそれぞれの強さの増減と密接に関係し合いながら成立している。ここでは、われわれが運動をしているときにどのようにコツの体験をするか（どんな動き方がいいかを自ら問題にする）という場合には、この $a \geq b$ と表記し得る体験構造は、自分の動きが自分でどのように感じられ（a）、そのときの具体的な動き方が自分の意識にどのように写し出されるか（b）、というように理解しておこう。実際のところ、この体験構造は複雑であるが、コツの体験の問題を考える上で単純化して考えることは理解を容易にさせられるからである。

ここでは、上記のa、bをそれぞれ質、量として考えてみる。例えば、ただ単に身体を動か

しているというときには、それはただ漠然と運動している状態であって、**a** も **b** もきわめて弱いものであり、質的体験も量的体験もいずれも弱い。また、もうすでにできるようになっている運動で、とくに何も注意しないで運動をするような場合にも、そこでの体験は質的にも量的にも強いものではない。これに対して、まだできないけ上りを練習しようとか、どのように踏切ればいい宙返りができるかを考えて、そこで課題となる運動に“取り組む”場合や、すでにできるようになっている運動でも、失敗しないようにとか安定してできるようになど、“注意度を高めて”運動を実行するようなどときには、自己の運動に対する関心度は高まり、**a** も **b** も強くなり、質的体験が強まり切実さを増すと同時に、量的体験も強くなる（もちろんこの場合、取り組み方や注意の向け方の強さに関してはいろいろな層があり、それぞれの体験内容もその層に応じて多様であることは言うまでもない）。

これらの場合、質的体験 **a**、量的体験 **b** が何を意味するかというと、質的体験は運動を実行することによって生じる感覚や気分や感情、また何が大事で何がそうでないかという動きに関わる良否判別（キネステーズ意識ないし判断）などであり、量的体験とは自己の動作の具体的内容（軸足にこのように体重をかけた、腕をこのように挙げた、腰を引いた、握りをずらした、など）や動き方のイメージなどである。これらは、『パターン』構造 A/B における A と B、あるいは基準体験線と言えば、**e** 付近の純粋な無定型な感じないし主観的内容と E 付近の対象化可能な客観的（＝間主観的）内容に対応するものである。この場合、**a**（質的体験）と **b**（量的体験）は比例関係にあることも（上記の例）、またそれぞれがある程度独立性をもっていることもある（例えば、快・不快とか苦痛、また試合などでの興奮、あがり、緊張といった質的面が強い体験の場合には、量的（客観的）面が目立たなくなるときもある）（189－29 頁以下）。しかし $a \geq b$ と表記される体験構造において重要なことは、常に **a** の高まりが体験の出発点であり、体験はそこを起点として **b** 方向へと流れている、ということである。

このことから指摘できることは、われわれがどのような態度で運動と対峙するかによって、ある体験の瞬間（体験場面）における質的体験 **a** と量的体験 **b** の強さが規定され、体験構造そのものの形が左右される、ということである。さらに言えば、少なくとも課題達成に向けられたわれわれの活動では、そのときには“できる”に向って **a** の強さが増してくることによって、まさにそのようなときに、われわれはコツに気づくようになる（コツの体験）のだと言えよう。

第2章. コツの図式³²

第2章では、安永の図式概念に従って、コツの把握には「コツの図式」が関与していること、コツは前言語的に認識されるが反省するときには言語化されること、そして、コツを取り上げている意識位相の違いによって言い表されるコツの内容にも違いが出てくることが指摘される。

1. 体験図式と知識図式

これまで述べてきたように、コツは体験構造を起点とした最適な動き方として位置づけられるが、この意味のコツというものをより深く理解するには、さらに安永が取り上げている体験図式という概念の理解が必要になる。

図式 (Schema、シェマ、スキーマ) という概念自体は、心理学や医学でよく用いられている。例えば、心理学ではスキーマという概念は、とくに文化や社会や伝統の中で経験した事柄から枠組みとして形成され機能する記憶構造であり一般化された概念あるいは状況の図式的な枠組み (41 : 103 頁以下) として、あるいは、資料的記憶を「使う」仕組みのこと (182 : 8 頁) として用いられている。また医学では、古くから体験の際の主体側のもっている把握の様式を「形式」として図式と呼ぶ伝統があり、身体図式 (各個人が自己の身体に関してもつ空間像。これは、例えば、幻影肢の現象としてとくに強調されるものであり、切断された四肢がまだ存在しているように思うという感覚から、この自己の身体に関して持つ身体の空間像 (図式) の存在が主張される) という用語がその代表である (199 : 211 頁以下)。

安永の用いている図式概念は、基本的に、この医学で用いられている体験の際の主体側のもつ把握の様式を意味している。すなわち、すでに述べた (基準) 体験線上で取り上げられ、体験空間 (ファントム空間) 上に現れ認識に反映される形式 (形あるもの) や構造を規定する把握様式ないし把握形式である (195 : 44 頁)。安永はこの図式の説明にあたって、「体験世界はまず『パターン』によって基礎分極が与えられ、「体験強度」 = 「距離」によって力と空間性 (ひろがり) (広義) が与えられ、「図式」によって具体的骨組みが与えられる」 (187 : 46 頁) と述べている。すなわち、体験世界 (空間) を記述する際には、これまで述べた『パターン』 (A/B 構造) とその強さ ($a \geq b$) という基本的枠組みがあるが、これだけでは体験世界 (空間) はまだ形をなさない。言い換えれば、そのままでは体験上に現れるものやことが意味ある

³² この章の1と2は、拙論「スポーツ技術の運動感性学的考察」の (文献 152) の後半部分 (7, 8) を加筆修正したものである。

ものとして意識に反映され認識されない。図式はそこに機能し、その体験世界（空間）に形（式）ないし構造形式を与え、われわれの体験や認識を“形あるもの”（意味あるもの）にする。

われわれが認識するのは、したがって、その図式として把握、処理された“形あるもの”である。安永の図式概念に従えば、われわれが体験上で取り上げ、把握し認識しているのはすべて図式（ノエマ的側面）ということになる³³。具体的には次のように言うことができる。知覚に入る個々のもの（対象物）の形は言うに及ばず、客観的な空間や時間も、また体験上の距離や流れといった体験空間や体験時間、さらには（客観的）知識や認識や理論も、それらは体験のなかではそれぞれに形（形式）ないし関係構造が規定（付与）された図式であり、われわれの体験上ではその図式が認識されているのである。この図式を形成する動因の一つは、基本的にはB的側面からくる（Bとの対応関係をもつ）が、それはまた個体の身体機能の構造や脳の構造、行動能力、意識水準や感情のレベル、性的個人差、発育発達、さらには自然科学的知性によっても影響を受け、絶えず変更されるという。いずれにしても、この意味の図式は一定不変のものではないと安永は述べている（195：45頁、197：188頁）。

このような安永の図式概念によれば、われわれが体験として知覚したり思い描いたり感じたり、また判断するところのものは、その体験のなかではすべて図式という形をとっていることになる。言い換えれば、われわれが体験するものは、結局すべて図式なのであり、図式は体験のなかにある。この場合、われわれの体験は瞬間瞬間で、その都度、何重もの図式で満たされている（199：213頁）。この安永の用いる図式概念は、認知心理学で言われる記憶構造の一つとして考えられているスキーマ（図式）とは異なるものである（41：101頁以下：182：8頁以下）。

この安永の言う図式は体験線上で体験の論理的順序に従って並んでいるものである。つまり、いくつもの図式が体験線上で、e（自極）からE（狭義自我＝図式として取り上げられる自我）に向かい、さらにF（対象）→f（対象極）への方角に向かって並ぶことになる。この図式の序列は、われわれにとって二つの点で重要な意味をもっている。一つは、eからEまでの範囲の図式はより体験的、主観的な性質の図式であり、Eからfまでの範囲にある図式はより対象的、客観的な性質の図式だということである。体験線上で右方向にいくに従って、図式の客観化の程度が増大するのである。しかしこの場合、客観化の度合いが強くても、それは対象物そのも

³³ 「ノエシス―ノエマ」は、現象学において強調される意識構造を表すことばである。竹田によれば、「ノエシスは、＜意識＞に現れた知覚や、記憶などの所与を素材として、そこに志向的な意味統一を与えてひとつの対象存在（の妥当）を構成する＜意識＞の働きを言う。ノエマは、この構成された対象性のこと（＝志向的相関者）である。」（179：217頁）このような意識構造から強調されているのは、体験し認識されるものは客観的なものが内に反映されていることを意味しているのではなく、意識作用によって構成されたもの（意識相関者）だということである。

のではなく、図式として体験のなかで把握、処理されている、あくまで体験されている図式（ノエマ性）である点に注意しなければならない。もう一つは、図式が並ぶその方向性である。体験において把握される図式は、常に、 e から $E \rightarrow F \rightarrow f$ へと並んでいるのであって、その逆ではないということである。つまり、図式は $f \rightarrow F \rightarrow E \rightarrow e$ へという方向性をもって序列化されることはない。なぜなら、体験はそもそも e を起点としてはじめて成立するものだからである。例えば、われわれに絶対的にあると思われている客観物や、体験から遊離し独立したものとして、主観面を捨象した客観的科学的知識（ F ）があったとしても、われわれの体験はそこから出発しているのではなく、常に e 方向から体験されるほかはない。要するに、その際に F としてとらえられたものも e を起点として体験上で構成された図式なのである（199：29 頁）。

このようにして図式の序列をとらえると、図式は大きく二つに分けられる。すなわち体験に直属し自己に関わる主観的なもの（ $e-E$ の範囲）と、体験から遊離していき対象化される客観的なもの（ $F-f$ の範囲）である（195：45 頁）。安永は、 E と F の間にはさらに言語図式などが入ってくると言うが（199：32 頁）、ここではそれを指摘するに止めておく。安永は前者を体験図式と呼び、後者を知識図式と呼んでいる（196：267 頁以下）。この知識図式はより詳しく見れば、第一種の知識図式（主体の体験活動ないし体験図式に密接に関連しそこに接続されている知識図式）と第二種の知識図式（体験活動とは遊離し、直接には体験意味を持ち得ないものであり、科学的推論によって生じてきた知識図式）に分けられる。

なお、客観的な動き方、自然法則の一理想的な動き方のモデル、外的な運動経過ないし運動形態の特徴など、体験から遊離した知識によって構成されるものを自然科学的図式技術（52—21 頁以下）と呼ぶことができるが、この場合の「図式」は体験図式ではなく、上記の第二種の知識図式である。すなわち、自然科学的図式技術という場合は、 e からかなり遠ざかった対象極 f に近い客観的な F 群（量的側面）に属する図式であると同時に、それはもともと体験を起点としたものではないし、体験とは無関係に取り上げられているものである。したがって、それは客観的知識として、モデルとして提示できても、それは体験から遊離していて、自ら動くということ（キネステーズ意識）の体験意味をもち得ない（196：270 頁）。また、そうした自然科学的図式技術（量的側面）が正しくて、われわれはそれに従って動くべきだという場合には、安永の言う体験の『パターン』 A/B 構造を逆転させてしまうものであり、 B から働きかけようとすることを意味する³⁴。つまり、体験（ A ）から出発さえすれば自明的に了解される

³⁴ 安永によれば、分裂病（統合失調症）ではこのパターンの逆転が起き、自分というものがいない状態になっているという（196：29 頁以下；199 頁：191 頁以下）。

コツの内容や動きの感じなどは、はじめから取り上げられないことになる。

2. コツの図式

この知識図式ではなく、体験に直属している体験図式（ $e-E$ の範囲）を前提にして考えてみると、われわれが運動において取り上げるコツはまずもって自己の動きが基準になっているのであって、それは対象（ F ）知覚とは異なり、自己の内部図式の知覚である（198：206 頁以下）。したがって、それは体験線で言えば、基本的には $e \rightarrow E$ の範囲内（体験図式）で取り上げられるものだということになる。

このようなコツは運動する主体の体験図式のなかで描かれるものである。すなわち、それは“できる”と直接的関係をもつ図式として把握、処理されている。この“できる”の枠組みとみなされる体験図式を、ここでは「コツの図式」と呼んでおく。

この「コツの図式」は、ある運動を“できる”ように取り組んでいるときには、体験のなかですでに機能している。さらに言えば、このような体験上で取り上げる自己の動き方は単なる図式としてあるのではなく、実際にその動きが“できる”か“できない”かに関わる図式として把握、処理されると同時に、“できる”ように取り組んでいるときには、体験の前面に踊り出してくる。しかも、この体験図式としての「コツの図式」には、その動きが目標志向的で状況に適合した行為であるかどうかの判別を可能にする基準（ものさし）があり、そのコツが“良い”のか“悪い”のかなどを比較考量ないし評価判断できる枠組が備わっている。

このことに関して、金子は次のように述べている。「凧揚げのときの紐の引きかたは、物理学的な法則を知らなくても、その心情領野の評価作用によって、凧を天高く揚げることができます。同じことは＜ヨーヨー＞のみごとな手さばきの習得にも見られます。いつヨーヨーを巻き戻すきっかけを作るかという感触はその人の統覚化身体知のなかにのみ開かれています。」（70：37 頁）

このような評価作用の働きをクリスティアンは価値意識と呼んでいる。クリスティアンは「行為の価値意識」という論文の中で、この価値意識の存在を、教会の鐘を打ち鳴らす際のロープの引きかたを分析して指摘している。金子はこのクリスティアンの分析の要点を次のように示している。「やみくもにロープを引っ張っても、連続的な鐘の音は生じません。その人は、ロープの引きかたの強さや方向、間隔を、鐘の音の出現具合を先読みしながら、そのつどロープの引きかたや力の入れかたを決めていきます。この引きかたの決定的な確定性は、『＜こう＞であって＜あれ＞ではない』という自己自身の動きかたのなかに顕在化してきた動感身体知

が決定的な役割を果たすことになります。」(70:38頁) 要するに、運動をする際の「<こう>であって<あれ>ではない」という意識は、価値志向性を有する意識(価値意識)であり、動きを評価する作用なのである。

この価値意識ないし評価作用が、まさしく「コツの図式」で機能するのである。つまり、「コツの図式」という体験図式は価値志向性を有する図式であり、ある動きがコツとして取り上げられるかどうかは、この図式によって決まるのである。このように「コツの図式」は自己の動きが運動の課題の達成にどのように関わっているかに関係し、自己の動きかたの良し悪しの判別を可能にしている図式だと言えよう。例えば、われわれが運動を行う場合(例えば、自転車に乗る、逆上がりをする、ボールをシュートする、走り高跳びでバーをクリアーするなど)、われわれは“できる”を目指して、自己の四肢の動き方の像を実感をもってとらえるとともに、空間距離や間合い、リズム、テンポなどを体験的に把握する³⁵。そこでは、“できる”“できない”に関わっての自己の動きかたが体験から遊離しないでとらえられ、やがてはコツとして運動感覚的意味核が取り上げられるが、それは「コツの図式」として把握され処理される。この「コツの図式」として把握されるコツは、最初のうちはきわめて漠然としたものである。というより、これは体験直下の体験のまさにe付近に現れる運動感覚の意味核なのである。つまり、この「コツの図式」でとらえられているコツはまだ意味核の域を出ていないので、他者に提示できるものではない。それが次第に下流(体験線で言えばE方向、『パターン』A/B構造で言えばB方向)へと移るようになると(いわゆる「反省」、その「コツの図式」は客観化、知識化の程度を増し、明確化されるようになる。すなわち、反省というプロセスのなかで、コツはようやく“形ある(意味ある)”内容としてまとまりをもち、コツとして自覚されるようになって、ある程度提示(言語表現)できるようになる。

このような「コツの図式」でとらえられ、間動感性をもって提示されるコツこそが、まさに金子の言う図式技術³⁶であると考えられる。この金子のいう図式技術という場合の図式は、安永の図式理論で言えば体験図式としての「コツの図式」の意で理解することが重要であると思われる。言うまでもなくこの「コツの図式」は誰もがもっている図式であり、コツは個々人がまずもって体験直下でこの「コツの図式」でとらえるものである。なお本論は、コツの言語表現の構造について考察するものであり、コツと技術のこれ以上の問題には立ち入らない。

³⁵ 安永はこのようなものを“姿勢覚”によるものととらえている(198:206頁以下)。

³⁶ 図式技術(Schema-Technik)(56:S.103, 69:224頁)という用語は、金子が現象学的立場から、間動感性をもつ公共的技術を指して用いたものであり、これは動感身体知のひとつとみなされる。

以下では、このようにして体験されるコツの言語との関係に考察を進めていく。

3. コツの前言語的認識

われわれは運動体験をすべて適切かつ明確なことばで言い表すことはできない。あるいは、すべての運動体験に対応することばを持ち合わせているわけではない。さらに、運動体験の表現は、各言語によってその語彙構造が異なるので、同じではない。こうした問題について、言語学者の国広は、言語の影響を受けないで概念を考えるとその言語表現との関係について、空間関係を例にして考察している（84：224 頁以下）。以下では、コツが前言語的な認識であることについて、この国広の考え方を手がかりにして考察を進めていきたい。

国広は、空間関係の考察において、言語の影響を受けないで空間の諸関係を認識するレベルと、そうした認識が言語の世界に入り込む様相、すなわち、空間の諸関係の認識が言語表現の差となってあらわれてくることについて次のように述べている。例えば、近接関係（図2参照）は「ちかいーとおい」³⁷あるいは「(空間的) まえーうしろ」として、順序関係（図2参照）は「(時間的) まえーあと」あるいは「まえーつぎ」として、内外の関係（図3参照）は「なかーそと」として、たて関係（図4参照）は「うえーした」として、空間移動関係（図5参照）は「なかからそとへ（図の左）ーそとからなかへ（図の右）」として、われわれはそれを言語で表す以前に認識できるという。すなわち、近接関係や順序関係、たて関係や空間移動関係といったような空間の諸関係を、われわれは言語化以前の段階で認識、了解しているのである。



図2 近接関係および順序関係

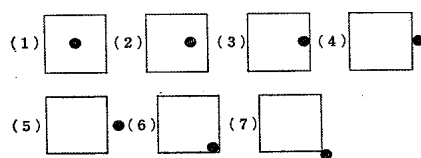


図3 内外関係

³⁷ 「 」内のひらがなは、言語の影響を受けないで認識、了解する概念を示す。後で出てくる『 』の漢字交じりの表現は、この「 」の概念を言語化していることを表す。

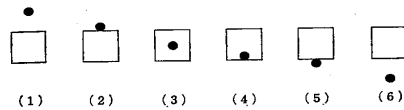


図4 たて関係

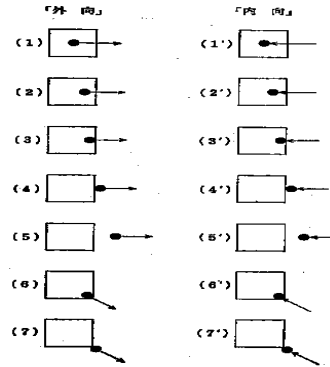


図5 空間移動関係

言語の影響を受けないで把握されるこれらの空間関係の諸概念³⁸は通常、言語化されていく。すなわち、『近いー遠い』『前ー後』『中ー外』『上ー下』『中から外へー外から中へ』というように言語化されたり、文字化される。しかしこの場合、言語化され文字化されたものがすべて、それ以前の言語の影響を受けずに把握された概念に完全に対応しているわけではない。

これらの空間諸関係の概念は、それを言語に置き換えるときには、言語表現する場面や情況、そのときの文脈、また社会文化的、言語圏的、語彙的、単語の使用法などの影響を受けることになる。例えば「ちかい」という言語化以前の概念が、言語表現を支えるこれらの要因によって、『接触』、『近接』、『隣接』、『離れていない』という多様な表現をもたらすのである。この場合、「ちかい」という概念は「とおい」という概念と関係をもっている。すなわち、「ちかい」「とおい」という概念は、基本的には、ある二つのものの空間的距離関係をとらえたものであり、基本的には「はなれていない」「はなれている」という状態の概念である。しかし、この概念の言語表現はどんな事象関係を表すのにも固定されているのではない。それは当該の言語圏におけるその概念を言語化するときのことばの使用法と関係している。例えば、同じ「はなれていない」「はなれている」という状態の概念でも、映像を映し出すプロジェクターとスクリーンとの空間的距離関係を表すときには、『離れていない』『離れている』『近い』『遠い』と

³⁸ 国広によれば、概念とは次のように解される。「清水に足をひたした経験、氷に触れた経験、金物に触れた経験などのなかから共通の感性的印象が総括されるならば、そこに＜冷たい＞あるいは＜冷たさ＞という概念が構成される。」(84 : 221 頁)

いうように言語化できる（普通、そう言っておかしくない）。これに対して、習字などにおける字配りにおいては、「こことここが『離れていない』『離れている』（その概念をそのまま表現！）」と言われる。しかし、「こことここが『近い』とは言えても、『遠い』とは言わないし、この場合には日本語ではそういう表現は使えない」（84：225 頁）という。

このことは、われわれ人間の言語表現は言語圏や社会文化的習慣などの違いを前提にして、独自の単語や語彙、語の使用法や表現法などと関係をもっているということを意味している。

こうしたことを背景に、学習者や選手が語る言語表現からコツの内容に迫るときには、国広が指摘した概念認識と言語との関係を押さえておくことはきわめて重要になる。国広に従って考えてみると、われわれが望ましい運動をしようとするときに取り上げるコツは、まずもって言語の影響を受けずに認識される³⁹。しかしここで認識されるコツは、反省するときには少なくとも言語化されることになる。こうしてコツは、運動実施の要領ないしポイントとして言語との関係をもつようになっていく。例えば、鉄棒の懸垂振動の技術として重視されている「あふる」ということばを用いたり、鉄棒の離れ技である「トカチェフとび越し（開脚背面とび越し）」の「切り返して、上体をかぶせるようにする」などのようにコツをことばで説明するときには、どの言語圏に属するか、どんな社会文化的習慣をもっているか、そして語の使用法や表現法などの影響をすでに受けることになる。

4. コツを取り上げる意識の位相⁴⁰

メーン・ド・ビラン⁴¹は、意識を4つの段階ないし位相に分けている。それは、*affection*, *sensation*, *perception*, *aperception* である。ここでは、メーン・ド・ビランが分けた4つの意識の位相の特徴（121：207 頁以下）を手掛かりに、コツがそれらの意識とどのような関係にあるのか、また言語とどのような関係にあるのかについて考察していこうと思う。

例えば、われわれは「わけも知らずもの悲しく、何故ともなく陽気になり、何となくいらいらしたり、うきうきしたりする」、また寒さや暑さなどの外的原因、消化の具合や血液の循環状態などの体的原因によって快不快を感じたり、さらには蛇や蜘蛛を見て気味悪がるが、こ

³⁹ 例えば、「てくびをかえす」「すなっぶをきかせる」「むねをふくむ」などの有効性が、言語との関係をもつ以前に認識される。

⁴⁰ この項は、拙論「モルフォロギー的見地からみた運動の仕方の直観的内容について」（文献144）の（4）をまとめ直したものである。

⁴¹ メーン・ド・ビラン（1766—1824）はスピリチュアリズム（唯心論）の先駆者で、「フランスのカント」とも呼ばれる哲学者。彼にとって哲学は自己を救うためのものであったという（121：29 頁以下）。このメーン・ド・ビランの哲学を日本に最初に紹介したのは、フランス哲学の研究者である澤潟久敬である。

うしたときの感情や気分が **affection** である。すなわち、**affection** とは、このような「内的外的原因によって **affecter**, **affizieren** (触発) された時の意識状態」であり、快とか不快といった気分 (**Stimmung**) や感情のことである。この気分や感情といった意識状態は特殊な感覚器官によっては起こらないものであり、このときには体全体が一つの意識状態になり自他の区別がなく、また自分という自我さえないという意識状態 (全体的感覚、絶対的感覚) である。さらに、このような気分や感情はわれわれの自由にならないという意味では、運命的感情であり生命感 (**sens de vie**) である (121 : 208 頁以下) ⁴²。

sensation とは感覚のことであり、視覚や聴覚などの固有の感覚器官の働きによって、外界の事象を色や形や音、また匂いや味として受け取ることによって生じる意識状態である。例えば、「秋の空が青く晴れておればそれを青いと感覚し、柿の実が赤ければ赤いと感得る」 (122 : 82 頁) というような感覚である。しかし、この感覚は積極的に自ら対象に働きかけているわけではないもっぱら受動的なものであり、感受性が優っている意識状態である。

これに対して、自我が能動的になったものが **perception** である。すなわち、知覚である。これは意識の能動的働きであり、対象を積極的に知ろうとする意識段階である。ここでは諸事象をある関心から注意深くとらえようとすることによって比較、分類、整理などが行われる。すなわち、この知覚されたものは概念化されて科学的知識として体系化される。澤潟によれば、「科学的知識は意識の知覚的段階において形成される」 (122 : 83 頁) ものである。

この知覚としての **perception** の対象は **Gegenstand**, **objekt** として外界に存在し、その矛先は主体の内面には向けられていない。これに対し、**aperception** はこの矛先を自分自身に向け、自分自身、すなわち主体 (**subjekt**) 自身をみつめる意識、つまり自覚的反省意識のことである。澤潟によると、**aperception** は成熟した意識状態であり、これによって、感覚そのものを捨てて自己の中に潜入する反省的抽象が可能になるという (121 : 214 頁)。

このようなメーン・ド・ビランの意識の位相をコツの発生と関連させてみると、次のようになる。

コツの発生は独特の意識状態を発生させる。例えば、学習者はある運動ができることを意図して自らの志向的運動の中で、自分の動きがいい動きをしているときには「これだ!」といってコツをつかんだ感じになり、反対に、あまりいい動きをしていないときには「違う!」といって駄目な感じをもつ。このときの感じや感情や気分、あるいはまたそのときに感じる雰囲気

⁴² メーン・ド・ビランの言う **affection** という意識段階は、金子が運動形成位相の最初に位置づけた原志向位相のなじみの地平における気分や感情に相当すると考えられる (67 : 418 頁以下)。

が **affection** である。つまり、学習者自身はそうした意識状態になることで、自らの動きにコツが発生したことを受け止めているのである（実際にモノ・コツあるいは運動感覚的意味核と出会うのは、この意識位相においてである）。このときには、動きかたの内容は明確に、また具体的には言い表せない。しかしもちろん、学習者はまた、単にそうした意識状態になっているだけではなく、固有の感覚器官（とくに運動感覚、視覚、聴覚など）を通して、そのときの自己の運動の成り立ち具合をも感じ取っていることもある（**sensation**）。すなわち、手の着く位置はどうであったか、脚の振り上げはちゃんとできていたのか、上体の前傾姿勢は甘くなかったかを、自己の動きの良否と関連させてコツの具体的な内容として取り上げているのである。しかし、ここでの内容は受動的である。すなわち、「こうしたら・・・こうなった」という受け身的な内容である（その内容に対してはまだ「コツ」としての確信をもてない）。

これに対し、学習者が運動するときには意識の能動的積極的な注意作用が働いている。すなわち手の着く位置をもっと手前に着く、脚を強く高く振り上げる、上体を前傾させるなど、「～してみる」という運動の具体的な実施内容の投企が働くが、これは **aperception** の意識状態であると考えることができる。学習者が自覚的反省意識としてのこの **aperception** の意識状態で運動を行い、コツの存在を確かめることができはじめて学習者は真の意味でコツを取り上げることになる（このときにはその内容をコツとして確信している）。これに対し、知覚である **perception** が意味をもつのは運動ができるようにと、学習者が自分や他者の運動内容を観察し、そこから自分が行うべき内容（**aperception**）を組み立てようとする場合である。従って、この場合、知覚内容というものは **aperception** を構成する要素になっているということが言える。

コツはこのように意識のどの位相にも関わっていて、われわれはコツとの多様な出会いを体験するが、しかし、その内容は意識の位相によって異なる。すなわち、コツの核心に触れるのは **affection** の意識位相（「これだ！」という感じそのもの）であり、具体的なやり方を感じるのは **sensation** の意識位相（「今のやり方は・・・！」という受動的な感じ）、また、どうやればいいのかという、現在のやり方より良いやり方を外部に探そうとするのは **perception** の意識位相（「もう少しあんな感じで足を高く振り上げるべきでは？」という探索的な感じ）、さらに、コツの存在によって自分には“できる”と感ずるのは **aperception** の意識位相（「できそうだ」という感じ）、というようにである。

このように、意識の位相によってとらえられるコツの内容は異なっていて、コツに関する学習者自身の発言とそのことばで言い表される内容は、学習者や選手がコツをどの意識位相で取り上げているのかということと密接な関係があると思われる。

第3章 第Ⅱ部のまとめ

第Ⅱ部では、コツの体験構造が明らかにされるとともに、コツと意識との関係が明らかにされた。

すなわち、精神医学者の安永の体験理論に基づけば、われわれが実際に運動を行う中でコツを取り上げる体験は常に＜私＞の側からの把握という構造（『パターン構造』）をもち、コツの体験はことばにならない前言語的体験を起点とするが、反省によってそれは言語化されることが明らかにされた。また、コツが言語化される場合には、どの言語圏に属しているのか、どんな社会文化的習慣をもっているか、語の使用法や表現法などの影響を受けることが指摘された。さらに、メーン・ド・ビランの意識位相の区分（affection；感情や気分，sensation；感覚，perception；知覚，aperception；自意識）に基づいて、コツが言語化されるときの内容は意識位相の違いによって異なることが示された。

第Ⅲ部 コツの言語表現の構造

第Ⅲ部では、発話の構造を明らかにした上で、コツの言語表現構造が考察される。

第1章 発話の基本構造

第1章では、発話における内言の介在構造、発話における辞の機能と品詞の役割、コツ発話の表現上の特徴が述べられ、発話の基本構造が明らかにされる。

1. 発話⁴³における内言の存在と意味の役割

学習者はコツを少なからずことばの地平で取り上げようとする。どうしたらもっと高く跳び上がるか、どうしたらもっと正確にボールを蹴れるか、さらには宙返りができるようになるにはどうしたらいいかということを、学習者自身は、感覚だけで模索することはあっても、多くは頭の中で「もっと素早く踏み切ろう！」などことば（内言）でやり方を模索する。また例えば、跳び箱において「踏切はしっかりと蹴る！」といった踏切時の表現、ボールを投げる際の「手首のスナップを効かせる」「はじく」という表現、「あふり」、「はずし」、「開き」、「寄せ」、「落とす」など運動の当事者から発せられる単語などはコツを直接体験した中からでてきたものであり、コツと関係をもたない表現やことばなどではない。これらは動きを生み出すための、また、動きを覚えるためのことば、すなわち創発言語なのである。

学習者の語ることばがこの創発言語であるということで意味していることは、学習者が自らの直接的なコツ体験からその動きの意味をその言語表現に託し、言いたいこと、強調したいことをことばにしている、ということである。

ただし、そこで語られたことば（これには単なる単語のレベル、句のレベル、文章のレベルがある）によって、学習者が取り上げようとするコツの内容のすべてが感じたままに言い表されているわけではもちろんない。すなわち、コツの核心的内容はことばあるいは言語表現そのものに直接現れているとは必ずしも言えないのである。

このような学習者が語る創発言語としてのコツに関する言語表現は外言（外的言語）であるが、この学習者のことばは、一体、どのようにして発せられるのだろうか？また、われわれがまだできない運動をできるように練習している場合、われわれの意識にはどんな動感内容が現

⁴³ 「文を、その文が発せられた状況に結びつけて考えるとき、その文は発話（utterance）と呼ばれ」（133：115頁）
る。

れてくるのだろうか？またそれはどのような性質のものなのだろうか？

例えば、鉄棒で懸垂振動からのかかえ込み宙返り下りを練習しているときの初心者の動感意識の内容を考えてみよう。

- ・鉄棒を握るとき、あまり力を入れすぎない（かった）。
- ・あふるとき腰をとる⁴⁴（った）。
- ・腰あふり⁴⁵をしっかりと行い、足を鉄棒に近づけるようにして回る（った）。
- ・スイングを大きくする（した）。 等々。

学習者自身は、これらのことを頭に入れながら、また感じながら、あるいは意識しながらこの技を練習するであろうし、またその都度の試行後には、上記のような内容（括弧内）を漠然とでも感じるであろう。このように意識して行う練習、また実施後の感じをその都度受け止めるようにする練習は、“できる”ようにと取り組む学習者にとってきわめて重要な練習（内観的反復練習；67：377 頁）である。

ここで問題となるのは、こうした意識に現れる、また意識上で問題になっている“動感”が言語とは無関係な前言語的な感じなのか、それとも言語レベルのものなのか等々、われわれは個人技法の動感というものをどのような次元で取り上げているのかということである。

このコツの言語化に関しては、すでに述べた安永の基準体験線（第Ⅱ部第1章の2）でも説明することができる。すなわち、e（自極）付近では対象化されない、ことばにならない体験をしていることになるが（例えば、「痛い！」という体験）、そのe（自極）からE（自我）へ、さらにF（対象）、f（対象極）へと右方向へと体験が流れていくに従って、体験したコツを示すことができるように言語化、概念化が進む、というように説明することができる。

この安永の言う自極（e）から自我（E）へ、すなわち自極（e）から対象化、客観化、言語化という右方向への体験の流れは、ヴィゴツキー⁴⁶（188）に従えば、思想、内言、外言という三者の関係で説明することができる。ヴィゴツキーの考え方の特徴は内的言語の存在とその外的言語との関係の指摘にある。「内的言語は思考と外的言語との媒介物」（125：118 頁）であ

⁴⁴ 鉄棒の懸垂振動で後方に振れたときに、身体をくの字に曲げること。

⁴⁵ 鉄棒の懸垂振動で身体をムチを打つようにしならせること。

⁴⁶ ヴィゴツキーはロシアを代表する心理学者。ヴィゴツキーは主著の『思考と言語』で内言論を展開し、こどもの自己中心のことばはこどもの自己中心的心性の現れであり、その後、この自己中心のことばは「社会化」されたことばに置き換えられていくとしたピアジェの見方に異論を唱え、こどものこの自己中心のことばは、外言である話ことばが内言に移行し、発展していく過渡的段階のことばであるという見方を提示した（165：70 頁）。ヴィゴツキーの言語論に関する理論は、コツの言語化問題を考えていく上で大いに参考になる。

り、「言語と思考の関連は『意味』を中心とするきわめて内的な関連」（125：116 頁）にあるとして、ヴィゴツキーはその両者をつなぐ内的言語の役割を重視している。端的に言えば、大出の言うように「思考は・・・まず内的言語において形をとり、ついで語の意味に、最後に語へと発展してゆく複雑でダイナミックなもの」（125：118 頁）なのである。以下では、このヴィゴツキーの考え方の視点に立って、コツが言語化されるプロセスに考察を進めていきたい。

ヴィゴツキーに従えば、コツの発生からその言語化（外言）までのプロセスは次のように示すことができる。

① 実際に動く→【コツの発生】

② この場合、コツは、まずは「内的言語（内言）」でとらえられる→【内的言語によるコツの把握】。

③ 「内的言語」でとらえたコツは語の意味へ、そして「外的言語」へと発展してゆく→【いわゆる言語表現】⁴⁷

それゆえ、コツの言語化の問題を考えていく際には、内言というものの存在とこの内言の外言（いわゆる言語表現）との関係が重要になってくる⁴⁸。

大出によれば、内言はけっして外言マイナス音ではなく、外言とまったく異なる機能をもつ、まとまりのない不完全な言語であるという。そして、大出は内言の意味論的特徴を次のように指摘している（125：117 頁）。

- ・語によって呼び起こされる不安定な感じが語の意味に優先している（意味とはこの不安定な総体が文脈によって決定されるときに生ずる）
- ・文は語に優先する。
- ・文脈が文に優先する。

この指摘から言えることは、内言は外言（いわゆる言語表現）では多くの語を必要とするようなものがひとつにまとめられているということである。これに従えば、運動のコツは言語化（外言的表現）前に、ひとつのまとまりをもった全体感ともいべき性格をもつ内言としてとらえられている、ということができる。

47 内的言語および外的言語を内言および外言ということもある。これ以降は、簡略化した内言、外言という言い方で統一する。

48 コツを学習者や選手本人がどのように取り上げているのかを分析するには、言語の問題に立ち入って言語表現を取り上げて分析することが必要になるが、その際この内言というものの存在と外言との関係を明らかにしておくことが重要である。金子もマイネル『スポーツ運動学』（1981）の中で、内言に関する訳注を設けて、そこで次のように述べている。「内言とは具体的に発言を伴わず、個体の内側で進行する言語過程であり、音声を伴うコミュニケーションの用具としての外言に対置される。・・・運動習熟過程における *praktisches Denken* の過程は大部分が内言による思考過程であり、それなしに運動経験を蓄積し、利用して運動の改善をすすめていくことはむずかしい。」（98：441 頁）

この内言に関して、ヴィゴツキー自身は書きコトバと関係させて次のように述べている。

「内言は、最大限に省略され、短縮された速記コトバである。書きコトバは、最大限に展開された、形式的には話コトバ以上に完全なコトバである。書きコトバには省略がない。内言にはそれが満ちている。内言は、構文法的構造の上では、ほとんどもっぱら述語的である。話コトバでは、主語や文のそれに関係する部分が話相手にもわかっているときには、その構文法は述語的になるが、これと同じように、主語や話の状況がつねに話者自身にはわかっている内言では、ほとんど述語だけからなっている。」(188 : 78 頁)。

このような特徴をもつ内言は言語化（外言的表現、言語表現）される際には、意味がそれを担うことになる。大出は次のように説明している。「思考は内的言語よりもさらに内的な局面をもつ。思考の流れは言語表現の同時的な展開を伴っていない。この二つのプロセスは同一でもないし、それぞれの単位のあいだに厳密な対応があるわけでもない。思考は言語と異なり、離散的な単位から構成されていない。話者の思考においてはその内容が一举に現在し、言語においては継時的に展開される。その移行を支えるのが意味である。」(188 : 117 頁以下)。

ここで指摘できることは、言語表現（外言）に至る一連の言語化過程（発話）には内言が介在しているということであり、この点はコツの言語表現を考えていく場合にも重要である。それは、直観して感じたこと、考えていること（思考、コツ）が直ちに外言的な表現（発話）になるのではなく、外言的表現以前に一段階の言語化のステップがある、という点である。

コツはすでに述べたように、妥当性、可能性、配視性といった特性もっている（第Ⅰ部第1章4の（3）を参照のこと）。このことはそのコツが内言を経由して発話（外言）される場合にも、そうした妥当性、可能性、配視性を背景にもって語られることを意味している。例えば、ある運動をする際のコツとして表現される「押し出す」「肩をかぶせる」「突き放す」「ける」「体を開く」「スナップを利かせる」「体の軸をまっすぐにする」は、そうすることがいいとしか考えられない（妥当性）、そうやるとできそうな感じがする（可能性）、実際そうやってでき、その感じも了解できた（配視性）といった意識をもって語られているのである。

2. 発話内容を構造化する品詞

スポーツにおける運動の技術書では、運動の実施ポイントが記述されている。例えば金子の体操競技の技術書では、技を行う際の注意すべき点が動感言語を使用して運動の経過図とともに併記されている。図6に示されたけ上がりでは（46 : 70 頁）、重要な運動の局面を矢印で示して、「背を丸く」、「バーを下へ 押さえる」、「勢いよくバーの方へ引き込んで肩の上昇回転を

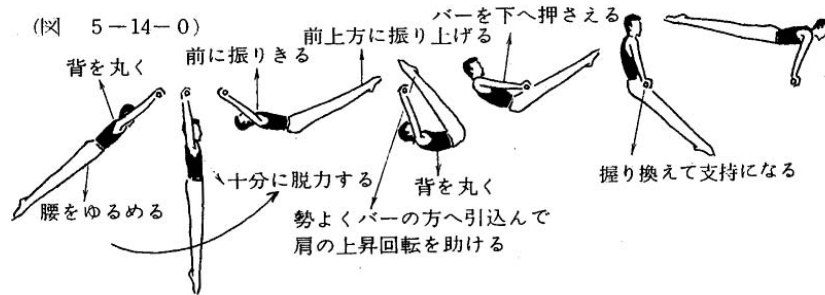


図6 け上がりの技術

助ける」といった記述がなされている。他の技についても同様で、逆手背面車輪（46：245 頁）では「体を一線にする」、「十分に脱力する」、「足を前上方に振り出す」、「腰を高く 保つ」といった動感記述が、また後方かかえ込み 2 回宙返り下り（46：241 頁）では、「十分にあふる」、「一気に前上方に体をほおり上げる」、「かかえ込みをほどいて着地に備える」などの動感記述がふんだんに用いられている。これらの動感記述によって表されている動感内容は、学習者がコツとして発話する内容でもある。

このような動感記述や発話内容は、基本的に、「名詞」（＝例えば、胸、踏み切り）、「動詞」（＝例えば、含む、切り返す、開く）、「形容詞」（＝例えば、小さい、早い）、「副詞」（＝例えば、ゆっくりと、しっかり）などの言語要素（品詞）の単語（品詞）で構造化される（90：33 頁以下、133：70 頁）。すなわち、体験したコツはこれらの品詞の組み合わせによって、その意味するところが言い表されるということになる。これら品詞の機能は、以下のように説明することができる。

名詞：「腕を回す」「鉄棒を押す」「肩が平行棒上にくるようにする」／「踏み切り（行為）は低く入る」「引き手（行為）は短く！」「真下では脱力とあふりが重要だ！」等のようにして表現される。

名詞は「事柄」を表すものであるが、それは大きく 2 つに分けられる。すなわち、客観的に存在する「もの」として把握できる要素としての名詞（例えば、肘、つま先、ボール）、もう一つは、「もの」として存在しないが「事柄」として考え得る行為や状態や性質などとして把握される名詞（例えば、開き、正面、体線）である。

動詞：「腕を回す」「鉄棒を押す」「肩が平行棒上にくるようにする」「体を締める」「上体を起

こす」「背中を丸める」等のように用いられる。

動詞は名詞として表される「事柄」に時間的枠組みを施し、行動の状態を表す。この場合、動詞は「自極 e」から出てきた行為の実感を背景にしたものであり、そこで表現される動詞の意味は、実際にその運動を直接体験（直観）している場合にしか実感をもって理解することはできない。

このような動詞には、客観的にも取り上げることができる動き（運動形態）の動詞とそのときの主観的解釈を表明している場合の動詞とがある。前者は「歩く」や「走る」「蹴る」「ぶら下がる」「あふる」などであり、これらは少なくとも具体的な運動形態として取り上げることができるものであると同時に、ある程度明確にイメージすることができる動詞である。他方、これに対して「逃げる」「逃がす」「休む」「一呼吸おく」「押す」「引く」「リズムをきざむ」などの動詞は、そのことばを使う人の主観的な解釈（168：147 頁）に基づいて使われる動詞である。この場合は、ことばを使用する人が適切な視点を恣意的に設定し、その表現がその現象に結実しているような場合が多い（168：147 頁）。

形容詞：形容詞は「ここでは小さなスイングをする」「強いあふりをする」等のように用いられる。

形容詞は、一般には、事物やもの、対象の性質や状態を表す。例えば、赤い、丸いなどである。しかし、形容詞にはこうした事物やものそれ自身の性質や状態だけではなく、事物と事物の関係や比較が問題になる形容詞がある。鈴木によれば、例えば、それは「珍しい」という形容詞である（168：145 頁）。この珍しいという形容詞は事物の性質を表しているのではなく、同じ性質をもった同類が存在しないこと、少ないことをいう。これと同じようなものが、遠い、近い、大きい、小さい、広い、狭いなどの形容詞である（168：147 頁）。「大きなスイング」「弱い踏み切り」などのようにして使用されるが、これらの表現は、それぞれスイングや踏み切り自体の性質を言っているのではなく、表現する人が他と比較したり、暗黙のうちに潜在的な規準⁴⁹を持ち出してそれと比較して出てきた表現である。

副詞：副詞は「引き手をすばやく行う」「いったん止めてから行う」「胸を含んだらすぐに落とす」等のように用いられる。

⁴⁹ ライズビは、形容詞の潜在的な規準として、以下の4つを挙げている（130：229 頁以下、169：67 頁以下）；1. 「種の規準」（このスイカは大きい！）、2. 「比率的規準」（ひょろ長い！）、3. 「個人的な期待規準」（だいぶ大きくなった！）、4. 「適格規準」（この部屋は狭い！）。

副詞は動作や事柄の状態の様態を描写したり、事態の時と場所を指定するような品詞で、「ゆっくり歩く」「すばやく切り返す」「とてもきれい」「すぐに蹴る」などとして動詞や形容詞を修飾する。

しかし、これらの品詞が構造化されて用いられることによって、体験された内容がコツとして発話されると言っても、学習者によって語られることばや言語表現はその学習者が直観したコツに厳密にぴったり一致しているとは限らない。そのことばやその表現で、あるいは、名詞や動詞、形容詞などの構造化された発話文でコツの本質を語っているかもしれないし、語っていないかもしれないのである。言い換えれば、直観されて意識の深層に発生した運動感覚的意味核としてのコツを学習者本人が説明しようとして言語表現時に使用されたことば（名詞、動詞、形容詞、副詞などの単語、句、文）がそのコツに対応しているという保証はどこにもないのである。

しかし、学習者がこれらのことばに託して言い表そうとする内容は、少なくとも、学習者が実際に運動を行って、その結果として“できる”を直観し、そこでコツだと思われた内容であり、そこで使用されることばや表現が、少なくとも、体験において出会ったコツの内容に的中するようにして用いられるていうことは言うまでもない。

3. 発話における辞の機能

すでに指摘したように、言語表現には内言が介在しているが、国語学者の時枝によれば、この言語表現では客体化・概念化（言語化）できるもの（名詞、動詞、形容詞など）と客体化・概念化（言語化）できないものが組み合わされているという。すなわち、われわれが言語表現する場合の表現や発話は、時枝文法では、客体化された「詞」と、客体化できない語る人の気持ちや感じなどを表す「辞」との組み合わせからなっているのである（184：258 頁以下）⁵⁰。

国語学の領域（国文法）において時枝が提唱した言語過程説（184, 185, 186）は、三浦によれば現象学の影響を受けたものである（102：111 頁）⁵¹。今となつてはこの言語理論は古典で

⁵⁰ 時枝言語学の核心は日本語に固有な「詞」と「辞」に関する説にある。この詞と辞は、前田によれば、詞は事物や世界の諸事象が「概念化作用」を受けてできたことばなのであり、それは陳述行為の中で生まれてくる。一方、辞はその陳述行為そのものだという。「机だ」という陳述が生まれることによって、そこには「机」という詞、「だ」という辞が生まれるのである（185：298 頁以下）。

⁵¹ 時枝の言語過程説は、『国語学原論』の中でまとまった形で提唱されている。この本は昭和 16 年（1941）に刊行されているが（岩波書店）、2007 年には文庫本（岩波文庫）として第 1 刷が発行された。この文庫本では、上下、続編の 3 冊が刊行され、その中の下版では、前田英樹が「時枝誠記の言語学」と題して解説を加えている（185：275 頁以下）。前田はそこで、時枝が「言語」を客体化する自然科学的な考え方で言語学を構築することに反対し、「主体」

あり、そこには確かに多くの問題点も指摘されている。例えば、時枝が批判したソシュールの理論について時枝自身ソシュールの理論を正しく理解していない、「概念」の理解が曖昧である、詞と辞の区別にどんな利点があるのか、そもそも言語過程説なるものはこじつけの理論ではないのかなどと言われている（88：58 頁以下）。しかし彼が唱えた言語過程説という「ことば」や「言語」の考え方には、発生運動学における「運動」の考え方に共通する点が少なからずある。

時枝の言語に対する考え方は、鈴木 of 解説に基づけば（167）、次のようにまとめることができる。

＊言語の本質を人間の行為として考える。つまり、言語の本質を、思想・感情などを音声や文字を媒材として具象的に表現するときの、あるいはその表現を理解するときの言語主体の心のはたらき—心的過程—そのものに見ようとしている。

＊言語の研究は、言語を言語主体の行為として内省することによってはじめて可能になる。

このように時枝の言語過程説の大きな特徴は言語をあくまで人間の表現行為、理解行為と考えている点にある。この場合、対極にあるのが言語を音声と意味の結合したものとして、すなわち人間の意識と切り離された「もの」として、言語を自然科学的な対象として研究する立場である。自然科学（時枝によれば、構成主義的態度）と言語学との関係に対する時枝のこうした批判的立場を、前田は次のようにまとめている。

「時枝は、言語学における近代そのものを批判する。そこには、言語の具体的経験から出発する態度がまるごと欠けているからである。具体的経験は、なぜ大切なのだろう。言語は、その経験のそとには実在していないから。言語はそれを経験する者の心のなかにしかないから。・・・言語学とは、まず言語的な実在が何かを決定する学問であり、続いて個々の言語経験に即した実在の性質を決定する学問でなくてはならない。」（185：288 頁）。

また、時枝は『国語学史』の中で、次のように、当時の言語研究の状況について述べている。

「自然科学においては、対象は常に研究者の前に終始固定されていて、牛を研究しつつあった者が知らず識らずの間に馬を研究して居ったというようなことはあり得ぬことであるが、文化科学においては、必ずしもこのようなことが無いとは断言出来ない。何となれば、研究者の前に置かれた対象が、常に漠然とした輪郭のみしか示さないことが多いからである。例へば、言語における音声を研究していると自認している研究者が、実は純粹に物理的な音響の研究に専念して居ったというようなことは決して珍しくないのである。」（183：7 頁以下）

という立場から国語学の構築に対して壮絶な取り組みをしたことを述べている。

このような自然科学的アプローチに反対する時枝の言語認識は、発生運動学における言語認識と共通する点がある。それゆえ、以下では、「詞」と「辞」の問題をコツの言語表現と関係させて考察を進めていきたい。

【詞】は、思想や事柄、言いたいこと、感じていること自体の客体化ないし対象化したものの表現である。すなわち、知覚している<もの>、考えている<こと>、感じている<こと>であり、机、椅子、宙返り、握り替え、回転、逆さ、速い、遅い…などである。要するに、対象化される「意識（知覚、想像、推量、感じていること等の）内容」を言語主体が表したものが「詞」であるといってもいいであろう（167：21 頁以下）。

この考え方からすると、例えば、助走する、突き放す、踏み切りなど運動要素は、学習者や選手が主体的に取り上げる<対象>であり、運動主体と無関係に存在する客観的な対象ではない。このような言語表現を構成している主体によって客体化（対象化）される要素（詞）とは、現象学的に言えば、「ノエマ」である。こうした立場から、コツは課題を達成しようとして主体によって客体化（対象化）される要素（詞）であると考えることができる。

また、【辞】は、「思想」の主体的立場の表現、主体が表そうとする直接的表現である。すなわち、「～したい！」「えっ！」「～だ！」「～ね！」や、「・・・が一んと！」「ぐいっと！」等々の擬態ないし擬声表現である（167：21 頁）。この表現によって、判断、断定、推量、希望、感動、欲求等々が表される。つまり、思想や事柄等を言い表す際、その表現で主体にとっての意味や価値を表す表現部分が「辞」なのである。

要するに、両者の違いは、客体化という「心の働き」があるかないかである（167：22 頁）⁵²。これに従えば、詞と辞の区別は次のようになされる。例えば、「明日は、五時に起きる。」という文は、「明日（詞）は（辞）、五時（詞）に（辞）起き（詞）る（辞）」というように分けられる（167：22 頁）。この場合、辞の部分である「～は」「～に」「～る」は、発話者の立場からの意味や価値を言い表している、ということになる。

ただ、辞が表現されないこともある。例えば、(1)「彼は偉人だ」 (2)「彼はえらい」の例で考えて見てみよう。鈴木によれば、この二つの文は次のように説明される。(1)の場合、「彼」

⁵² 時枝の言う「詞」と「辞」について、鈴木は次のように説明している。「単語のなかには性質のまったくちがった二つの別があることが発見できる。その一つは、表現しようとする思想内容を客体化して表現する場合であり、その二は、思想内容を客体化せず直接的に表現する場合である。この二つの表現は、表現過程において客体化という心の働きがあるかないかの相違である。例えば、『驚き』という語と、驚いたときに発する『あっ』『おや』『まあ』などという語とを比較してみると、この両者は、共に驚きの感情を表現する語であるという点では同じであるが、『驚き』という語は、驚きの感情を、一旦、対象化し、話し手の前に置いて、これを差し表している表現であるが、後者の『あっ』『おや』『まあ』は、驚きの感情をそのまま直接に表現したものである。この両者のちがいは、思想・感情に対する客体化の作用が介在しているかないかの差にあるわけである」（167：22 頁）。

と「偉人」は詞で、「は」と「だ」は辞であり、「彼は」と「偉人だ」はそれぞれ一つの句をなす。一方、(2)の場合の「えらい」は、(1)の「偉人だ」の「だ」に相当する辞が表現されていない。このように、辞が表現されていない句は、「彼はえらい■。」というようにして示す。すなわち、この文では辞はないが、この■の記号は発言者の気持ち、感情等を表すという。この場合の■の記号は、「零記号の辞」と呼ばれる(167:26頁以下)。言語表現を分析する場合、この■で意味される内容にも注意しなければならない。

こうした考え方に基づく、スポーツにおいて学習者本人がコツをことばで言う場合も、また内言となっている場合も、そこには詞的要素(客体化・対象化された(る)「動き」)と辞的要素(主體的立場でとらえる感じや考え方)が結合していることが指摘される。自ら取り上げる「内的像」としての動きをコツとして取り上げようとするときは、そのコツは詞的要素(客体化・対象化された(る)「動き」)と辞的要素(主體的立場でとらえる「感じ」「考え方」)で構成されているのである。

例えば、学習者が運動を直接体験し、その時のコツとして「足の振上げ方」や「上方にける動き」「腰の伸ばし方」「脇の締め方」などの重要さを言う場合、現象学的に言えば、それらは学習者の主観(意識)とは無関係に存在するものではなく、その重要性を感じた学習者自身の意識作用(ノエシス)によって意識の中で構成され確信されたもの(ノエマ)である。このことからすると、学習者が取り上げるコツは学習者自身の主観の中にあることになる。つまり、ことばとしての足、腰といった身体部位も、上方、脇などの語も、さらに上方へ、伸ばす、繰り返すといった言い方で表される動感要素も、それを感じた学習者自身の主観内で取り上げられ構成されて言語表現されたものであり、これらは詞的要素(主体が表現する客体的内容)と言えるものである。

このように学習者はコツを言う場合、まずもって詞的要素(詞的動感形態)を取り上げることになるが、そこに、辞的要素が結合して言語表現されることになる。例えば、学習者が自らのコツを「手首を返す」(「～を」および「～す」は辞)や「前傾姿勢を強く■」(「～を」と「～く■」は辞)といった表現で言うようにである。この辞的要素には、学習者が取り上げるそのコツの動感とそのコツに対する学習者自身の価値意識が含まれている。

言語表現をこのように「詞」と「辞」の結合ととらえる時枝の文法に従えば、コツの言語表現は「辞」によって発話者の動感が価値づけられているといえることができる。すなわち、発話者のコツに対する(微かな)考え方は「辞」によって表されるということが指摘される。

4. コツの発話文の特徴

ここでは、学習者によるコツの発話表現（発話文）はどんな特徴を持っているのかが考察される。

(1)断片的な表現であること

学習者の中に発生するコツはモナドコツとして、分割できないゲシュタルト感覚であり、語られることば（創発言語；外言）とはその次元と性質を異にしたものである。すなわち、このゲシュタルト感覚としてのコツは不可疑的であるのに対して、学習者が語る動感言語として語られた創発言語は自己の動きの直観的内容（ベルグソン）ではあるものの、それは可疑的な性格を有している。しかし、われわれはコツ（不可疑性）をことば（可疑性）で表さないわけにはいかないのである。

この学習者によって創発言語として発話されるコツの表現は断片的であり、一見、何の脈絡もなく何の関係性も示されずに提示されることが多い。例えば、「しっかり胸をつる」とか「腰をとる」、また「握りをずらす」など、そうした内容がどの内容とどのように関係しているかは、これらのことばを聞くだけではわからない。すなわち、言い表されたコツが、運動全体の中でどのような関係性をもってどのように位置し、どのように重要なのかは、これらの言語表現からはわからないのである。さらに運動の「対私的意味構造には、多くのモナドコツが構造化されてい」（67:273 頁）るのであり、表現されるコツもただ一つしかないというわけではない。だから、そこでは、いろいろな視点からいろいろな表現でいろいろなコツが複数表現されることになる。このように、いろいろなコツが断片的かつ離散的なことばで表現されるのであるが、コツの言語表現は、原理的に、このように前後の脈絡なしの断片的な表現であることがきわめて多い。

しかし、これらの断片的な表現で、本当に、コツが表されているのだろうか？少なくとも、そのままでは単に動作を言っているにすぎない。例えば、コツとして、「鉄棒の握りを換える」、「上体を前傾させる」、「脚を少し開いて構える」、「あふる」、「体を開かない」などと言っても、そこには単に「握りを換える」「前傾させる」「開かない」といったことば自体の意味しか存在していないし、そもそも実際に動くことで感じたことを自分の視点からただことばにして言い表したという程度のものでしかない。この場合には、それらは何らコツを表すことばとしての性格を有しないということになろう。

この場合、断片的な表現になることの原理を考えなければならない。コツが断片的な表現で

言い表されるのは、コツというものがモナドコツとして初めからシンボリック意味構造をもつものとして発生するからであり（67－270 頁以下）、学習者や選手自身は直観の中でその動感の意味構造に目が向けられるからである。コツの表現はそのシンボル化された内容の表現ということになり、それは説明的な表現ではないのである。言い換えれば、コツは、このような象徴的、断片的表現をもってしか言い表せないと言える。

しかし、これらの断片的表現は運動全体を構造化させ、“できる”に向かわせるための力をもっている⁵³。つまり、これらのことばや表現は断片的であっても直観次元にある動感を背景にして語られている動感表現であり、そこに一つの運動の流れをとらえている、運動達成を根底から左右するコツ次元にある表現とみなされるものである。コツは断片的な表現であることによって“できる”ことに直結した動感を発生させるものなのである。さらに言うならば、このような断片的な表現で表される内容が意味をもつのは、そこで表現されていることによって“できる”こととの関係にある動感が了解されるときである。

(2) 説明的な場面ではコツの内容は抽象化される

コツの発話はこのように断片的なものであるが、説明的な場面ではこのコツの内容は抽象化される。このことを、ここでは社会言語学者の鈴木による古語や外国語、専門語、基礎語の区別を手がかりにして考察していきたい（168：110 頁以下）。

鈴木によれば、辞書に載っていることばは、古語、外国語、専門語、基礎語に分けられる。古語や外国語、専門語は、人々の知らないことば（語）がそれを調べる人たちの知っていることばに置き換えられて説明されていることばで、学習するのに意識的な知的努力が必要である。一方、基礎語は基本語とも言われるが、無意識的教育によって学習されるもので、普通、こどもが成長する過程において日常生活の中で何となく習得される。またそれは、音形と意味内容が渾然一体となって学習されるものである。

一人の個人が身につけている事物に関する基礎語彙（とくに名詞）の範囲に関しては、生活環境、地域差、生活程度などによりかなり違いがある。野球漬けの人が使う用語、例えば、「体の開き」ということばは、その人にとっては基礎語になっているが、野球をやらない人にとっては、それは専門語であり、基本語（基礎語彙）とは言えない（168：119 頁）。

基本語は、動詞や形容詞の場合には、理解度、使用法には名詞の場合ほど人による違いはない（168：117 頁）。たとえば、「痛い」や「行く」ということばの意味を知らない子どもはい

⁵³ 第 I 部第 1 章 4 の(1)参照。

ないであろうし、「速い」「遅い」「重い」「軽い」等のことばの意味をまったく知らずに使っている子もまずいないであろう。「暑い」ときに「寒い！」という子もいない。ただし、寒いとはどういうことかと問われても、即座に的確な返答ができるわけではない。

この「基本語」（無意識的学習の結果獲得されたことば）と古語や外国語、専門語とでは、鈴木によれば、習得過程が逆であるというところに違いが認められる（168：118 頁以下）。基本語は、具体的な生きた場面においてそれに浸り切るような形で体験・学習される。すなわち直接体験から学習が始まる。この基本語では、普通、その体験を客体化し抽象化する必要は生じない。無理にしようとすれば、うまくいかない。もちろん、正しい使い方を十分に心得ているようなことばでも、それがどのような意味を持っているのかをことばで説明できるとは限らない。しかし、われわれが意味も知らずにそのことばを使っているということは、どうみても不自然であろう。

これに対して古語や外国語、専門語の場合は、客体化され抽象化を受けた結果に基づいてことばに接することになり、定義が先に与えられることになる。つまり定義の理解から入る学習ということになる。この場合は、そのことばを本当に使いこなせるようになるには、時間と経験が必要になる。

このことをコツの発話の表現で考えてみよう。コツの習得は運動にどっぷり浸かっていることが条件になろう。どっぷり浸かるということは、体験している内容と言語的に向き合う必要はなく、かつその内容を客体化、抽象化する必要もない。少なくとも、この場合には言語化活動はその中心にはない。まさにそのようなときにコツと出会うのである。ここでは、体験・経験から入るが故に、動感レベルのタイミングやリズムの重要さはよくわかる。しかし、それを敢えてことばで説明できないこともごく普通のことである（「基礎語」と同じ）。これは、定義（言語的理解）から入る学習と根本的に異なる。少なくとも、とにかくコツを身につけようとする実践現場においては、“できる”動感と向き合うことが中心なのであり、その内容の客体化、客観化の作業、あるいは言語化や説明するということはとくに重要なことではない。敢えてコツをことばで言い表そうとする場合でも、その内容は本質的には概念化された理論的知識や客観的内容ではない。それはフッサールのいう絶対ゼロ点から取り上げられている内容であり、またベルグソンの言えれば直観的性格を有している。

これに対して、体験したコツを言い表したり、説明する必要があるときには事情は変わってくる。われわれの世界においてはコツを示し、それを伝える内容として整理することが必要だからである。ここでは、ことばを用いて説明することは避けて通れないことになる。ただし、

この場合のコツの説明のために使用することばは、ヴィゴツキーに従えば、話ことばというより、書きことばに近いものになる。

ヴィゴツキーによれば、人間はことばを話すことから始めるが、文字を覚え書くことができるようになったとしても、話すことばを直ちに書くことはできないという(188:73頁以下)。書きことばは話ことばと違って、抽象化段階に位置することばであるからである⁵⁴。説明するためにはこの抽象段階にある書きことばが使用される。したがって、体験したコツを説明するための表現は、話ことばであっても書きことばに近いものになる。この書きことばに近いということは、コツを説明する場合には、話ことばを使っている、そのコツの内容は抽象化されてしまい、感じていることや思っていることをそのまま言い表していない、ということをしている。

(3) パトス論理で語られること

コツが動感言語として発話されるということを、すでに述べた安永の基準体験線で考えると、コツに関する動感言語は体験の流れが左から右方向へ(AからBへ)と流れていく過程で生じ、右に行くに従ってその内容は対象化されることになる(客観化)。そしてその内容が外言の形をなすときには(言語化)、そこで使用されることばは創発言語としてコツを絶対ゼロ点(内的視点)から語ることばとなる。

学習者自身によるこのコツの言語化は、直観してはいるものの、形のない運動感覚的意味核/モノドコツに絶対ゼロ点から動感的な「形」(意味)を与え、具体的な運動のやり方としてまとめ上げていく過程を意味している。

そこでは話者としての学習者本人は、絶対ゼロ点から主語を省略して、コツの骨格をなす要素を動詞(コツの核をなす)を用いた表現(「抜く!」)、またそこに目的語が付加された表現(「腰を回転させる!」)、さらに微妙な要素については副詞や形容詞などの装飾品詞が添えられた表現(「強く跳ね上げる!」、「素早い腰回転をしたあとにすぐに~する!」)などを用いて語り、このことを通して体験したコツの内容が次第に整理されていく。このような過程を経て、コツは徐々にその「形」を現してくる。この場合、コツに「形」を与えるのは、まずは、その運動を直観しその運動の感覚を知っている学習者本人から出ることばである。ただし、この学習者から出ることばによって事実(体験したこと)が完全に透明性をもって言い表されている

⁵⁴ 同じことばでも「話ことば」と「書きことば」は違うという、ヴィゴツキーの指摘にはきわめて興味深いものがある。それはコツの実質的内容的理解なのか、言語的また抽象的理解なのかという違いに相当する指摘だからである。

わけではない。

哲学に厳密性（的確性、正確さ）を求めたベルグソン（6：9 頁）によれば、「内的経験というものに厳密に適合した言語などはどこにも見いだせない」（6：53 頁）という。すなわち、あるひとつの概念を意味することばや表現、記号を使ったからと言って、厳密に内的経験を知ったことにはならない、あるいは知ることはできないことを強調しているのである。ベルグソンの言う厳密性とは存在そのものとぴったりに合っているということであるが、この点について、池辺は次のように述べている。「それは存在そのものの論理・事実そのものの理法を明らかにする事である。このような事実の論理は事実の外から出来合いの枠をもってしては把握できぬ。事実に論理を押し付けるのではなく、事実が自らの論理を明らかにするのでなくてはならぬ。そのためには、われわれは事実と一つにならねばならぬ。そこにロゴスの論理ではなくパトスの論理が求められる。」（37：62 頁）

ここで池辺が言うパトスの論理とはベルグソンの直観と関連したものであり、ロゴス（ことば、記号、関係）の論理（知性の論理）と区別される情緒の論理、存在の論理、事実の論理、自覚の論理を指しているが（37：60 頁以下）、それはロゴス以上のものだとして、ベルグソンにならって、厳密性を獲得するためにはパトスの論理が重要であることを説いている。なぜなら、パトスは個別的主観的でありロゴスは一般的客観的であるが、パトスからロゴスが出てくるのであってその逆ではないからであり、また「事実と接触しない単なるロゴスはいわゆる抽象的な一般性にほかならない」（37：64 頁）からである。

このような根拠から、運動を直観した学習者自身がコツについて語る際のことばや表現（個別的主観的な次元）はその運動の技術内容（一般的客観的次元）に繋がっているととらえることができる。例えば、ある運動でコツとして表現される「押し出す」や「腰をかぶせる」といったことばや表現は、もちろんこの表現自体は一般をとらえた客観的、科学的、ロゴスのなもの（抽象的な一般性）ではないけれども、体験の事実（「そうやってできた！」）と一致する唯一無比にして独自なるパトスの論理（「こんな感じだった！」；個別的主観的ではあるが普遍的客観的論理）で語られている表現なのである（37：62 頁）。

第2章. コツの言語表現の意味論的構造

前章で見てきたように、コツ発話の表現にはいろいろな性格があるが、学習者が言い表そうとしている、あるいは、伝えたいと思っているコツは、その言語表現通りの理解でいいもの、その言語表現からある程度連想しなければならないもの、さらにはその言語表現の奥深くに考えをめぐらせなければならないものまであり、その表現とそこで意味される内容の対応関係は単純ではない。ただしこの場合、コツを言い表そうとする場合の表現は、言語学的に言えば、少なくとも意味論的構造をもつ表現を中核としているとすることができる。ここでは、コツの言語表現の意味論的構造を明らかにしていきたい。

1. 意味論的表現

言語学では、会話のシチュエーションやコンテキストに関わりなく、ことば自体がもつ意味を扱う学問分野は意味論 (semantics) と呼ばれている (133 : 94 頁以下)。この意味論は、ことばとそのことばによって表される意味が一对一の対応関係をもつことを前提とし、そのことば自体のもつ意味を扱うものである。例えば、学習者が「膝を曲げる!」「頭を背屈させる」と言った場合、これらの発話 (文) の意味はそこで使用される単語や句、文章自体のことばの分析で明らかになる。ここでは「膝」「曲げる」「頭」「背屈」ということのそれぞれのことば上の意味が分かれば、そこで言い表されている発話 (文) 自体の意味は分かる。また、倒立で「手の位置をしっかりと見る!」というような発言の場合、「手」や「位置」という名詞、「しっかりと」という副詞、「見る」という動詞の意味が分かれば、そこで言われていることは文の構造から理解できるのであり、その発話内容の意味もわかるのである。

学習者や選手は運動ができるようになると、その運動のやり方を自分のことばでコツとして表現するようになる (創発言語)。このときには学習者や選手は、この運動のコツを少なくとも自分なりに「わかっている」(配視) (59 : 11 頁以下)。“できる”人は通常、練習を通してじょじょに技術を身につけていき、そうして大切だと思われる注意点やポイント、すなわちコツを語るようになるのである。このコツを語る際には、スポーツの動きを行なう前、行なっている最中、終了した後の感情や気分、そしてそのコツのやりにくさ、やりやすさなども合わせて語られる。

このようにコツとして語られる内容は、発話者が自分のこととして「手の振りをこうする」、「もっと高くジャンプする」、「膝をしっかりと曲げる」などと言うように、身体を「このように動かす」という自分の意図的動作である。このように“できる”本人が敢えて自らのコツを言

語化して表現しようとする、通常は、「ここはこんな感じでやるといい！」とか「ポイントは腰を鋭く回転させることだ！」というような言い方になる。もちろんそれは、第三者から見れば外的「像」＜他者の動きの視覚的映像的知覚＞としてとらえられるものである。われわれはこのような意味のコツによって“できる”を経験するが、少なくとも、運動の初心者であろうと一流の選手であろうと、そのコツでできれば、そのコツと“できる”は結びつけられて、われわれはそれをコツとして発話するのである。

コツを表現する際に使用されることばや単語や表現には、例えば、次のようなものがある；前、後ろ、右、左、腕を上げる、腕を下げる、離す、はじく、あふる、ける、背中をまるめる、胸を含む、体重を乗せる、はずす、当てる、上方をねらう、着地をする、着地をとる（決める）、手首を返す、握りをずらす、前方を見るなどである。これらコツに関する表現は、本質的に、発話者の状況に依存した直示表現である（133：116 頁）。

これらのことばや表現は、その使い方によって学習者が言い表そうとする意味（動感内容）に微妙な差を生じさせる。例えば、「脚を上げる」と「脚をすくい上げる」と表現した場合、そこには歴然と動感の差が生まれるし、言い表し強調しようとする意味にも違いを生じさせる。さらに、「蹴り上げる＜ように＞脚を振り上げる！」、「円を描く＜ように＞上体を回転させる！」というような、「～のように」ということばを付加する通常の比喩的表現、「突き上げる」、「はじく」、「はずす」、「倒す」、「腰をとる」などように、「～のように」という付加語はないが、譬えて言うことによってそこに“できる”に関わる付加的意味を生じさせている表現をわれわれは至る所で使用する⁵⁵。しかし、このような言語表現は単なる比喩的表現ではなく、コツの実質的内容に踏み込んでいる表現だと考えるべきである。つまり「突き上げる（感じ）」と「押す（感じ）」というそれぞれの表現の違い、また「はじく（感じ）」と「離す（感じ）」の表現上の違いは学習者や選手自身の運動達成を大きく左右することになる。「腰をとる」「胸を含む」「胸を丸くする」「体を開かない」「抜き」「開き」「当て」「あふる」「なめる」といったことばや表現は、コツの表現として、運動達成に影響を及ぼす重要な意味を有しているのである。コツの言語表現で用いられるこれらの語や単語は単なる日常的なことばではない。このような表現形式で用いられる語や単語は、“できる”ためのテクニカルターム（術語）なのである（161：288 頁以下）。

また、コツをことばで表現する場合、語の置き換えなし置換ができない、あるいは置き換

⁵⁵ 比喩的な表現に関しては、さらに 隠喩的表現（「警察の犬」）、さらに換喩（「今日は鍋だ！」→鍋料理）や提喩（「めし」→食事一般）、意味が向上したり悪化（「僕」「貴様」）するような表現もある（74：103 頁以下、133：105 頁以下）。

えたりすると意味がなくなるというシンタグマティックな関係（133：107頁：170：128頁以下）でことばを使用することがある。この場合には、ことば通りの意味でその内容を理解することはできない。例えば、鉄棒の車輪を行う際に体操競技でよく言われる、懸垂振動の真下での「肩の脱力」という言い方である。この言い方によって車輪や振動運動のコツが言い表されているのであるが、この言語表現自体からは、通常、その意味はわからない。なぜなら、直立状態で「肩の脱力」と言えば、「肩の力を抜く」という、通常、立位でリラックスすることが意味されてしまうからである。その同じ表現が、鉄棒で車輪を行う場合には、振動系の技の遂行に関わるコツの表現になるのである。

また、この「肩の脱力」という言い方は、ある語がある語と結びつく限りで意味をなすという選択制限（74：103頁：133：108頁以下）による表現でもある。すなわち、「馬がいなく」「よちよち歩き」というときのように、あることばとの組み合わせではじめて意味をなすようなコツの言い表し方なのである。鉄棒の車輪では真下での「肩の脱力」という言い方がコツとして意味をもつのであって、「腕の脱力」ということばで言い表した場合には、それはコツの表現にはならなくなってしまう可能性がある。

さらにコツの言語表現は記述的意味ではなく、表現的意味ないし感情的意味（133：114頁）として用いられることも非常に多い。例えば、「手首を返す！」という言語表現は、「手首を返せば（支持体勢にもちこめる!）」ということが暗に意味されている表現であり、この場合の意味が表現的（感情的）意味と言われる。また、逆上がりをするときの「足の振り上げ！」という言い方も、「足を振り上げれば（逆上がりはやりやすくなる!）」ということが背景で暗に意味された表現（表現的意味）なのである。さらに、「前方を見ることが大切だ！」という言い方もその背後に＜前を見れば（一できる!）＞ということが、また「腕をすばやく上げる！」という表現も＜腕をすばやく上げて（一そして高くジャンプする!）＞ということが暗に意味された表現的意味をともなった言い方である。これらは実際に発話するときに、その背後でその結果や成果にまで目を向けた表現なのである。

コツは、まずもって、このような意味論的な表現によって言い表されるということが言える。

2. コツ表現時の単語の性質

ここでは、コツ表現をする場合に、そこで用いられる単語に付与されることになる性質について考察していく。

(1)機能性（関係性）

ボイテンデイクは『人間の姿勢と運動の一般理論』（1956）のA章の第4節で「過程」（Prozeß）と「機能」（Funktion）を、以下のように定義している（12：S.7f.）：

- ・「過程」：法則的連関のなかで起こる一群の諸現象や時間と共に個々の諸契機が並べられたものとして因果律的に結びついているできごと
- ・「機能」：有意味な分割できない全体

すなわち、「過程」とは事象（運動）のいわゆる自然法則的側面の把握であり、「機能」は実存的ないし現象学的把握と言ってよいであろう。例えば、人が歩道を「歩いている」とする。ボイテンデイクによれば、この「歩いている」という言語表現で問題にしていること自体が人間の行為としての意味的理解、実存的、現象学的理解であり、「機能としての認識」ということになる。「歩く」ということばでとらえられている動きは、「誰かが何かをなす」ということを背景に「意味」をもった運動ととらえられるからである。一方、それを足の振り子状の物理現象ないし物体の移動問題として取り上げることもできる。ただし、その場合は「歩く」ではなく、「物体の振動運動」の様相であり、「誰かが何かをなす」のではなく、「何（物理現象）が起きているか」という自然法則的理解なのであり、それは「過程としての認識」ということになる。このように、われわれは運動現象を異なる二つの次元で問題にすることができる。

しかしボイテンデイクの強調するところは、われわれは運動を単に立場を変えて認識することができるということではなく、われわれの運動はそもそも実存運動なのであり、その意味は機能概念を指定することによってしか得られないということなのである。

このような機能をボイテンデイクは行動様式とも呼んで、次のように述べている。「環界に対する動物の関係は決して一連の過程として示されるのではなく、それは常に何かほかのものに意味として関連づけられている現象の中で明らかにされる。われわれはこの現象を機能あるいは行動様式と呼ぶ。この概念には、目的志向の行為だけではなく、表出運動も含まれ、すなわち、意味で満たされたすべての生命をもった運動と姿勢が含まれるからである。このような機能をわれわれは観察できるし、その固有の法則性の中で研究することができる。・・・こうしてはじめて、掴んだり、捜したり、防衛したり、バランスを維持したり、平衡を回復したり、歩く、走るなど、端的に言えば、動物と人間がなし得ることについて論じることができる。」（12：S.12）「平衡を維持する、立つ、掴む、何かを捜す、何かを跳び越えるなどの言表は、ある一定の数のできごとの単なるつながり以上のことを述べている。具体的経過の中におかれている機能、すなわち平衡を維持する、何かを掴む、跳ぶなどのような仕方は、まさに

努力して獲得されることになる最終状態によって、すなわち未来のことによって規定されているのである。」(12:S.12)、すなわち、この運動を機能としてとらえようとする立場によって、われわれは「物理学者や技術者、また身体内部で起こっている過程に関わっている物理学ないし力学的に思考する生理学者とはまったく次元を異にする現象領野で考えよう」と(12:S.12)しているのである。

コツの内容は学習者や選手本人によって各品詞の単語を用いて表現されるが、そのときに使用される単語は自然法則によって生じる「過程」に関わることばではなく、ボイテンディクが強調した実存運動を意味する「機能」に関わることばである。ボイテンディクのこの実存運動を意味する機能概念は「誰かが何かをなす」ということに関わっているが、この概念は関係性をとらえた概念である。ここで言う関係性とは、行為をする主体とその主体が行う行為との関係のことであり、そこにはことばを用いる人の主観的解釈が伴う。

例えば、「歩く」ということは<歩く>人の<歩く>こととの「関係」の中で生じる運動行為であって、それを自ら言い表す場合には、そこには歩くことに対する自らの関わりかたを意識した主観的解釈的な表現がとられるのである(「急いで歩く!」)。もちろん、他者もそうした言い方はできるが(「もっと急いで歩きなさい!」)、そうした場合であっても他人の「歩く」を機能的に見て、そこに関係性(<歩いている>他人とその人の<歩く>こととの関係)をとらえていることが条件である。単なる手足を交互に振り出して移動することが「歩く」というのではない。もちろん、「歩く」といってこの歩行形態をわれわれは具体的にイメージできるが、それはその動きをイメージしている時点ですでに機能性、関係性をとらえているからである。同様に、「行く」「戻る」「帰る」などの動詞もこの関係性を有した言葉であり、この関係性(誰がどこに行く、何がどこから戻る、誰がどこへ帰っていく、など)が見えてこない場合には、その単語は過程的現象ないし客観的動作を表すことばになってしまう。

コツを示す用語として現場で用いられる、例えば、「開く」「落とす」「はじく」「引く」などの動詞も同様であり、そうした動詞はこのような機能性(関係性)の理解なしにはその意味するところも理解することはできない。

(2) 動感束縛性

例えば、逆上がりは「鉄棒を肩幅で握り、地面を蹴った後、腰を鉄棒に引き寄せることが大切だ!」とことばで言った場合、そこで使われた<鉄棒><を><肩幅><で><握り><地面><腰>・・・などの単語は、それを言った人が逆上がりをするときには大事だと考えて使用

した、ということである。すなわち、それらの単語はそれを言った主体の意識と離れては存在しない。ここで使用される単語も表現も言語主体の意識と離れては存在し得ないものであるし、そこから離れて分析しても、そこで言われたことの意味は分からない。

「こんな感じで!」、「もっと引き込むように!」、「上体が後ろに倒れないように」、そして「もっと上方を意識して踏み切るように!」など、運動実践の現場では、指導者が選手にことばを使用して運動のポイントを指導するが、このときに選ばれるコーチのことば、単語、表現は、常にことばの発言主体（指導者）の意識から離れては意味をなさないし、その内容（強調点、イメージ等）も理解することはできない。

発言主体（指導者）には、自らが発した音としてのことばが学習者や選手が聞き取ったときには運動の課題を達成するためのことばになるという意識があるが、この発言主体の意識に目を向けない限り、そこで発せられた音としてのことばは単なる音としてことばの域を出ないことになる。

このことと関連して、九鬼周造は『いきの構造』で、ことばのもつ意味構造の分析を通して、日本人特有の「いき（意気）」ということばの本質に迫ろうとしている。このことば（概念）は民族的色彩の著しい語（概念）の一つであり（83：19頁）、九鬼によれば、内包的構造の考察において「いき」は媚態、意気地、諦めの三つの契機を示しているという（83：47頁）。そして、「いき」の定義を、「垢抜して（諦）、張りのある（意気地）、色っぽさ（媚態）」と表現している（83：51頁）。

また、外延的構造の考察では、まずこの語を含む意味領野を八つの単語によって構成し、その意味関係を視覚化するために、以下の図7のように構造化（六面体）している（83：78頁）。

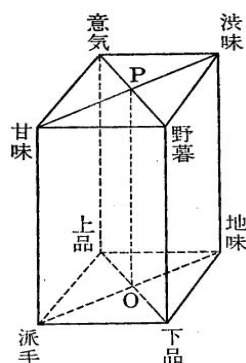


図7 いきの外延構造関係図

九鬼周造は「いき」という概念（語彙）をこの図のように関連ある語との意味関係をとらえて体系的分析を行っている。このように「いき」ということば（日本語、単語）にはきわめて複雑な構造があり、九鬼はそれを取り出したのである。実際のところ、この「いき」ということば、単語の意味と価値は、日本社会のなかで生活し、かつそのことばが使われる状況や場面に慣れ親しんでいなければ、何も分らない。日本人であっても、「いき」が取り上げられる土地、風習、時代などと無縁であれば、その意味も価値も分らうはずもない。したがって、単に“いき”（意気）と言われても、まずもって「いき」の意味体験の具体的把握（具体的な主観的体験そのものの感じ；83：146 頁）なしには、「いき」の本質も、この語の構造関係も理解することはできない。

九鬼は、「いき」と言われる日本人の意識現象を解明する際の問題について次のように述べている。「客観（的表現）→主観（的意識）」の方向性で解明しようとする、「客観的表現の理解を以て直ちに意識現象の会得と見なすため、意識現象としての「いき」の説明が抽象的、形相的に流れて、歴史的民族的に規定された存在様態を具体的、解釈的に解明することができないのである。われわれはそれとは反対に具体的な意識現象から出発しなければならぬ。」

（83：30 頁）つまり、具体的な体験をまずとらえて、そのあとに客観的な現れの分析に進む「主観→客観」の方向性で、この「いき」という言語表現で表される日本人の意識現象を解明しようとしたのである（85：283 頁）。

このことから言えることは、運動のコツもそれを言語表現する際、そこで使用する単語ないしことば（概念）（例えば、あふり、抜き、つり、含む、開くなど）には、九鬼が『いきの構造』の分析で示したような内包的構造および外延的構造が前提となっているということである。例えば野球のバッティングにおいて「身体が開く」という場合に使われる「開く」という語（単語）は、バッティングの動感体験を前提にしなければその意味はほとんどわからないという性質をもっている。本論では、このことを単語の動感束縛性と呼ぶことにしたい。

(3) 意義素の変質性

コツの言語表現の仕方は多様であり、同じコツが多様な表現型で表されることも多い。このコツの言語表現型は、以下のように分類することができる。

a). 通常の言語表現

『速く』、『もっと遅く』、『腰を曲げる』、『手を振り上げる』、『切り返したら上体を鉄棒に近

づける』、『ボールを見る』など

b). 運動構造的表現：

『胸を正面（右）に向ける』、『腕を軽く曲げて肘を上方に引き上げるようにする』、『左腕に体重を乗せる』、『前傾姿勢をとる』、『上体を起こす』、『握りを変える』、『手首を返す』、『腕を左右に開く』、『踏み締める』、『脇を締める（肩角を減少させる）』、『胸を先行させる』

c). 専門的動感表現（擬態語等）：

『タンタタターン』、『ばーんと！』、『がーんと』、『きゅっと』、『ゆっくりと』など

d). 慣用的（専門的）表現、隠喩的表現：

『このリズムで！』、『突きはなす』、『突き上げる』、『はじく』、『あふる』、『抜く』、『肩を脱力する』、『はずす』、『後ろに引き込む』、『落とす』、『すくい上げる』、『割れを作る』、『ためる』、『胸を含む』、『胸を当てる』、『胸を丸める』など

e). 否定的表現：

『振動を大きくしない』、『手を早く離しすぎない』、『ひねり始めを早すぎないように』など

こうした言語表現型を用いて表そうとするコツは実際には運動することでとらえられるが、それは異なる言語表現形式（＜諸現出＞）を用いて表される。この場合、言語表現形式は少なくとも国によって異なり、その国の言語規則に従って表現される。だから、その言語表現からコツの内容をとらえるためには、その国の言語規則の理解がなければならない。この場合、語の意義素⁵⁶（24：318 頁以下、74：89 頁以下、85：58 頁以下）に違いがあることは言うまでもない。このことは次のように説明できる。例えば、言語学者服部四郎によれば、英語の *wind* と日本語のカゼ（風）の意義素には違いがある。日本語のカゼは快・不快に対しては中立であるが（どちらにも使える＝寒い風、暑い風、すずしい風、暖かい風）、英語の *wind*（日本語に訳せばカゼ＝風）は「すずしい」とか「暖かい」という形容詞と組み合わせられて用いられるこ

⁵⁶ 意義素とは、国広によれば、服部四郎により提唱されたもので、この概念は言語を「発話」「文」「単語」の3つの抽象形式に分けることを前提として、このうちの単語の意味を指す。この場合、単語の意義素とは、話し手たちの社会習慣的物の見方を代表するものであり、また、「同じ事物」を表す単語でもその意義素が言語によって異なることがあるという（85：58 頁以下）。

とはない。その場合は、cool breeze／warm breeze というように、breeze という単語が使われるという（24：325 頁以下）。

言語学で言われているこの意義素という概念を、ここではコツの言語表現で考えてみよう。例えば、平行棒の棒下宙返り支持という技において（図 8 参照）、逆懸垂姿勢の局面から上昇回転していく際、『掴んでいる棒を引く』あるいは『引っ張る』などと言われるが、これはこ

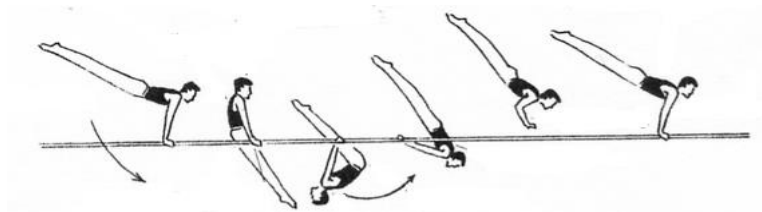


図 8 棒下宙返り支持

の技のコツの言語表現と言える。この場合、『引く』『引っ張る』という日本語の基本的意味には、物の一部をもって＜自分の方に強く引く、あるいは引き寄せる＞意があり、さらに「引く」は＜力を入れ一ぎゅっと＞といった感じが伴う動感運動である。またこの動感運動は身体のいろいろな部分（手や足、頭、首など）で行われる。『引く』『引っ張る』という日本語の表現は、基本的には少なくとも、自分から遠ざかる、あるいは、遠ざけるという意味で用いられることはない。「引っ張っていけ！」という場合、それは引っ張る主体に近づけていけ、という意味である。

しかし、棒下宙返り支持で使われるこの『引く』『引っ張る』ということばは、その基本的意味（日常的な一般的な基本義）だけで用いられているのではない。この『引く』『引っ張る』ということばで表される動作は、平行棒において逆懸垂姿勢から後方へ回転して上昇し支持姿勢に持ち込むために、逆懸垂姿勢を通過する局面において外手握りの状態で肩角度を力強く開いていく際の課題達成のための動感運動である。体操選手はこれを『引く』『引き手』と言い、力強い上昇力を得ることを目的とした技術的動作という理解をするのである（48：473 頁）（図 9 参照）。

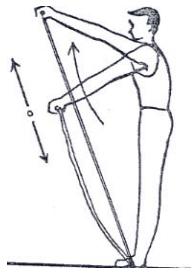


図 9 引き手の図

金子はこの『引き手』について、次のように述べている。「手の離れる直前まで有効に行われなければならない。それは決して短い時間に鋭く働くのではなくて、バーが手にねばってしまふような感じと共に長い間行われる必要がある。胸を反っていると、引き手の働きに合わず、肩角度を開くのに不利である。従って、引き手の技術には当然胸をふくんだ姿勢が前提としてとらえられていなければならない。外手握りで行われるこの風変わりな感じをよく感得させることをコーチはよく認識する必要がある。」(48：473 頁)

ここで重要なことは、平行棒の棒下宙返りを行う際には、金子のいう「風変わりな感じ」こそが『引き手』の本質、すなわちコツなのである。この『引き手』は確かに「引く」ということの基本的一般的意義素を持つてはいるが、棒下宙返りではそれはその一般的意義素としてではなく、逆懸垂姿勢から支持姿勢に持ち込むための力強い上昇力を得るというようにして、この『引く』の“できる”に対する機能がとらえられているのである。

言うまでもなく、この場合「引く」ということの一般的意義素はどの言語においても（例えば、日本語、英語、ドイツ語など）同じであるとは言えない。日本語の「引く」はドイツ語では状況に応じて *ziehen* を用いたり *spannen* などの語を用いて表すのであり、そのときの「引く」には意味上に微妙な差を生み、このことばを用いることのできる場面や状況も変わってくる。平行棒の棒下宙返りの『引く』は、一般的意義素レベルの「引く」ではなく、その技が“できる”ことに関わるコツとしての『引く』であり、それは逆懸垂から身体を回転上昇させていくときの力強く、一気に行われる肩角度の＜開き方＞に関わる内容である。

コツは一般的意義素から離れ、“できる”に関わる意義素を獲得した語を用いて表現されることになると言えよう。

(4) 虚構性

われわれがコツをことばで言い表そうとする場合、運動の客観的な状態の表現（例えば、腕

が肩より上方にある) から主観的な表現 (あでやかさ、冴え、落とす、突っ張る) にまで及んでいる。このような多彩な表現を可能にしているのは、ことばのもつ虚構性である。鈴木は次のように述べて、このことばのもつ虚構性を指摘している。「ことばというものは、混沌とした、連続的で切れ目のない素材の世界に、人間の見地から、人間にとって有意義と思われるし方で、虚構の分節を与え、そして分類する働きを担っている。言語とは絶えず生成し、常に流動している世界を、あたかも整然と区分された、ものやことの集合であるかのような姿の下に、人間に提示して見せる「虚構性」を本質的に持っている。」(169 : 33 頁以下)

鈴木がことばに虚構性 (169 : 40 頁) があると言い得る根拠は、同一の対象を違った角度からとらえる見方が現に存在し、そのそれぞれの見方から異なることば (名詞、動詞、形容詞・・・) が生まれているという点にある。例えば、日本語では「氷」と「つらら」ということばがあるが、トルコでは「氷=buz」ということばはあっても、「つらら」ということばはないという (169 : 39 頁)。この「つらら」ということばが日本語にあるのは、日本人がそこに「つらら」というものの価値を認めているからなのである。「つらら」という日本語は、まさにことばのもつ虚構性によってできたことばである。同じようにして、大気や気温との関係をもつ日本語の霜、露、霧などのことばも虚構性からできたことばである (169 : 39 頁以下)。ただし、この霜、露、霧は単なる虚構にすぎないことばだとは言えない。すなわち、虚構だといっても、そこにはそうしたことばを使用するそれなりの根拠があるのであり、その根拠がことばになって現れているのである。

要するに、ことばのもつ虚構性とは、単なる素材とみなされる混沌としたカオス世界を実際に体験し、また経験してその世界に秩序を与え、人間の手におえるような物体、性質、運動などに仕立てることである (169 : 32 頁)。

このような鈴木 of 指摘することばのもつ虚構性という視点で、コツの言語表現時に使用される単語について考えてみよう。そうすると、例えば体操競技において「抜き」「あふり」「はずし」「落とし」「側湾」「開き」といったことば (単語) で言われるコツは、ことばのもつ虚構性によって表現されていると言ってもいいのではないだろうか。言い換えれば、体験を通してその人の中に出てくるコツは、「抜き」「あふり」「はずし」「開き」などといった虚構的なことばによって表されているということである。もちろん、虚構的表現であると言っても、本質的に、それらは運動する本人には課題解決に役立ち得るとされるそれなりの動感が根拠となって出てきたことばである。日本語の「抜き」「あふり」「落とし」「はずし」「開き」といったことばが虚構的であると言うのは、表現時のことばの使用に際して、動感的に任意の視点をもつ

ているということである。

学習者が運動を直観し、そこで自らつかんだコツを言い表そうとする場合、その本人にとって有意義と思われるし方で、その学習者がコツに虚構の分節を与えていることは確かである。そのときに出てくるのが、「抜き」であり、「あふり」であり、「開き」といったことばであり、少なくともコツを言い表すのにその学習者が選んだ最適なことばだったのではないだろうか。だから、虚構性ということわれわれがとらえておくべきことは、これらのことばは単なる日本語の意味の次元で取り上げられる内容ではなく、直観による動感的次元でコツを提示するのに役立つような働きをもつことばであるという点である。

3. コツの発生と言語表現の間に介在する「意味形態」⁵⁷

コツは動きの意味核（運動感覚的意味核）として存在し、われわれはその存在を実感として感じ取ることができる。コツが言語化されるとき、言語表現はある形式に当てはめられる。ここでは、ドイツ語学者関口存男の意味形態論を手掛かりにして、コツの意味論的な言語表現形式が選択される際の表現構造を明らかにしていくものである。

寺門によれば、関口は言語を結果として生じたもの、できあがったもの（書かれたことば、話されたことば）から出発するのではなく、ことばが具体的な形をとる際の言語主体、認識主体の「とらえ方」「考え方」こそ研究されなければならないことを強調しているという（181）。

この関口が主張した意味形態文法の対極に位置する形式文法では、対象をこれ以上分けることのできない最小限の要素に還元し、その要素間の諸関係や相互作用を調べ、その上で全体の仕組みを解明しようとする方法論によって、文を構成する最小単位である単語を基点とするとともに、その単語をさらに語幹、語尾、接頭辞や接尾辞といった単位に分解することを通して言語の仕組みがとらえられている。言語で一番重要なことは、話者が考えていること、話したいことの「意味」を伝えることであるはずだが、この形式文法では、自然科学的立場に立っているために、そうした「意味」を真正面から取り上げることができず、むしろ語形や文型などの問題に限定されてしまう。この場合には、使用する単語なり語句なりの使い方は「形式」として規定されている。

これに対し、関口のいう意味形態文法は、そうした単語や語句の使い方は基本的に話し手の意図ないし「言いたいこと」、「趣旨」から規定されるとして、話し手の意図から個々の単語や

⁵⁷ この項は、拙論「こつの言語表現に関するモルフォロジー的考察」（文献 151）の（5.）「こつの言語表現に介在する『意味形態』」をまとめ直したものである。

語句の使い方を考えるという立場に立っている(92, 93)。つまり、形式文法では、その語形や文型などの形が分析対象となっているのに対し、意味形態文法では、話者の意図というものを起点として、その意味を表すにはどんな単語や語形が使われるのかが重視されているのである。この意味形態文法で、「意味」は形式文法で言われる「形式」(文章形態、表現等)からは生じないという点が強調されている。

関口の意味形態文法からすれば、われわれが心に浮かぶ「何か」をことばにして表現し伝えようとする場合のその「何か」は、われわれの頭のなかに浮かんだ伝えたい内容や言いたいこと、あるいは話者が取り上げる意味である。この意味をことばを用いて表現する場合に注意しなければならないのは、そこで使用されることばや表現は言いたいことやその意味を表そうとして話者によって選ばれたひとつの表現の手段にすぎないということである(93: 294 頁)。話者が伝えたい内容、言いたいこと、また話者の考えている意味は、定型の形式表現(形式文法)では言い尽くせないことがあり、その場合には「自分で、ある形式を作り出して、・・・その形式をある考え方で用いること」がある。この場合には、「その形式がその考え方に応じた機能を発揮して、言おうと思う意味を表すことになる」(93: 294 頁)。この場合の“考え方”は考え方のパターンあるいは(ものの)考え方(の形式)として、関口の意味形態文法では「意味形態」と呼ばれている(164: 102 頁以下)。

真鍋はこの「意味形態」を次のように説明している。例えば、本来、ドイツ語の *brummen* (うなる、吠える)、*schreien* (叫ぶ)、*fortfahren* (続ける)、*zischen* (しゅっと音を立てる) という動詞は、*sagen* (言う) という意味で使うことができる。すなわち、それぞれ「うなるように<言った>」「わめくように<言った>」「ことばを続けて<言った>」「はき出すように<言った>」というようにである。これらはいずれも *sagen* (言う) という“考え方”がそこにあり、その“考え方”でそれらの動詞を用いているのである。本来、*sagen* (言う) という意味をもたない動詞に「*sagen* (言う) という機能をもたせて」用いているのである(93: 269 頁)。このときのこの“考え方”のことを「意味形態」⁵⁸という。

ここでわれわれが目をつけたいのは、次の4点である。一つは、伝えたい内容、言いたいこ

⁵⁸ 関口は、『趣味のドイツ語』(1979)の中で“意味形態”の概念について以下のように説明している。ほんのちょっぴりとかほんの少々ということを書きたいとき、「西洋人は西洋人なりの癖があって、・・・たとえば *um ein Haar* (髪の毛一筋ばかりも) とか、*um einen Schattenn* (影ほどでも) とか、*um eine Idee* (一観念分ほど)・・・なんてことを云います。・・・すなわち、*Haar* は『髪の毛』という『意味』であり、*Schatten* は『蔭』という『意味』であり、*Idee* は『理念』という『意味』です。『意味』はそれぞれ違います。けれども、『ほんのチョッピリ』という意味で用いる時には、その元来の意味の如何にかかわらず、前後関係の勢でもって、期せずして同一の型にはまってしまう。此の、元来の意味の如何に関せず、前後関係、すなわち『言わんとする趣旨』の方向に向かって凡ての既成の単語を恐ろしい力でもって是が非でもグイグイと引っ張って行こうとする『流れ』のことを、私は意味形態と呼びたいのです」(164: 103 頁以下)。

と、趣旨あるいは意味と、ことばによる表現形式との間には「意味形態」が介在する、すなわち意味→「意味形態」→表現形式、あるいは表現形式→「意味形態」→意味という関係で「意味形態」がとらえられている点である(93 : 295 頁)。このことから言えるのは、「意味形態」があってはじめて言語化(言語表現)が可能になるということである。二つ目は、何かを言おうとするとき、すなわち、伝えたい内容、言いたいこと、趣旨あるいは意味を言おうとするとき、そこで使用されることばはそこに介在する「意味形態」に従って任意に選ばれているということである(93 : 294 頁)。それゆえ、言語表現されたからといって、そこで用いられたことばないし表現形式自体が言おうとすることや意味を直接表したものとは限らない。三つ目は、真鍋が関口の「水に方円なし、器に方円あるのみ」(93 : 293 頁)という表現を、「水(意味内容)に方円(形、表現形式)なく、器(意味形態)に方円(形式)あるのみ」と解釈しているように(93 : 295 頁)、「意味形態」は言おうとする内容に形を与えているものだという点である。そして、四つ目は、意味からいきなり表現(文章形態)は生じない、形式(文章形態、表現)からいきなり意味は生じないという点である(93 : 293 頁)。

この意味形態文法の立場から見れば、コツの言語化過程ないしコツの言語表現の形式が選ばれる構造は次のように説明することができる。

運動感覚的意味核としてのコツ自体とその言語表現形式との間には、学習者や選手の動きかたに関する“考え方”の形式としての「意味形態」が介在し、その意味形態によって使用される言語表現形式(意味論的表現)が左右される。すなわち、発話時に選ばれることばや言語表現形式は、すでにコツに対する学習者自身の“考え方”によって決定される。この場合、コツの言語表現の形式は、学習者のコツに対する「意味形態」を背景にした意味論的な表現形式なのである。言い換えれば、コツの言語表現の形式の違いは、その根底において、学習者のコツの“考え方”(「意味形態」)の違いでもある。

このように、学習者がコツをことばで表現しようとするときには、その学習者の中に生まれた「意味形態」が一連の言語化過程に介在し、学習者にとってコツを表現するのにふさわしい単語を用いさせるように言語表現形式を決定づける、という構造のあることを指摘することができる。

ゆか運動における後方かかえ込み宙返りのコツとして、学習者自身がその重要なポイントを「腕を前上方に振り上げる」という場合、それは、例えば「後方のかかえ込み宙返りという技がうまくいくためには、踏切りと同時に身体が空中へ効果的にとび出し、その勢いが空中での後方への左右軸回転につながるようにすることが必要で、そのためには踏切時に腕が前上方に

勢いよく振り上げられることが大切だ」という、学習者自身が実践を通して生じてきた宙返りを実施する際の“考え方”の表現なのであり、しかも「腕を前上方に振り上げる」ということに焦点を当てた、学習者自身の象徴的なコツの表現の仕方なのである。

このことから言えることは、この場合の「腕を前上方に振り上げる」ということは客観的な動作の表現ではなく、この技のコツに対するこの学習者の考え方（意味形態）を表す意味論的表現だということである。

なお、“考え方”としての意味形態はこのような意味論的なコツ表現をもたらす一方で、言おうとすることの意味がそこで使用されている単語や句、文章自体の分析では分からないような表現の仕方、すなわち、語用論的な言語表現⁵⁹を生じさせることもある。語用論とは、発せられることばの意味を会話の場面や状況に即してとらえようとする、あるいは使用することばや表現とそのときの状況から発生する意味を扱う学問分野で、pragmatics と呼ばれる。この場合、「文の意味が文脈と無関係に成立する記述的意味に対応しているのに対し、発話の意味は、記述的でない意味にも対応している」（133：115 頁以下）。語用論的な表現の場合、コツに関わる動作が直接言い表されないことが多い。この場合に用いられることばや表現には、文字通りのことばの意味が失われていない状況でそこに新たに技術的な意味が付加されたり、あるいはまた、本来の意味が失われてしまい、そこに比喩的な意味を生じさせるなど、多彩なパターンがある。例えば、跳馬の着手のポイントを「ぶつかりに行く」という表現で言うような場合である。この場合には、「ぶつかる」というのは技術的な意味で言っているものであり、このときには「ぶつかる」が「ぶつかる」という本来の意味を失っている。

このようにコツと言語表現の間に介在する意味形態は、学習者がコツとして何を強調したいのか、どのように強調したいのかといったことと関わり、多彩な意味論的な表現や語用論的な表現を生じさせる。

4. 特殊なコープラの採用

コツの言語表現では、「AはBである」あるいは「AでなければBはできない」といった、AとBの関係を結びつけて表される命題の表現形式が基本になっている。この場合、通常、述語が主語に属することを表す繫辞（コープラ）が使用される（「・・・は・・・である」あるいは「・・・は・・・ではない」ということば：161：247 頁）。例えば、「け上がりで大切な（A）

⁵⁹なお、本論では、まずもって意味論的表現を考察対象としており、この語用論的表現の詳細な問題には立ち入らない。

は肩角度を減少させること（B）である」とか、「鉄棒の懸垂振動ではあふりが（A）重要（B）である」など。すなわち、ここには「け上がりの技術（A）— 肩角減少技術（B）」、「肩角減少技術（A）— 重要（B）」、「懸垂振動（A）— あふり技術（B）」、「あふり（A）— 重要（B）」という関係が示されていると見ることができる。

佐藤は言語理論（レトリックの意味論）の立場から、このようなコープラの問題を取り上げ、とくに制限的コープラや拡張的コープラ的作用について考察し、このような形式で表される文ないし単語の意味には揺らぎないし弾性が生まれることを指摘している（161：247 頁以下，111：101 頁以下）。佐藤は、次のような例で、このことを示している。

a. 「人間は動物である。」

という文を基準として考えた場合、必ず

b. 「人間は動物にすぎない」（制限的コープラ）

c. 「人間は単なる動物ではない」（拡張的コープラ）

という二つの文を作ることが可能になるという。佐藤によれば、およそ「何かが何かである」と言えるような場合には、このような制限的コープラや拡張的コープラ（「～にすぎない」「単なる～ではない」など）はいつでも使用可能である（161：255 頁）。この場合、a に出てくる「動物」ということばの意味は、図 10 に示されているように、生物でしかも動物に属するという意味では「動物₁」の意味であるが、b の表現をした場合、この「動物」はもちろん動物に属するという意味をもつので「動物₁」を意味するだけであるが、人間以外の動物という意味の「動物₂」を排除して、あくまで「動物だ」という点を強調しようとする表現である。逆に、c の表現の「動物」は基本的に動物以外の人間を強調する「動物₂」を意味するものの、やはり動物に属するという点を排除してはいない表現である。

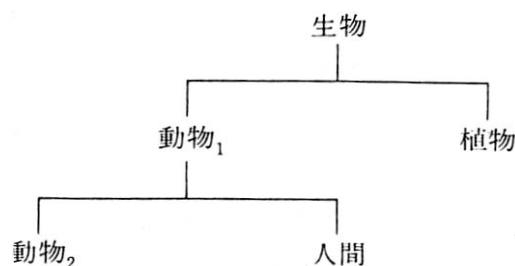


図 10 弾性的な意味

こうした制限的コープラと拡張的コープラといった特殊なコープラを用いた言語表現は、語の意味を弾性状態のまま実現する装置であるという（161：252 頁）。このような表現の場合、そこには意味が伸縮したり弾性の状態、あるいはゆらいだ状態にあると佐藤は指摘する。すなわち、この動物の表現で言えば、例えば、b の表現は、言い表そうとする意味が「動物 1」を基準にするものの、そのままでは「動物 2」まで伸びそうな意味を「動物 1」に引き戻そうとした表現だという。言い換えれば、意味はあくまで「動物 1」の意味のままであるが、その意味が「動物 2」に移るのではなく、瞬間的に「動物 2」に意味がかぶるという現象が起こるのである。特殊なコープラを使用することによって、このような意味のゆらぎ現象、あるいは、弾性や伸縮といった現象が起きるのである。また、このような言語表現形式は、理論的には図 11 に示したように終わりなく続くという（161：265 頁）。

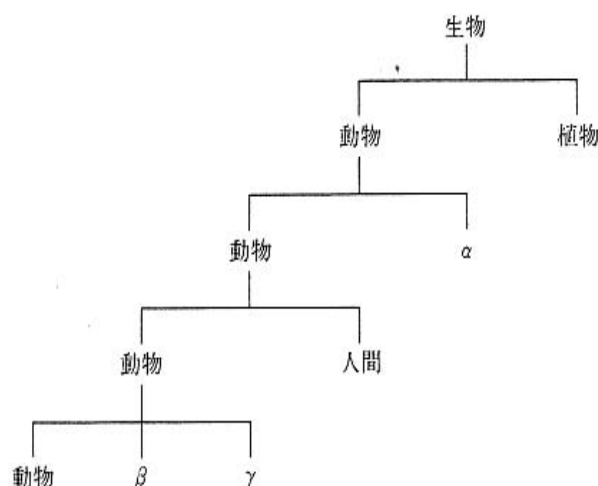


図 11 意味の階層

すでに指摘したように、制限的、拡張的な特殊なコープラ使用の表現形式は、「A は B である」という通常のコープラ使用の表現において言い表される意味が基準とされる。そして、特殊なコープラ使用の表現で言い表されるときには、そのときの意味がある視点から特徴づけられるようになる。この特徴づけられる意味を取り上げるというときには、すでに述べた意味形態（考え方）も機能する。通常のコープラ使用で言い表される意味を基準として、そこにある特別な意味を言おうとする場合に、その意味形態が機能して、特殊なコープラが使用されるのである。言おうとするものの意味に揺らぎや弾性、伸縮といった現象が起きるのは、このときである。話者が表現したい意味は、このような特殊なコープラを使用することによってじょじ

よに話者が考えている意味に近づいていくのだと言えよう。

このことを佐藤は次のように述べている。「日常的でおぼろげな有標感覚は、制限的コープラや拡張的コープラによって《じっさいに》意味論的有標性として分節されることになる」(161 : 256 頁)。つまり、こうした表現をすることによって、ある人にとってあることがある意味をもつ特別な標識をもつこと（有標）⁶⁰になり、次第にそこで言われている意味が姿を現すようになってくるということである。

この特殊なコープラの採用という観点から、われわれがスポーツにおいてコツを言語表現したり、あるいは動感表現をするといったときの言語表現の問題を考えてみよう。

特殊なコープラを用いたコツの言語表現形式は、いわば実際に体験したコツの意味核を表そうとして出てきた表現であると言える。このコツを普通のコープラ（「～である」）を用いて表現したり内言レベルでそう考えていても、例えば、「今の自分の手の＜突き＞は単に＜突いている＞だけだ！」「大切なのは＜突き＞でも、単に＜突き＞放せばいいというものではない！」「蹴るには蹴るんだけど、こういう蹴り方ではない！」「あふると言っても、このあふりは違う！」など、自分の動きについて、反省的に発言されることになる。

われわれが実際に運動を体験していく中でコツを言い表そうとする場合、もちろん、「鉄棒の振動（スイング）はあふることが大切だ」、「大切なのは、この局面の最後のところで握りを素早くずらすことである」というように、普通のコープラを採用した表現を用いることは可能である（基準の意味）。しかし、感じているコツをもっと詳しく言い表し、的確に示そうとする場合には、「今の上体の前傾は形だけでよくなかった！」「こうやって、単に腰を回転させるだけではだめです！」「背中を丸くするといっても、こんな恰好は単に背中を丸くしているだけです！」などというように、特殊なコープラを採用した表現をしていくことも多い（基準となる意味の中で主張したい意味を強調する）。

このように考えてくると、われわれは運動の実践現場において、学習者や選手としてコツを表現しようとする場合、その本質に迫ろうとする（そのコツについて感じ取った意味を言おうとする）と、特殊なコープラを採用する。このとき、そこで言おうとするコツの意味に弾性や伸縮が生まれる。そこでは、言おうとするコツの意味はそのとき一瞬、基準となる意味と感じ

⁶⁰ 標識とは、一般には、語などについて文法的機能を示す形態素をいう。例えば、格助詞、接尾辞、アクセント、語順などである。そして例えば、語形上、特徴的な標識で示されるなら有標と呼び、標識を用いない、あるいは表現上基準となるものを無標と呼ぶ。例えば、lion（雄のライオン）と lioness（雌のライオン）では、前者が無標、後者が有標であり、高さ／低さといった場合、通常は「高さ」という表現が採用されることが多く（例えば、一般に「この塔の高さはどのくらい？」とは言いが、「この塔の低さはどのくらい？」とは言わない）、この場合は高さが無標、低さが有標となる。

取った意味との間をゆれるという弾性的現象が現れる。逆に言えば、コツを言い表すということとは、この意味のゆらぎ現象を前提とした表現をすることになる。

コツの言語表現は多様であり、状況によっては普通のコープラではその本質を言い表せないことが多い。そうしたとき、学習者がコツを言い表す際にある幅や弾性をもった表現をすることがある。特殊なコープラはそうしたコツの意味を弾性的あるいは伸縮的に表し、コツの内容に迫っていかうとする機能をもつ。すなわち、体験し出会ったコツは直接的表現で言われることがあっても、その本質は揺らぎや弾性現象を起こすような特殊なコープラを採用した表現の中で、はじめてその姿を現してくると言えよう。

第3章 第Ⅲ部のまとめ

第Ⅲ部では、体験したコツを言語化する発話の基本構造が示されるとともに、コツの言語表現の意味論的構造が明らかにされた。

ヴィゴツキーの内言論を拠り所にすると、体験して発生したコツは直ちに外言として表現されるのではなく、少なくとも、短縮された速記ことばである「内言」を経由してから外言（外的言語）に移行する（発話）。発話される場合、体験したコツは名詞や動詞、形容詞などの品詞を用いて言い表されるが、時枝の文法に従えば、この発話文は「詞」と「辞」の構成であり、発話者のコツに対する（微妙な）考え方はこのうちの「辞」によって表される。また、このコツの発話は断片的な表現であり、説明しようとするとその内容は抽象化されること、そして発話はパトス論理で語られることが明らかにされた。

このような発話の基本構造を前提としては、以下のような意味論的構造をもつことが明らかにされた。すなわち、コツの言語表現は意味論的表現であることが多く、その場合、基本的には、言語表現時に用いられる単語自体の意味がコツの内容を表すことになる。しかし、コツの言語表現時には、そこで用いられる単語はただその単語自体の意味をもつだけではなく、機能性（使用される単語が主観的な行為という視点から語られているということ）、動感束縛性（単語は動感を背景にして語られているということ）、意義素の変質性（本来もっている当該のことばの意味が変わっているということ）、虚構性（任意の立場からことばが作り出されているということ）といった性質をもつ単語として使用されているということが明らかにされた。また、コツのこの意味論的表現の形式は言おうとすることと実際の言語表現間に介在する意味形態（語る人の考え方）によって決まること、さらに、コツの表現時には、基準となるコツの意味を前提とした上で、その意味のさらに強調したい意味を強調しようとして（どこに力点を置くかの違い）、コツの内容を弾性的、伸縮的に表す表現形式（特殊なコーブラを使用する形式）が採用されるということが明らかにされた。

結 論（コツの言語表現の構造研究の意義と今後の課題）

本論の問題意識と着眼点の特徴は、コツについて学習者自身の語ることば、すなわち学習者の発する動感述語（述語形態の動感言語）としての創発言語にはスポーツの技術を解明していく上できわめて重要な内容が含まれることに注目し、技術は学習者自身が自らのコツについて語ることば（創発言語）の分析を通して明らかにされるという考え方をとっているところにある。この考え方から、技術は意識現象としてのコツを前提としていて、そこから言語によって紡ぎだされる（構成される）ことによって現れる「形」（やり方の図式）であるというのが本論の基本認識である。そして、このような考え方は創発言語の分析から技術解明をしていこうとする技術分析法の構想へとつながっている。ただし、そうした技術分析法が具体的に提案されるためには、創発言語自体の表現構造が明らかにされる必要がある。しかし、このようなコツの言語表現の構造を解明しようとした試みはこれまで見当たらない。

そこで、本論は、上記した認識に基づいて、発生運動学の立場に立つとともに言語学的な視点から、学習者は自ら体験し出会ったコツをどのようにことばにして言い表すのかという、学習者のコツの言語表現時の表現の仕方やことばの使い方の構造を明らかにすることを目的とした。

したがって、本論で研究対象となるのはことばであるが、このことばはコツを語るための特殊な動感言語であり、それは学習者自身が体験によって出会ったコツに関する固有の動感を背景にもつ。本論では、この学習者が自らのコツについて語ることばを、金子の用語を用いて創発言語と呼んだ。

この創発言語の構造を明らかにするためには、学習者によって語られる内容であるコツ自体の性質が明らかにされていなければならない。こうした考えから、本論は、以下のように構成された。すなわち、本論は、スポーツにおけるコツの問題性とコツの概念について検討した第Ⅰ部、そのコツの体験構造を明らかにするとともに、コツと言語との関係を考察した第Ⅱ部、そしてそのコツの発話（言語表現）の構造を考察した第Ⅲ部から構成されている。なお、本論は発生運動学の立場に立っているので、本論の内容理解のためにはこの発生運動学を理解しておくことが必要であるとの立場から、緒論において、この発生運動学の学問としての発展経緯と方法論的特徴を述べた。

本論で展開した内容をまとめると、以下のようになる。

第Ⅰ部では、コツと言語の問題に入っていく前提として、“できる”ということを出発点と

し、スポーツにおいてこの“できる”ということがどのような問題性をもつのか、それがコツとどのような関係をもつかが、まずもって考察された。この“できる”ということは練習を通じてもたらされる学習者自身の運動の状態ないし現象である。本論でいうこの“できる”は能力表現の“できる”の意である。この能力表現としての“できる”という状態や現象に対して、本論では、そこに努力性、洗練化志向性（ゲーテ）、不完全の完全/不安定の安定（澤潟）、パトス性（ヴァイツゼッカー）といった本質的特性のあることが明らかにされた。この“できる”は実存としての人間が主体的に取り組んで獲得するものである。すなわち、“できる”という状態や現象はそうした実存の視点から取り上げられなければならない。そしてこのような“できる”という状態や現象がもたらされるときには、妥当性、可能性（ハイデガー）、配視性（ハイデガー）を特性とするコツとの出会いが生まれることが明らかにされた。

このコツは技術論において技術と関係して取り上げられることがあったとしても、これまでそれほど積極的な関係で評価されてはこなかったし、スポーツ科学においては技術の研究はあってもコツというものが研究対象に取り上げられることはほとんどなかった。しかしコツは、他方で、「私のコツ」（私のやり方）→「われわれのコツ」（共通感覚的図式技術／公共的なやり方）という金子の認識に見られるように、技術と密接な関係を有するものとして認識される必要がある。

このような立場で、本論では、コツは以下のようなものとして特徴づけられた。すなわち、コツは“できる”ということ（実存の現象）との関係の中から学習者の中に生じてくる運動感覚の意識現象であり、運動感覚的意味核とみなされる。そして、それは主観的であると同時に普遍的であるような性質（カント、フッサール、ベルグソン）をもつ。さらに、このコツは直観（ベルグソン）の中で絶対ゼロ点（フッサール）によってとらえられるもので、それはモノイド的性質をもつ（「モノイドコツ」（金子））。そして、このコツは個人技法（個人的なやり方）を成立させるとともに、技術（公共的なやり方）へと発展していく可能性を内包していることが述べられた。

第Ⅱ部では、このコツをわれわれはどのように体験して言語との関係を作っていくのかが考察された。考察の結果、以下のことが明らかにされた。すなわち、精神医学者の安永の体験理論に基づけば、われわれが実際に運動を行う中でコツを取り上げる体験は常に＜私＞の側からの把握という構造（『パターン構造』）をもっていること、このコツの把握には前言語的側面があり、ことばが関わらない把握段階があること、そしてメーン・ド・ビランの4つの意識位相（affection、sensation、perception、aperception）の考え方に基づけば、コツがこのう

ちのどの意識位相で取り上げられるかによって、コツとして言い表される内容にもその表現の仕方にも違いが出てくるということである。

第Ⅲ部では、まず、体験して獲得した（出会った）コツの発話の基本構造が明らかにされた。この基本構造は、以下のようにまとめることができる。ヴィゴツキーの内言論に基づくと、体験したコツは最大限に省略され短縮された速記ことばである内言によっていったんとらえられる。そして、その内言を経由してはじめてコツは発話（外言的表現）される。この発話の基本構造によってコツが発話されるとき、コツは名詞や動詞、形容詞、副詞などの品詞によってその内容が構造化される。そして国語学者の時枝の文法に基づけば、この構造化された発話文は「詞」と「辞」によって構成されており、そのうちの「辞」によって発話者のコツに対する考え方や価値づけが示される。また、コツの発話の表現は断片的であり、コツを説明しようとするとその内容が抽象化されていること、そしてコツはロゴス論理ではなくパトス論理で語られるということが明らかにされた。

そして、このような発話の構造を前提として、コツの言語表現の意味論的構造が以下のようにまとめられた。コツを言い表そうとするときには、用いられる単語は基本的にはその単語独自の意味の視点から使われる。しかし、コツの言語表現時には、実際には単語は以下のような性質をもつものとして用いられる。すなわち、その単語が用いられるときには単語は発話者の行為という視点から使われ（機能性）、固有の動感というものを背景にしていること（動感束縛性）、言語表現されるときには単語本来の意味に変化が生じることがあること（意義素の変質性）、さらに発話者が自己の独自の体験から独自のことばを作り出す（虚構性）ことがあるという性質である。コツの言語表現時には、意味論的表現として単語はこのような用いられ方をする。さらに、コツの言語表現においてどんな表現形式がとられるかは、言おうとすることと実際の言語表現の間に介在する意味形態（語る人の考え方）によって決まるという構造が明らかにされるとともに、コツの言語表現時に体験したコツの内容を的確に表そうとすると、特殊なコープラを使用した表現形式（弾力的な表現）が採用されるということが明らかにされた。

本論では、以上のように、学習者が自らのコツを言語表現（発話、外言的表現）するときの構造が明らかにされたが、このようなコツの言語表現は学習者が自ら体験し直観した世界を示していること、またその言語の表現には意味論的構造があることを明らかにしたことは、本研究の成果である。

このように本論は、学習者自身が自己の動きからコツについて発話する“ことば”に着目した研究であるが、この学習者自身のことばは実際に学習者が体験した内容の“動感”表現なの

であり、それは運動実行上重要な役割を果たす実際の感覚や意識内容と直接的な関わりをもっている。つまり、学習者のこのことばを取り上げることは、学習者の動感を取り上げることを意味している。従って、ことばを対象とした本論は、本質的には動感の内容や動きかたの意味を究明する方法論（創発分析）に寄与する研究である、ということが言える。

しかしこれまで、コツの研究や技術研究の中で、この学習者自身の発することばを動感言語ないし創発言語として取り上げ、その動感内容に踏み込み、そこで用いられる言葉や表現の言語学的分析をして、動きかたの意味をとらえようとする試みはなかった。

他方で、わざ言語や技術の運動表記としてのことば（運動の技術言語）には目が向けられてきて、運動現場におけるその重要性も主張されてはいる。例えば、「押す」「引く」「胸を含む」「つつかける」などのことばないし表現は、まずは、動きを発生させることに寄与するという意味では無くてはならないものであり、さらに言えば、「腰を曲げる」と「腰をとる」、「鉄棒をはじく」と「鉄棒を離す」といった表現の差は、運動実施に大きな違いを生じさせるものである。すなわち、これらの表現の違いは学習者から見て動感の違いとなって運動の達成状態を大きく左右する。

このようなわざ言語ないし運動の技術言語としてとらえられることばは、もちろん学習者が発する創発言語と密接な関係がある。しかし、本論が創発言語として取り上げた学習者の発することばは、学習者が自ら体験した動感ないし動感運動の内容をコツとして言い表したものであるが、このことば自体をそのままわざ言語や運動の技術言語として理解することはできない。両者の違いは、以下の点にある。

- ・わざ言語：学習場面や指導場面で指導者や学習者が用いる、記述言語や科学言語とは異なる、学習者に動きを発生させるのに寄与しうる可能性のある比喩的なことば（38：93 頁以下）
- ・創発言語：学習者自身が責任を持ち、実際にそれによって動きを発生させたと学習者本人が思っていて、学習者自身によってコツとして語られることば

すなわち、両者はコツとして機能していることが考えられることばという意味では同じであるが、わざ言語が“できる”ために用いられる比喩的言語表現であり、必ずしも直観言語であるとは言えないのに対して、本論で取り上げた創発言語は自ら行った動きについて“できる”という点からの学習者自身が直観した内容を、学習者自らがコツとして言い表している直観言語である、という点に違いがある。

本論は、創発言語のこの直観性に着目してその言語表現の構造を明らかにしようとしたもの

である。このコツの言語表現の構造解明は、コツの分析（抽出）や技術分析の方法に寄与するものである。

例えば、学習者自身のことばは実際の体験、意識、動感、動きの意味と直接結びついていて、良い成果が出たときのことばや逆にうまくいかなかったときのことばには、直接的また間接的に、運動する際の意識しておくべき、感じておくべき、また注意しておくべき重要な動感内容が含まれていると考えられる。こうした考えに従えば、この学習者が語ることばを分析することは、少なくとも、良い動きかたを目指して意識したり注意すべきポイント、すなわち、コツを探究していくことを意味している。ただし、「学習者がそう言ったから」「学習者がそうしたことばを使い表現したから」という理由だけで、そこで使われたことばや表現で構成される内容がコツと言えるわけではない。

課題解決のための良い動きかたを見つけ出しコツに迫るには、学習者自身が直接体験した学習者自身にとっての動きかたの意味を取り上げなければならない。学習者自身が発話することばや表現をとらえ、そうしたことばの使用や表現をとらせた学習者に発生した動感を分析する、すなわち発生分析することが不可欠になる（66：73 頁；69：90 頁以下）。このことは、例えば、学習者がコツとして「腰をかぶせること」と言った場合、そのことばで言い表そうとして学習者に生じている動きかたの意味を取り上げようとすることを意味している。

本論はこうした考え方から取り組まれた研究であり、技術研究が動きの外的分析（画像解析や力の測定、また運動形態の単なる図形的分析等）ではなく、コツとことばや言語表現との深層の構造に目を向けて、ことばや表現の仕方に着目して動感を分析（発生分析）してコツの内容を明らかにしようとする技術分析法に道を拓こうとするものである。

このように、コツの言語表現（創発言語）の構造に関する本論は技術分析の方法に寄与しようとするものであるが、本論の成果はそれだけでなく、学習者に動きを発生させるという技術指導（促発指導）を行う際の重要な視点を提供するものである。

すなわち、ことばを通じてコツに迫るということは技術分析のためだけではなく、学習者に最適な技術指導を行い、より良い動き（動感）を発生させる場合にも大きく寄与するものである。指導者は学習者の運動の感覚や意識、すなわち、“動感”をとらえていなければ技術指導はできない。技術指導では、指導者は学習者が自らの動きに関して発話することばの意味をとらえていることが必要である。つまり、学習者の発話することばや表現から、学習者のとらえている動きかたの意味を理解することが、技術指導では大前提なのである。

例えば、指導者が学習者に、鉄棒のけ上がりで足を近づけるときの腕の使い方の感じ（ポイ

ント)を聞いて、学習者が“鉄棒を引く”あるいは“鉄棒を引き寄せる”と言った場合、指導者はこの学習者のことばや表現によって学習者がどんな動感に出会い、どんな動感の意識状態であることが良いと思っているのかをとらえなければならない。すなわちこの場合、学習者が言った“引く”“引き寄せる”ということばや表現自体の単純な理解でいいのではなく、このときのことばや表現がそのときの学習者の動き(動感)とどのような関係を持ち、どのような意味をもって取り上げられているのかの理解が重要なのである。

学習者が発することばや表現がどんな動感の内容を意味しているのかをとらえてこそ、指導者は有効な助言をすることができるし効果的な技術指導(促発指導)ができる。その意味で、技術指導では言語表現の構造をとらえておくことが不可欠なのである。このように、本論は技術指導をする際にも大きく寄与する内容を提供するものである。

このように、学習者の中に発生しているコツを浮き彫りにしその内容を把握するためには、学習者が語ることば(創発言語)に目を向け、それを分析しないわけにはいかない。ただし、コツがそもそもことばによって具体的に、明快に言い表されるようなものではないことは、本研究で示したように、多様な表現がとられることから首肯されよう。また、学習者が発話する言語表現とコツ(運動感覚的意味核)との関係は、直接的であることも(意味論的表現)間接的であることもある(語用論的表現)。このことは、学習者のコツに関して発話することばの分析は意味論的分析も語用論的分析も必要になることを意味している。コツの言語表現の分析は単純に発話されたことばや表現自体の分析(意味論的分析)で済む場合もあるし、発話の意図を把握するために、ことばの使い方や表現の仕方をそのことばや表現の背景や状況から分析すること(語用論的分析)が必要な場合もあるからである。今後は本論で指摘した意味論的構造だけでなく、コツ表現の語用論的構造の解明も課題になろう。さらに、すでに示したように、指導者は技術指導する際に、運動のコツを取り上げ、それを特殊なことばを用いたり言語表現をして表そうとするが(わざ言語、運動の技術言語)、そうしたことばや表現を促発言語としてとらえ、その促発言語の表現構造に関する解明も必要である。この促発言語の表現構造の解明も、今後、精力的に取り組まれるべき研究課題である。

引用・参考文献

- 1) 安達俊亨, 佐野 淳: 平行棒における「前振り上がり後方屈身 2 回宙返り腕支持」の段階練習に関する運動学的考察, スポーツ運動学研究, 19, 55-70, 2006.
- 2) アレクペロフ, C.A. (加藤澤男監修): ソ連体操トレーニングシリーズ 1 平行棒, ベースボールマガジン社, 1978.
- 3) 浅見俊雄: スポーツトレーニング, 朝倉書店, 1985.
- 4) 朝岡正雄: スポーツ運動学序説, 不昧堂, 1999.
- 5) Autorenkollektiv: Sportliche Motorik — Standpunkte zu Gegenstandsbereich, Aufgabenstellung und Einordnung, Theorie und Praxis der Körperkultur, 7, 524-532, 1976.
- 6) ベルグソン, H. (矢内原伊訳): 思想と動くもの, ベルグソン全集 7, 白水社, 1981.
- 7) ベルグソン, H. (真方敬道訳): 創造的進化, 岩波文庫, 1984.
- 8) ベルグソン, H. (中村文郎訳): 時間と自由, 岩波文庫, 2001.
- 9) Bernett, H. (Red.): Terminologie der Leibeserziehung, Verlag Karl Hofmann Schorndorf, 1962
- 10) Bernett, H. (Red.): Zum Begriff der Bewegung, Karlhofmann Schorndorf, 1966.
- 11) Blaster, P., Vorhölter, H.: Die sportliche Technik als Gegenstand des motorischen Lernens, Theorie und Praxis der Körperkultur, 5, 348-353, 1988.
- 12) Buytendijk, F. J. J.: Allgemeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung, Springer-Verlag Berlin-Göttingen, 1956.
- 13) Buytendijk, F. J. J.: Mensch und Tier, Rowohlt, 1958 ; (浜中淑彦訳), 人間と動物, みすず書房, 1977.
- 14) Christian, P.: Vom Wertbewußtsein im Tun, In: Über die menschliche Bewegung als Einheit von Natur und Geist, Verlag Karl Hofmann, S.19-44, 1963.
- 15) Fetz, F.: Grundbegriffe der Bewegungslehre der Leibesübungen, Linpert-Vrelag, 1969.
- 16) Fetz, F.: Bewegungslehre der Leibesübungen, Österreichischer Bundesverlag, 1989. ; (金子明友, 朝岡正雄共訳), 体育運動学, 不昧堂, 1979.
- 17) ゲーテ, W. (木村直司, 高橋義人他訳): 『ゲーテ全集 14』, 潮出版社, 1980.

- 18) ゲーテ, W. (高橋義人編訳, 前田富士男訳): 自然と象徴, 富山房百科文庫, 1962.
- 19) ゴールドシュタイン, K. (村上仁, 黒丸正四郎訳): 生体の機能, みすず書房, 1983.
- 20) Grosser, M.: Ansätze zu einer Bewegungslehre des Sports, Sportwissenschaft, 4, 370-392, 1978.
- 21) Grosser, M., Neumaier, A.: Techniktraining, BLV-Verlagsgesellschaft mbH, 1982.; (朝岡正雄, 佐野淳, 渡辺良夫訳), スポーツ技術のトレーニング, 大修館書店, 1995.
- 22) Göhler, J.: Von der Übung, Turnen+Sport, 12, 272-274, 1974.
- 23) Göhner, U.: Einführung in die Bewegungslehre des Sports, Hofmann-Verlag, 1992.; (佐野淳, 朝岡正雄監訳), スポーツ運動学入門, 不昧堂出版, 2003.
- 24) 服部四郎: 意味, 岩波講座哲学 11 言語, 岩波書店, pp.283-338, 1968.
- 25) ハイデガー, M. (原祐, 渡辺二郎訳): 存在と時間, ハイデガー 世界の名著 74, 中央公論社, 1995.
- 26) ヒポクラテス (小川政恭訳): 古い医術について, 岩波文庫, 1984.
- 27) 福田精: 運動と平衡の反射生理 第2版, 医学書院, 1981.
- 28) ヒューム, D. (土岐邦夫訳): 人生論, ロック・ヒューム 世界の名著 32, 中央公論社, 1995.
- 29) フッサール, E. (小池稔訳): 厳密な学としての哲学, ブレンターノ・フッサール 世界の名著 51, 中央公論社, 1981.
- 30) フッサール, E. (立松弘孝訳): 現象学の理念, みすず書房, 1982.
- 31) フッサール, E. (渡辺二郎訳): イデーン I - 1, みすず書房, 1983.
- 32) フッサール, E. (細谷恒夫, 木田元訳): ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学, 中央公論新社, 2001.
- 33) フッサール, E. (立松弘孝, 別所良美訳): イデーン II - 1, みすず書房, 2001.
- 34) フッサール, E. (谷徹訳): ブリタニカ草稿, ちくま学芸文庫, 2004.
- 35) Hay, J.G.: The Biomechanics of Sports Techniques, 3.Edition, Prentice-Hall London, 1985.
- 36) 飯田賢一: 一語の辞典 技術, 三省堂, 1995.
- 37) 池辺義教: ベルグソンの哲学, 第三文明社, 1976.
- 38) 生田久美子: わざから知る, 東京大学出版会, 1987.
- 39) 伊藤清良: 平行棒における「腕支持前振り上がり片手支持1回ひねり倒立」のコツに関する考察, スポーツ運動学研究, 19, 85-96, 2006.

- 40) 伊東俊太郎：科学と現実，中公叢書，1981.
- 41) 神宮英夫：スキルの認知心理学，川島書店，1993.
- 42) 金谷麻理子：「コツ」の言語表記とその問題性について，スポーツ運動学研究，16，27-35，2003.
- 43) 金子明友：技の発展におけるモルフォロジー的一考察，日本体操協会研究部報，10，4-12，1966.
- 44) Kaneko, A.: Zur Morphologie der Turnkunst, Olympische Turnkunst, 5, 4-7, 1967.
- 45) 金子明友：運動技術論，岸野雄三他（編著），序説運動学，大修館書店，pp.89-116, 1968.
- 46) 金子明友：体操競技教本Ⅱ 鉄棒編，不昧堂出版，1970.
- 47) 金子明友：マイネルの「運動学」とは何か，体育科教育，18(3)，44-46，1970.
- 48) 金子明友：体操競技のコーチング，大修館書店，1974.
- 49) 金子明友：器械運動の技能と技術および技法，新体育，45(11)，33-35. 1975.
- 50) 金子明友：体操競技教本Ⅴ 床運動編，不昧堂，1977.
- 51) 金子明友：運動学からみたスポーツ，朝比奈他（編著），スポーツの科学的原理，大修館書店，pp.263-297, 1977.
- 52) 金子明友：マット運動，大修館書店，1982.
- 53) 金子明友：運動の技術論，女子体育，25(2)，2-6，1983.
- 54) 金子明友：鉄棒運動，大修館書店，1984.
- 55) 金子明友：運動技術の今日の問題性，体育科教育，33(11)，20-22，1985.
- 56) Kaneko, A.: Prolegomena zur Methodik der sporttechnischen Neugestaltung. 筑波大学体育科学系紀要，8，101-113，1985.：（朝岡正雄訳）スポーツ技術創作の方法論序説，運動形態学研究会，3，37-50，1985.
- 57) 金子明友：運動観察のモルフォロジー，筑波大学体育科学系紀要，10，113-124，1987.
- 58) 金子明友：体育学習の運動学的視座，保健・体育科教育論，東信堂，pp.55-67，1988.
- 59) 金子明友：「わかる」と「できる」の間，学校体育，47(11)，10-13，1994.
- 60) 金子明友：スポーツモルフォロジーとは何か，スポーツモルフォロジー研究，1，1-24，1995.
- 61) 金子明友：モルフォロジー，運動制御と運動学習，協同医書出版社，pp.365-384，1997.
- 62) 金子明友：コツの構造（上），スポーツモルフォロジー研究，4，1-16，1998.
- 63) 金子明友：コツの構造（下），スポーツモルフォロジー研究，5，1-22，1999.

- 64) Kaneko, A. : Zur Bedeutung der ästhesiologischen Morphologie von Prof. Kurt Meinel, スポーツモルフォロジー研究, 5, 34-44, 1999.
- 65) Kaneko, A.: Ästhesiologische Bewegungsanalytik des Sports, スポーツモルフォロジー研究, 6, 114-167, 2000
- 66) 金子明友：技の伝承ゼミナール わざの伝承, 伝承, 1, 70-88, 2001
- 67) 金子明友：わざの伝承, 明和出版, 2002.
- 68) 金子明友：運動感覚知の公道化, 伝承, 2, 1-28, 2002.
- 69) 金子明友：身体知の形成（上）, 明和出版, 2005.
- 70) 金子明友：身体知の形成（下）, 明和出版, 2005.
- 71) 金子明友：身体知の構造, 明和出版, 2007.
- 72) 金子明友：スポーツ運動学, 明和出版, 2009.
- 73) カント, I. (篠田英雄訳)：判断力批判上, 岩波文庫, 1996.
- 74) 風間喜代三, 上野善道, 松村一登, 町田健：言語学—第2版—, 東京大学出版会, 2004.
- 75) 木村敏：あいだ, 弘文堂, 1988
- 76) 木村敏：ゲシュタルトクライス, 運動制御と運動学習, 協同医書出版社, pp.351-364, 1997.
- 77) 岸野雄三：倒立源流考, 体育の科学, 27(2), 76-82, 1977.
- 78) 岸野雄三：運動学の対象と研究領域, 岸野雄三他(編著)：序説運動学, 大修館書店, pp.1-47, 1968.
- 79) 小林一敏：運動技術のキネシオロジー, 体育科教育, 16(2), 13-15, 1968.
- 80) 小林一敏：運動技術の概念規定の吟味／その4, 体育科教育, 21(12), 56-58, 1973.
- 81) 古賀 宏：医療における技術について（1）, 九大医療短大部紀要, 13, 45-50, 1986.
- 82) 九鬼周造：文藝論、岩波書店、1949.
- 83) 九鬼周造（全注釈 藤田正勝）：「いき」の構造, 講談社学術文庫, 2003.
- 84) 国広哲弥：意味の構造と概念の世界, (柴田武編著)：言語の構造, 大修館書店, pp.219-254, 1980.
- 85) 国広哲弥：意味の諸相（ELEC 言語叢書）, 三省堂, 1976.
- 86) Klemm, O.: Zwölf Leitsätze zu einer Psychologie der Leibesübungen, Neue Psychologische Studien, 9, 385-398, 1938.
- 87) ランドグレーベ, L. (山崎庸佑, 甲斐博見, 高橋正和訳)：現象学の道, 木鐸社, 1996.

- 88) 町田健：日本語のしくみがわかる本，研究社，2006.
- 89) 町田健、靄山洋介：よくわかる言語学入門，バベルプレス，2007.
- 90) 町田健：日本語の正体，研究社，2008.
- 91) 眞岩啓子：造形芸術に見られるゲーテのメタモルフォーゼ，モルフォロギア，14, 59-73, 1992.
- 92) 牧野紀之：関口ドイツ語学の研究，鶏鳴出版，1987.
- 93) 真鍋良一：真鍋ドイツ語の世界ードイツ語の語法ー，三修社，1983.
- 94) Martin, D.: Grundlagen der Trainingslehre Teil I, Verlag Karlhofmann, 1979.
- 95) 松田岩男：運動技術の構造，岸野雄三他（編著）：序説運動学，大修館書店，pp.117-144, 1968.
- 96) 松下正明、浅井昌弘、牛島定信他（編集）：精神医学研究方法ー臨床精神医学講座 24 卷，中山書店，1999.
- 97) Meinel, K.: Morphologie der Bewegung, in: Kleine Enzyklopädie Körperkultur und Sport, Verlag Enzyklopädie Leipzig, S.111-113, 1960.
- 98) Meinel, K. : Bewegungslehre, Volk und Wissen Volkseigener Verlag, 1960. : (金子明友訳) : スポーツ運動学，大修館書店，1980.
- 99) Meinel, K., Schnabel, G.: Bewegungslehre - Sportmotorik, 9.,stark überarbeitete Auflage, Sportverlag Berlin, 1998.
- 100) マイネル, K. (金子明友訳) : 動きの感性学，大修館書店，1998.
- 101) 源了圓：型，創文社，1989.
- 102) 三浦つとむ：日本語とはどういう言語か，講談社学術文庫，2008.
- 103) 宮下充正：跳ぶ科学，大修館書店，1990.
- 104) 森田良行：基礎日本語 1ー意味と使い方，角川書店，1980.
- 105) 森田良行：日本人の発想、日本語の表現，中公新書，1999.
- 106) 森田良行：意味分析の方法，ひつじ書房，2001.
- 107) 森 直幹：動感画による地平分析の試み,伝承, 6, 1-12, 2006.
- 108) 森昭雄，工藤忠彦：体操競技における宙返りとひねりの反射生理学的研究，日本体操協会研究部報，64, 6-11, 1990.
- 109) 村上陽一郎：技術を考えるための予備的考察，（村上陽一郎編）：技術思想の変遷，朝倉書店，1981.

- 110)村上陽一郎：技術とは何か，NHK ブックス，日本放送出版協会，1986.
- 111)中村 明：日本語のコツ，中公新書，2002.
- 112)中村 豊：メンタルマップの現象学，古今書院，2004.
- 113)中村 豊：超越論的世界像－フッサール現象学の世界像－，空間・社会・地理思想，12，137-152，2008.
- 114)中村秀吉：時間のパラドックス，中公新書，1980.
- 115)中田基昭：教育の現象学，川島書店，1966.
- 116)南谷直利、北野与一：「稽古」及び「練習」の語誌的研究，北陸大学紀要，26，251-264，2002.
- 117)日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会：ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究－第2報－，平成13年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告，財団法人日本体育協会，2002.
- 118)西研：実存からの冒険，筑摩書房，1995.
- 119)西研：哲学的思考，筑摩書房，2001.
- 120)Neumaier, A., Ritzdorf, W.: Zum Problem der individuellen sportlichen Technik, Leistungssport, 5, 27-32, 1983.
- 121)澤潟久敬：医学概論－第二部 生命について－，誠信書房，1965.
- 122)澤潟久敬：個性について，第三文明社，1979.
- 123)澤潟久敬：ベルグソン哲学の素描，ベルグソン 世界の名著，64，中央公論社，1979.
- 124)澤潟久敬：アンリ・ベルグソン，中公文庫，1987.
- 125)大出 晃：思考と言語，岩波講座哲学 11 言語，岩波書店，pp.99-141，1968.
- 126)ポラニー，M.(佐藤敬三訳)：暗黙知の次元，紀伊國国書店，1988.
- 127)ポンティ，M. (竹内芳郎，小木貞孝訳)：知覚の現象学 I，みすず書房，1980.
- 128)プラトン (加来彰俊訳)：ゴルギアス，岩波文庫，1990.
- 129)Portmann,A.: Zoologie und das neue Bild des Menschen, Rowohlt, 1956. ; (高木正孝 訳)：人間はどこまで動物か，岩波新書，1979.
- 130)ライズィ，E. (鈴木孝夫訳)：意味と構造，講談社学術文庫，1994.
- 131)Röthig, P.: Rhythmus und Bewegung, Verlag Karl Hofmann Schorndorf, 1970.
- 132)榊原洋一：ヒトの発達とは何か，ちくま新書，1995.
- 133)佐久間淳一，加藤重弘，町田健：言語学入門，研究社，2004.
- 134)佐野 淳，中島光廣：体操競技技術のモルフォロジー的考察，筑波大学体育科学系紀要，7，

55-62, 1984.

- 135)佐野 淳：体操競技におけるフィルム分析に関する現象学的考察，筑波大学体育科学系紀要, 8, 85-92, 1985.
- 136)佐野 淳：スポーツ技術の抽出に関する問題性，鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編, 37, 115-129, 1986.
- 137)佐野 淳：体操競技における技の難易性に関する考察，鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 39, 103-125, 1988.
- 138)佐野 淳：運動学習における「運動の全体的把握」に関するモルフォロギー的考察，スポーツ運動学研究, 1, 27-42, 1988.
- 139)佐野 淳：指導者の運動解釈について，鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 40, 135-153, 1989.
- 140)佐野 淳：スポーツ運動の“運動形態”に関する一考察，スポーツ運動学研究, 2, 35-44, 1989.
- 141)佐野 淳：スポーツ運動技術の「発見」に関する主観構造について，鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編, 42, 51-77, 1991.
- 142)佐野 淳：スポーツにおける「技術」の形態学的視座，筑波大学体育科学系紀要, 17, 165-175, 1994.
- 143)佐野 淳：主体基準系の指定によるスポーツ運動理論の検討，スポーツ運動学研究, 7, 1-12, 1994.
- 144)佐野 淳：モルフォロギー的見地からみた運動の仕方の直観的内容について，スポーツ運動学研究, 8, 13-25, 1995.
- 145)佐野 淳：スポーツの動きの時空系，スポーツモルフォロギー研究, 2, 21-41, 1996.
- 146)佐野 淳：キネゲネシスの知．スポーツモルフォロギー研究, 3, 51-64, 1997.
- 147)佐野 淳：倒立のメタモルフォーゼ，スポーツモルフォロギー研究, 3, 75-88, 1997.
- 148)佐野 淳：スポーツ達成力と動きのかたち，筑波大学体育科学系紀要, 21, 77-86, 1998.
- 149)佐野 淳：動きの即興の発生論的地平，スポーツモルフォロギー研究, 4, 29-38, 1998.
- 150)佐野 淳：動きの先取りの構造，スポーツモルフォロギー研究, 5, 62-73, 1999.
- 151)佐野 淳：技術指導のスポーツ運動学的視座，21 世紀と体育・スポーツ科学の発展 2 ～日本体育学会第 50 回記念大会～，杏林書院, pp.140-146, 2000.
- 152)佐野 淳：スポーツ技術の運動感性学的考察，スポーツモルフォロギー研究, 6, 1-18, 2000.
- 153)佐野 淳：運動研究における発生分析論の異種性，伝承, 2, 29-42, 2002.

- 154)佐野 淳: コツと技術の関係に関する運動学的考察, スポーツ運動学研究, 16, 1-11, 2003.
- 155)佐野 淳: コツの言語表現に関するモルフォロギー的考察, スポーツ運動学研究, 17, 13-23, 2004.
- 156)佐野 淳: 技術分析の意味類型に関する現象学的考察, スポーツ運動学研究, 18, 1-11, 2005.
- 157)佐野 淳: スポーツ技術とコトバの規則, 伝承, 5, 71-96, 2005.
- 158)佐野 淳: ゲーテ形態学とスポーツにおける発生運動学的運動分析, モルフォロギア, 29, 45-62, 2007.
- 159)サルトル, J.P. (平井啓之、竹内芳郎訳): 情緒論素描, 哲学論文集, 人文書院, 1982
- 160)サルトル, J.P. (平井啓之訳): 想像力の問題, 人文書院, 1983.
- 161)佐藤信夫: 意味の弾性, 岩波書店, 1986.
- 162)佐藤誠: 「コツ」の発生に関するモルフォロギー的考察, スポーツ運動学研究 13, 31-39, 2000.
- 163)佐藤徹: 動きのコツ指導と運動感覚意識に関する運動学的研究, スポーツ方法学研究, 22, 157-160, 2009.
- 164)関口存男: 趣味のドイツ語, 三修社, 1979.
- 165)柴田義松: ヴィゴツキー入門, 寺子屋新書, 2007.
- 166)島村宗男: 発育発達と運動反射, 日本体操協会研究部報, 64, 1-5, 1990.
- 167)鈴木一彦: 時枝誠記 日本文法・同別記 (口語編), 東苑社, 1981.
- 168)鈴木孝夫: ことばと社会, 中央公論社, 1975.
- 169)鈴木孝夫: とばと文化, 岩波新書, 2008.
- 170)鈴木重行: 言語学の用語 パラディグマチックな関係とシンタグマチックな関係, 教育国語, 37, 128-129, 1974.
- 171)Starosta, W.: Das Lehren der Technik und die Technikverbesserung in den Individualsportarten, Leistungssport, 3, 40-44, 1988.
- 172)Straus, E.: Vom Sinn der Sinne, 2.Aufl., Springer-Verlag, 1956.
- 173)Straus, E.: Psychologie der menschlichen Welt, Springer Verlag, 1960.
- 174)高橋義人: 詩と科学との統合への道, 理想, 495, 20-31, 1974.
- 175)高橋義人: 「見る」ことの哲学, 理想, 593, 86-102, 1982.
- 176)高橋義人: 形態と象徴, 岩波書店, 1988.

- 177)高橋義人：動く形はいかに把握されるか，スポーツ運動学研究, 14, 1-13, 2001.
- 178)高橋由典：感情と行為，新曜社, 1996.
- 179)竹田青嗣：現象学入門，日本放送出版協会, 1989.
- 180)谷 徹：これが現象学だ，講談社現代新書, 2002.
- 181)寺門 伸：意味形態論—ひとつの考察，ドイツ語研究, 10, 21-26, 1984.
- 182)戸田正直：記憶とは何か，数理科学, 3, 5-13, 1980.
- 183)時枝誠記：国語学史，岩波書店, 1977.
- 184)時枝誠記：国語学原論（上），岩波文庫, 2007
- 185)時枝誠記：国語学原論（下），岩波文庫, 2007
- 186)時枝誠記：国語学原論統編，岩波文庫, 2008
- 187)Tross, R., Koch, S., Teuber, L. : Zur Verbesserung individueller Bewegungstechniken, Leistungssport, 1, 11-16, 1986.
- 188)ヴィゴツキー, L. S. (柴田義松訳)：思考と言語 下，明治図書, 1963.
- 189)Weizsäcker, V. v.: Gestaltkreis, Georg Thieme Verlag, 1973；（木村敏，浜中淑彦訳）ゲシュタルトクライス，みすず書房，1984
- 190)ヴァイツゼッカー, V. (木村敏訳)：生命と主体，人文書院, 1995.
- 191)ウォーコツプ, O.S. (深瀬基寛訳)：ものの考え方，講談社学術文庫, 1984.
- 192)Wiemann, K.: Die Körperstellreflexe und ihre Bedeutung für das Gerätturnen, Leibesübungen, 8, 15-20, 1965.
- 193)Wohl, A.: Philosophische Betrachtungen über Buytendijks Buch “Allgemeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung”, Theorie und Praxis der Körperkultur, 12, 1109-1119. 1957.
- 194)山口一郎：文化を生きる身体，知泉書館, 2004.
- 195)安永浩：概説，岩波講座 精神の科学 3—精神の危機—，岩波書店, pp.1-66, 1983.
- 196)安永浩：ファントム空間論，金剛出版, 1992.
- 197)安永浩：ファントム空間論の発展（安永浩著作集 2），金剛出版, 1992.
- 198)安永浩：症状論と精神療法（安永浩著作集 4），金剛出版, 1992.
- 199)安永浩：精神の幾何学，岩波書店, 1999.
- 200)山崎正一、市川浩（編）：現代哲学事典，講談社現代新書，講談社, 1970.